福岡県小郡市三沢所在

三沢遺跡内容確認調査

―簡保レクセンター跡地Ａ地区の内容確認調査―

小郡市文化財調査報告書第２６６集

２０１２

小郡市教育委員会

三沢遺跡内容確認調査　小郡市文化財調査報告書第２６６集　小郡市教育委員会　二〇一二

福岡県小郡市三沢所在

三沢遺跡内容確認調査

―簡保レクセンター跡地Ａ地区の内容確認調査―

小郡市文化財調査報告書第２６６集

２０１２

小郡市教育委員会

現在の三沢遺跡周辺航空写真（Ａ地区と三沢遺跡　福岡県教育庁提供）

三沢北中尾遺跡２地点出土銅斧片

序

小郡市では、平成22年11月に、福岡県立九州歴史資料館の移転・開館を迎え、市埋蔵文化財調査センターや県指定三沢遺跡などがひろがる西鉄三国が丘駅周辺が、豊かな歴史と文化、自然が一体化した市民の学びの場であり、憩いの場と位置づけ、文化の薫る地域づくりを目指しています。

今回、ここに報告します「三沢遺跡」は、県指定三沢遺跡に隣接する丘陵地であり、内容確認調査の結果、弥生時代の遺跡が存在し、県指定三沢遺跡と同時期、同様の集落跡が広がることが明らかとなりました。

調査にあたりましては、福岡県総務部財産活用課をはじめ、関係諸機関の援助を得ました。記して、感謝申し上げます。

平成24年３月31日

小郡市教育委員会
教育長　清武　輝

凡　例

１．本書は平成22年度に行った福岡県有地（簡保レクセンター跡地：通称（駅前）Ａ地区（ブロック）に関する埋蔵文化財内容確認調査報告書である。平成19年度に行った試掘調査の成果も併せて報告する。調査は小郡市教育委員会文化財課が実施した。

２、調査にあたっては、事前に確認調査範囲の樹木伐採を福岡県総務部財産活用課が行い、その後、小郡市教育委員会が調査に着手した。

３、現地調査の図面・写真撮影、遺物の実測は調査担当者のほか、阿南、朱雀が実施し、遺物の撮影については文化財写真工房　岡紀久夫氏に委託した。

４、本書で用いる北は座標北とし、図上の座標は国土座標（第２系）に拠る。ちなみに磁北は４°８″西へ振る。

５、本書で用いた標高は、東京湾平均海水面（Ｔ．Ｐ．）を基準としている。

６、本書で用いる遺構略号は、SC（竪穴住居）、SD（溝）、SK（土坑・落とし穴状遺構）、Ｐ（ピット・杭）である。限られた範囲の内容確認調査であり、遺構の内容は将来的に変更が生じる可能性がある。

７、遺物実測図の縮尺は土器・石器が1/2、調査区全体図が1/500、トレンチ遺構平面図が、1/100を基本とするが、一部必要に応じ異なるものがある。

８、本書中での土色表記は、農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帳』1990年度版を用いた。

９、本調査に関わる出土遺物、写真、カラースライド等は小郡市埋蔵文化財調査センターで保管している。広く活用されることを希望する。

10、本書の執筆は、片岡が第１章Ⅰ・Ⅳを、その他を山崎が行い、編集は山崎が行なった。

目　次

序　凡例

第１章　調査の経過と組織 …… 1
　Ⅰ．調査にいたる経緯
　Ⅱ．調査の体制
　Ⅲ．調査の経過
　Ⅳ．調査後の経過

第２章　調査地の立地と環境 …… 11
　Ⅰ．県指定三沢遺跡の指定に至るまでの経緯
　Ⅱ．位置と環境

第３章　平成20年度の試掘調査成果 …… 18
　Ⅰ．調査の概要
　Ⅱ．試掘調査成果
　Ⅲ．小結

第４章　平成22年度の内容確認調査成果 …… 29
　Ⅰ．調査の概要
　Ⅱ．試掘調査成果
　Ⅲ．小結

第５章　三沢遺跡の評価 …… 52
　Ⅰ．三沢遺跡のこれまでの評価
　Ⅱ．単位集団論
　Ⅲ．三沢遺跡と周辺の遺跡
　Ⅳ．これからの三沢遺跡

付編　三沢北中尾遺跡２地点127号土坑出土銅斧について …… 59
　Ⅰ．出土遺構について
　Ⅱ．共伴遺物について
　Ⅲ．銅斧片について
　Ⅳ．銅斧出土の意義

挿図目次

第１図　県指定三沢遺跡とＡ地区 …… 1
第２図　土地利用方針案（平成21年８月公募時資料　福岡県庁ＨＰより） …… 2
第３図　県指定三沢遺跡指定範囲図（S=1/3,000） …… 3
第４図　三沢遺跡遺構確認範囲および保存対象範囲図〈Ａ地区〉（S=1/500） …… 7・8
第５図　三沢遺跡周辺遺跡分布図（S=1/50,000） …… 13
第６図　三沢遺跡周辺旧石器出土遺跡分布図（S=1/75,000） …… 14
第７図　三沢遺跡既調査トレンチ配置図（S=1/3,000） …… 19・20
第８図　三沢遺跡遺構配置・地形合成図（平成20・22年度）（S=1/500） …… 21・22
第９図　１・２・３トレンチ遺構平面図（S=1/100） …… 23
第10図　４・６トレンチ遺構平面図（S=1/100） …… 24
第11図　５トレンチ遺構平面図（S=1/100） …… 25
第12図　７・８トレンチ遺構平面図（S=1/100） …… 26
第13図　20年度試掘調査出土遺物実測図（S=1/2） …… 27
第14図　N1 トレンチ遺構平面図（S=1/100） …… 31・32
第15図　N2・N3 トレンチ遺構平面図（S=1/100） …… 33
第16図　N4・N5 トレンチ遺構平面図（S=1/100） …… 34
第17図　C1・C2・C3 トレンチ遺構平面図（S=1/100） …… 36
第18図　C4・C5 トレンチ遺構平面図（S=1/100） …… 38
第19図　C6・C7 トレンチ遺構平面図（S=1/100） …… 39
第20図　C8・C10 トレンチ遺構平面図（S=1/100） …… 40
第21図　C9 トレンチ遺構平面図（S=1/100） …… 41
第22図　S1 トレンチ遺構平面図①（S=1/100） …… 43・44
第23図　S1 トレンチ遺構平面図②（S=1/100） …… 45・46
第24図　S2・S3・S5 トレンチ遺構平面図（S=1/100） …… 47
第25図　S4 トレンチ遺構平面図（S=1/100） …… 48
第26図　S1a トレンチ SC01、S4 トレンチ SK01、N4 トレンチ段状遺構平断面図（S=1/40） …… 49
第27図　22年度確認調査出土遺物実測図（S=1/2） …… 50
第28図　三沢遺跡の集落構造（西谷正1996を改変） …… 52
第29図　弥生時代前期集落遺跡の類型（田﨑2008より作成） …… 54
第30図　三国丘陵南東部域弥生時代「集落群」変遷（山崎2010） …… 55

付編　第１図　三沢北中尾遺跡 2b 区 SK127遺構平断面図・出土土器実測図（既報告分） …… 59
第２図　三沢北中尾遺跡 2b 区 SK127出土銅斧実測図　（Ｓ=1/1） …… 60
第３図　北部九州と朝鮮半島南部の併行関係（武末2004） …… 61
第４図　朝鮮半島出土銅斧類例（藤島2008） …… 62

表目次

表１　三沢遺跡の指定に至る経緯 …… 9・10

図版目次

巻頭カラー図版　上段：現在の三沢遺跡周辺航空写真　下段：三沢北中尾遺跡 2 地点出土銅斧片

図版 1　左上　20-1トレンチ（南から）　右上　20-2トレンチ（北東から）
左中　20-2トレンチ詳細（南東から）　右中　20-3トレンチ（北から）
左下　20-4トレンチ堆積状況（西から）　右下　20-4トレンチ（北から）
図版 2　上左　20-5トレンチ（西から）　上中　20-5トレンチ詳細（北西から）
上右　20-6トレンチ（南西から）
下左　20-7トレンチ（南西から）　下中　20-7トレンチ詳細（南西から）
下右　20-8トレンチ（西から）
図版 3　左上　N1トレンチ頂部側（南東から）　右上　N1トレンチ谷部側（北西から）
左中　調査地遠景（西から）　右中　N1トレンチ SC01（南東から）
左下　N1トレンチ SC01土層（西から）　右下　N1トレンチ SC01土層（南から）
図版 4　左上　N2トレンチ（北東から）　右上　N2トレンチ（西から）
左中　N3トレンチ（北から）　右中　N3トレンチ詳細（北から）
左下　N3トレンチ SK01半裁（東から）　右下　N3トレンチ SK02半裁（東から）
図版 5　左上　N4トレンチ（北から）　右上　N4トレンチ段状遺構（北西から）
左中　N5トレンチ（北東から）　右中　C1トレンチ（北西から）
左下　C1トレンチ（東から）　右下　C1トレンチ落込み（西から）
図版 6　左上　C2トレンチ（西から）　右上　C2トレンチ詳細（北西から）
左中　C3トレンチ（西から）　右中　C4トレンチ（西から）
左下　C5トレンチ（西から）　右下　C5トレンチ SK01半裁（南から）
図版 7　左上　C6トレンチ（東から）　右上　C9トレンチ詳細（北から）
左中　C7トレンチ（東から）　右中　C9トレンチ（西から）
左下　C8トレンチ（東から）　右下　C8トレンチ（西から）
図版 8　左上　C10トレンチ（西から）　右上　S1a トレンチ（東から）
左中　S1a トレンチ丘陵肩部（西から）　右中　S1a トレンチ斜面部（西南から）
左下　S1a トレンチ谷部から（南西から）　右下　S1a トレンチ頂部（南西から）
図版 9　左上　S1a トレンチ SC01（西から）　右上　S1a トレンチ肩部ピット（北から）
左中　S1a トレンチ SD01（南から）　右中　S1b トレンチ頂部付近（南東から）
左下　S1b トレンチ中腹付近（南から）　右下　S1b トレンチ谷部付近（南から）
図版10　左上　S1b トレンチ上段付近（南西から）　右上　S1c トレンチ頂部（北東から）
左中　S1b トレンチ SK01（南から）　右中　S1c トレンチ頂部（南から）
左下　S1b トレンチ SK01（東から）　右下　S1c トレンチ SK01（西から）
図版11　左上　S2トレンチ（南から）　右上　S3トレンチ（南西から）
左中　S4トレンチ頂部（北西から）　右中　S4トレンチ斜面（南東から）
左下　S4トレンチ SK01（南西から）　右下　S4トレンチ SC （北西から）
図版12　左上　S4トレンチ谷部付近（南東から）　右上　S4トレンチ中段詳細（南から）
左中　S5トレンチ（南西から）　右中　調査前頂部付近（西から）
左下　頂部付近調査風景（西から）　右下　頂部付近埋め戻し状況（西から）
図版13　上段：三沢遺跡出土土器類　中段：三沢遺跡出土石器類
下段：三沢北中尾遺跡 2b 区 SK127出土銅斧Ｘ線 CT 画像

第１章　調査の経過と組織

Ⅰ．調査に至る経緯

１．県指定三沢遺跡と「A 地区」（第１・２・３図）

今回報告する通称簡保レクセンター跡地駅前「Ａ地区（ブロック）」（以後「Ａ地区」という）は、県指定史跡三沢遺跡と同一遺跡との評価を受けながら、その指定範囲から外れている。その経緯から述べることにする。昭和46年に九州縦貫自動車道建設のため、三井郡小郡町三沢所在の県種蓄場用地の土取りが計画され、その土取り予定地を福岡県教育委員会文化課が試掘を行った結果、弥生時代の遺跡が確認された。

当該遺跡は、現在までに全貌を解明するまでの発掘調査がなされていないが、その一部調査において、旧石器時代～古墳時代に及ぶ遺跡地であることが確認され、その主要遺構（弥生時代中期初頭農耕集落遺跡）は、弥生時代集落構造・初期農耕村落の生活様式を具体的に解明する貴重遺構である。遺構保存状況も良好であり、昭和53年に福岡県指定史跡に指定して保存するものとされた（第３図）。

三沢遺跡が指定の対象となった学術的に最も重要な部分は、弥生時代中期初頭の農耕集落遺跡で、確認範囲では、４ブロックからなる集落群が推定される。その内容は竪穴式住居と袋状竪穴式食糧貯蔵穴を１セットとする家族生活単位と想定される遺構が10数個以上で、１ブロックを構成し、その中央部に集会所的機能を有したと想定される大型の竪穴式住居、集落外郭の巾数メートルの防御的性格を有する溝がある。この１ブロックが共同体単位（集落）として機能していた。

指定が行われる際、Ａ地区は土取り対象地に含まれていなかった。土取りによる遺跡の破壊を回避するため、土取場所として計画された地区だけが緊急に指定された。その時点でＡ地区は指定範囲の検討から外されていた経緯がある。

２．簡保レクセンター跡地利用検討委員会設置まで

昭和52年に簡易保険福祉事業団が「レクセンター」用地として、県種蓄場跡地のうち約28haを県から借り受け、その中には県指定史跡とこの「Ａ地区」も含まれていた（第１図）。昭和54年に筑後小郡簡保レクセンターが開園し、平成12年に同事業団が土地を返還するまでの間、簡保レクセンターが当該地の管理を行っていた。その間、平成７年に福岡県が花卉振興センターの小郡市設置を決定し、平成10年には、跡地においてフラワーパーク設置計画を策定した。しかし、平成12年、対象地の一部住宅化が検討され、フラワーパーク設置計画は断念された。そのため、小郡市はその後のレクセンター跡地利用促進を県に要望するため、平成12年庁議において、小郡市レクセンター跡地利用検討委員会設置を決め、市議会では、「簡保レクセンター跡地利用に関する特別委員会」を設置した。県では、平成14年に「筑後小郡簡保レクセンター跡地利用検討委員会」を設置し、その利用について検討に入った。

第１図　県指定三沢遺跡とＡ地区の関係

また、福岡県は平成15年に九州歴史資料館将来構想検討委員会を設置し、平成17年に正式にレクセンター跡地にその建設が決定した。

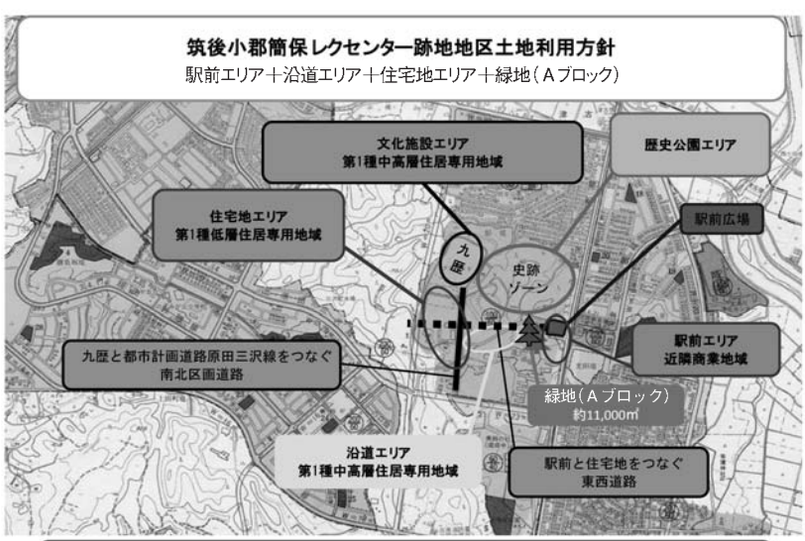
3．Ａ地区試掘・確認調査に到るまでの経緯

平成17年、福岡県はレクセンター跡地のうち、Ａ地区を含む一帯を民間利用ゾーンと位置づけ、民間への買却を決定し、その具体的な検討に入った（第２図）。レクセンター跡地全体についての文化財の取り扱いについて福岡県教育委員会文化財保護課（以下「県文化財保護課」という。）と協議を行ったが、その中でＡ地区の協議も行った。平成17年、県文化財保護課は、Ａ地区について通常の開発と同様の扱いを決め、開発協議を進めている。

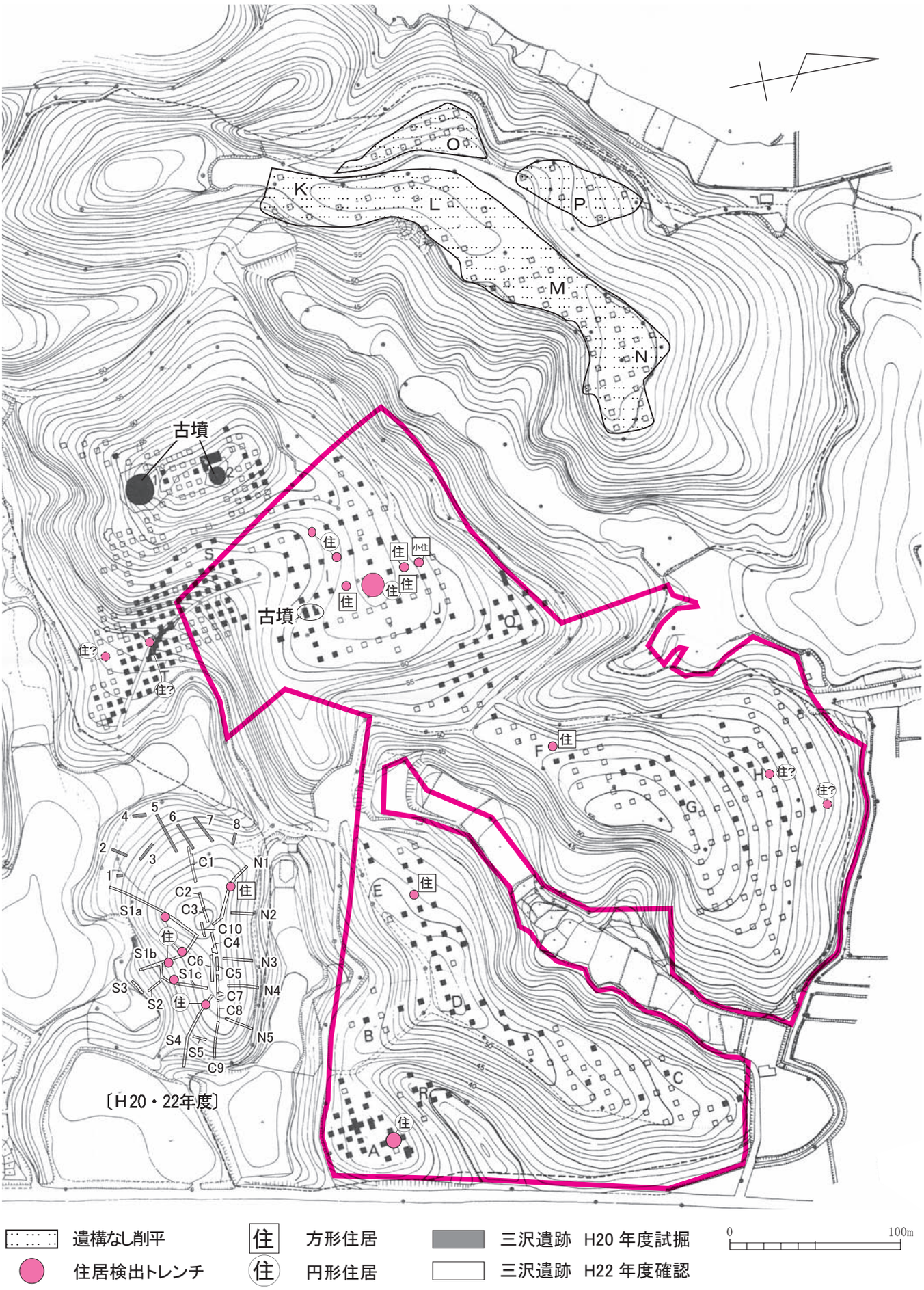
そのため、Ａ地区の管理者である福岡県管財課は通常の開発の手順に従って平成19年以降、小郡市と断続的協議を行ってきたが、平成21年３月、福岡県財産活用課（もとの県管財課、以下「県財産活用課」という。）は、当該地の埋蔵文化財の状況把握のため、「埋蔵文化財の有無とその処置について（照会）」の文書を小郡市教育長あてに提出した。これに基づき小郡市教育委員会は、県財産活用課と協議のうえ、樹木を伐採しなくても試掘が可能なＡ地区西側部分についてのみ試掘を実施し、遺構の存在を確認した。「埋蔵文化財の有無とその処置について（回答）」の文書を県財産活用課に回答し、その結果をもとに、Ａ地区全体に遺構が広がる可能性が極めて高いことを県財産活用課に伝えた。この試掘結果を受けて、小郡市教育委員会はＡ地区も含めた形で三沢遺跡の包蔵地範囲を更新した。

県財産活用課は、Ａ地区が遺構の性格によっては、隣接する県指定文化財との関連性により保存になる可能性も含めたなかで、平成21年８月、Ａ地区を含めた、旧簡保レクセンター跡地のプロポーザルによる入札を実施した。しかし平成21年10月、公募に対して、応募企業がなく入札は不調に終わった。

平成21年11月、県財産活用課は、市および市教育委員会に対して、プロポーザル不調の原因説明を行った。Ａ地区の取り扱い（開発できるものか、保存しなければならないものか）がはっきりしていないことが原因の一つであることと、そのためにＡ地区は当初緑地保存の方針であったが、必ずしもそういう扱いではなくなるという変更説明が行われた。そこで、県財産活用課側からＡ地区全体の確認調査を行ったうえで、開発か保存かの方向性をはっきりしてほしいという旨の要請がなされ、平成22年４月財産活用課から、平成21年３月に樹木があるために試掘未実施であったＡ地区の西側を除く部分の確認調査依頼がなされ、市文化財課は、県財産活用課が伐採を行った後に、試掘を実施することになった。なお費用は、小郡市の予算から支出した。確認調査の結果については以下Ⅳの項目で詳しく述べることとする。平成22年６月、県財産活用課による伐採後、小郡市教育委員会が確認調査を開始した。



第２図　土地利用方針案（平成21年８月公募時資料　福岡県庁ＨＰより）



第 3 図　県指定三沢遺跡指定範囲図〈指定範囲は赤枠内〉（S=1/3,000）

Ⅱ．調査の体制

調査の体制は以下のとおりである。

〈平成20年度　試掘調査〉

小郡市教育委員会　教育長　清武　輝
教育部長　赤川　芳春
文化財課　課長　田篭　千代太
係長　片岡　宏二
試掘担当　佐藤　雄史
福岡県　総務部財産活用課　主任技師　瀬利　昌嗣

〈平成22年度　確認調査〉

小郡市教育委員会　教育長　清武　輝
教育部長　河原　寿一郎
文化財課　課長　田篭　千代太
係長　片岡　宏二
調査担当　山崎　頼人
嘱託技師　坂井　貴志
姫野　久恵
福岡県　総務部財産活用課　企画主幹　岡野　弘幸
担当　紙谷　彰一

（調査参加者）　藤田ツヤ子　横田雅江　西初代　西島勝徳　重松四郎　小屋野長利　小野利之
野元エミ子　執行弘子　阿南翔悟　朱雀聡一郎　権丈和徳

〈平成23年度　整理・報告書作成〉

小郡市教育委員会　教育長　清武　輝
教育部長　吉浦　大志博
文化財課　課長　片岡　宏二
係長　柏原　孝俊
整理担当　山崎　頼人

Ⅲ．調査の経過

調査は平成20年度実施のＡ地区西側試掘調査、平成22年度実施の確認調査に大きく分かれる。

［平成20年度　試掘調査］

平成21年３月25日に重機を搬入し、県文化財保護課岸本氏立会いの下、計８箇所の試掘トレンチを設定した。丘陵西部のみの試掘調査ではあったが、北側の県指定三沢遺跡と同様の遺跡が分布することが明らかとなった。そのため、周知の埋蔵文化財包蔵地三沢遺跡範囲を更新した。

［平成22年度　確認調査］

上記のように、平成20年度の試掘で遺跡の内容が明らかにされたとは言い難く、平成22年度に、より詳細な遺跡の内容を確認するために、県財産活用課と協議を行い、確認調査を実施した。確認調査実施にあたり、樹木の筋伐採の必要があり、事前に県財産活用課が５月中旬～６月中旬の間、該当箇所の樹木伐採を実施した。筋伐採は尾根線上を分断するように、またそこから南北それぞれにのびるように設定し、実施された。

その後、６月22日より表土掘削を開始した。23日には表土掘削を進めるなかで、人力掘削も開始した。人力掘削はその後の雨で思うように進まなかった。特に丘陵のトレンチで傾斜が著しく、雨の中での作業は危険と判断し、中断を余儀なくされた。２日、福岡県佐々木、齋部、宮地、吉村氏来跡。７月５・６日には南側の斜面部において表土掘削を行った。この頃より、例年になく暑さが厳しく発掘作業員も体調管理のため、休みを多く取るようになった。７月12日には、それぞれのトレンチの遺構検出が進んだので、文化財課内の現地見学、意見交換、協議を行う。16日、写真清掃のためこれまでにトレンチに溜まった水抜き作業。20日清掃、写真撮影。午後第１回小郡市文化財保護審議会記念物部会（小田富士雄委員・西谷正委員）を開催し、現地視察を実施。21日遺構図面実測開始。30日すごく暑いなか現場（真夏日連続記録を更新）。８月３日Ｓ－１着手。午後図面実測。途中から雨。18日午前一部の遺構掘削。19日保護審議会視察のため、一日清掃作業。20日午前、第２回小郡市文化財保護審議会記念物部会開催。第１回に受けた指摘事項をもとに報告。23日午前トレンチ全景写真撮影のため、清掃。午後、九歴へ回覧資料持参（調査見学案内）。県庁にて文化財保護課と財産活用課に保護審議会報告。24日午前、福岡県文化財保護課小池氏来跡。午後、吉村氏来跡。25日副市長・教育長・教育部長視察。

８月30日から９月４日まで、埋め戻しを実施し、調査を終了した。

調査終了後には、今後の対応協議のために10月には副市長・総務部長、都市建設部、企画課等の関係各課の視察が行われている。

小郡市文化財保護審議会記念物部会の小田富士雄（福岡大学名誉教授）、田中正日子（前第一経済大学教授）、西谷正（九州歴史資料館館長）の各委員には調査中、様々なご教示・ご助言を頂いた。記して感謝する。

Ⅳ．文化財保護審議会の開催と調査後の協議経過

１．文化財保護審議会での審議

Ａ地区の文化財をとりまく問題について、県財産活用課と事前協議を行なってきたが、当該地は確認調査を行う以前から北側の県指定史跡三沢遺跡と同一の遺跡である可能性が十分考えられたため、平成22年５月10日に開催された小郡市文化財保護審議会で、事務局（教育委員会文化財課）側から遺跡の確認調査を実施する方向で進んでいることと、調査の過程において、県指定史跡との関連性を判断する可能性が高く、その場合はＡ地区の文化財としての価値についての諮問・答申を依頼した。その依頼を受けて小郡市文化財保護審議会では必要に応じて、小郡市文化財保護審議会記念物部会（以下「市記念物部会」という。）に審議を付託することとなった。

平成22年６月22日から開始した確認調査で、弥生時代の住居跡、貯蔵穴などが発掘され、同時に出土する土器の年代からその時期は、弥生時代前期後半から中期初頭にかけての遺構であることが明らかになった（Ｐ７・８第４図参照）。その旨小郡市文化財保護審議会会長に伝え、会長は、平成22年７月６日に市記念物部会を招集し、平成22年７月20日に平成22年度第１回市記念物部会が開催された。その会議では、現地の視察と審議が行われたが、現地の視察では、次の諸点において、不十分な点が指摘された。

１、確認調査で斜面傾斜に緩急が認められるので、土地造成の可能性はないのか。
２、丘陵頂部には遺構が少ないが、集落広場の可能性が考えられないか。
３、傾斜の緩斜面から急斜面に移るところにピットがみられるが、柵列の可能性はないか。
４、遺構の一部を掘って、遺跡の時間幅を確認する必要はないか。
５、裾部に広がる大きな遺構は、段の可能性も考えて一部にトレンチを入れる必要がないか。

今回の現地での指導に基づいて、以上の点を今後の確認調査で明らかにして、それをもとに次の審議を行うことと、Ａ地区の価値判断をする上でも、隣接する県指定史跡三沢遺跡における遺構の実態や指定の理由・経過を次の審議会までに整理しておくことになった。

そのため問題が残る個所の確認調査を継続し、併せて三沢遺跡の事績を整理して、再度市記念物部会を開催し、そこで審議会の方向を出すということとなった。

平成22年８月20日に平成22年度第２回市記念物部会が開催され、あらためて、Ａ地区の問題が話し合われた。先に提示された問題について、調査を実施した教育委員会から報告が行われた。その成果は、まとめて第４章に記載している。なお、確認調査は、平成22年９月３日をもって終了している。確認調査を踏まえた、市記念物部会の見解は以下のとおりである。

「当該地は、確認調査により判断される遺構の時期・性格から県指定三沢遺跡（昭和53年指定）の一部を構成する遺跡であることが判明し、学術的には、県指定三沢遺跡の指定理由である『弥生時代集落構造・初頭農耕村落の生活様式を具体的に解明する貴重遺構である。』という要件をもって、本来県指定三沢遺跡と一連のものとして現地保存すべき遺構である。」

その部会での審議結果は、小郡市文化財保護審議会会長に報告され、小郡市文化財保護審議会の提言として、県財産活用課から出された平成22年11月４日付「平成22年度埋蔵文化財の試掘調査結果について（依頼）」の文書に回答する形で、平成22年11月８日付「平成22年度埋蔵文化財の試掘調査結果について（回答）」文書で県財産活用課に正式に伝えられた。

２．調査後の協議経過

県財産活用課では、小郡市教育委員会と協議を進めながら、平成23年度に再公募が行われるレクセンター跡地の民間への売却に際し、次のような条件をつけることになった。

・Ａ地区は文化財包蔵地として保存し、基本的に土地に改変を加えず緑地を保全する。
・Ａ地区は一定の樹木を伐採し、緑地として整備する。

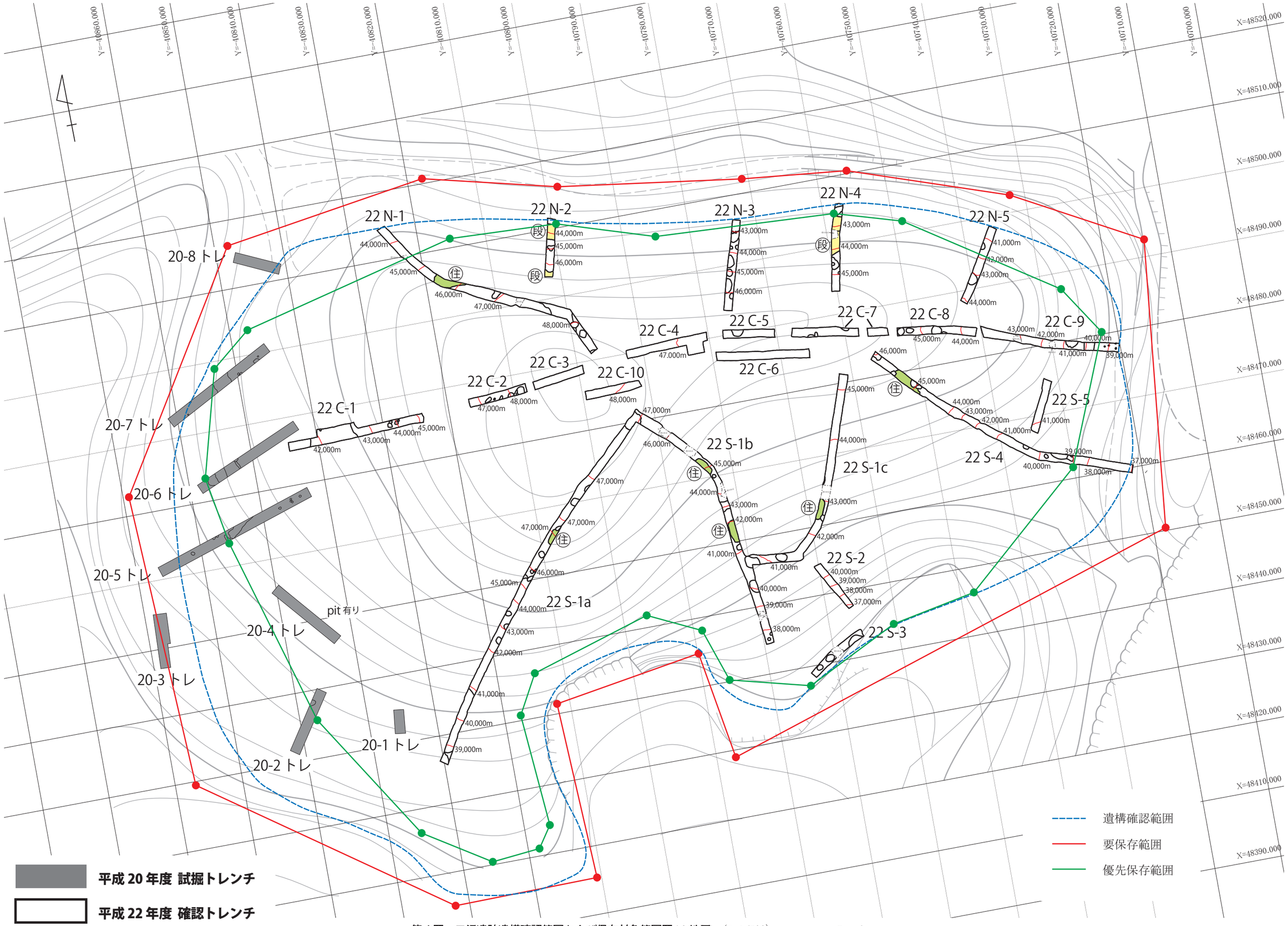
その保全の具体的な方法とは次の点に集約される。

・緑地整備の範囲は、第４図に定める文化財保存（優先保存）の範囲とする。
・文化財保存の範囲における、さまざまな土木工事を実施する場合、「埋蔵文化財の有無とその処置について（照会）」（小郡市書式）を市教育委員会に提出のうえ、小郡市教育委員会と事業者との間で開発の計画及び文化財調査の要否について協議する。併せて、文化財保護法第93条に規定する「土木工事のための発掘に関する届出」（以下「93条届出」という。）を提出する。

整備の方法については、今後の課題となるが、基本的に文化財を保護し、その文化財の意義を理解して活用するために、

ア　文化財保存の範囲を明示するため、縁石等を設置する
イ　緑地内を市民が安全に歩行できるよう、散策路を整備する
ウ　文化財を保護するため、散策路敷地に必要に応じて盛土（保護盛土）を行う
　なお、保護盛土は概ね高さ30㎝以上とする
エ　丘陵地南側のため池付近に、歩行者の落下防止柵を整備する
オ　敷地内の見通しを確保するため樹木、下草等を伐採する。伐採に際しては、根元から切り取る。
　除根を伴う場合には、文化財への影響が懸念されるため、小郡市文化財課の立会いが必要となる。
カ　散策路整備において、原則的に文化財に影響のない設計で行う
キ　本整備の実施にあたり、第93条届出を小郡市教育委員会に提出する必要がある
ク　当該地について、「文化財包蔵地であるため、届け出のない土地掘削や土木工事などができない」旨を標示することなどの施設・設備を検討している。

このようにしてＡ地区は開発地の中の緑地という位置づけで当面保存されることになったが、今後は指定等により、遺跡保存を現法規の中で位置づけることが課題となっている。



第 4 図　三沢遺跡遺構確認範囲および保存対象範囲図〈A 地区〉（S=1/500）

表１　三沢遺跡の指定に至る経緯

県指定三沢遺跡をめぐる経過		横隈山遺跡をめぐる経過		市民運動	
1941年（昭和16）	5月　三沢に福岡県種畜場が開設される				
1969年（昭和44）	4月　種畜場が九州縦貫自動車道の土取り場候補に				
1970年（昭和45）	九州縦貫自動車道建設のために土取り場の分布調査により発見される				
1971年（昭和46）	1～2月　福岡県教育委員会による試掘調査（1次予備調査） 3月 『福岡県三沢所在遺跡調査概報』 5～7月　福岡県教育委員会による試掘調査（2次予備調査） 9月 『福岡県三沢所在遺跡予備調査概要』福岡県教育委員会 「九州縦貫自動車道関係三沢工事用道路周辺の埋蔵文化財保存について」（依頼） （将来の周辺宅地化による文化財保護要望） 三井郡小郡町教育委員会教育長あて（46教文第661号昭和46年5月18日）				縦貫道土取りによる三沢遺跡群の破壊、中九州ニュータウン計画
				1971	9・4 「三沢遺跡を守る県民の会」発足
1972年（昭和47）	8～9月　1,078㎡の発掘調査（住居6、貯蔵穴3、古墳1）				（親組織は昭和41年1月発足）
1973年（昭和48）	福岡県総合農業試験場建設着手（種畜場も統合される） 8月　浜田昌治「遺跡保存の論理ー三沢遺跡保存運動をかえりみてー」『考古学研究』20－1	1973	4月 『横隈山遺跡ーみくにの東団地造成地内ー』 4・29　現地見学会（歴史と自然をまもる会主催） 11月『横隈山からの叫び』	1973	4・15　社団法人 歴史と自然をまもる会 小郡支部発足 4・30　横隈山遺跡を保存する市民の会　発足 協力関係
1974年（昭和49）	10月 『小郡簡易保険スポーツセンター(仮称)設置基本報告書』 （Ⅳ－6　簡易保険郵便年金保険福祉事業団による遺跡分布の報告）			1974	6・9　九州文化財保存協議会　発足
1978年（昭和53）	「小郡市所在三沢遺跡の県指定史跡指定について」（承諾書の依頼） 簡易保険郵便年金福祉事業団理事長あて（52教文第2014号昭和53年1月14日） 「小郡市所在三沢遺跡の県指定史跡指定について」（承諾書の依頼） 小郡市教育委員会教育長あて（52教文第2015号昭和53年1月14日） 「小郡市所在三沢遺跡の県指定史跡指定について」（依頼） 史跡部門専門委員あて（52教文2020号昭和53年1月17日） 「小郡市所在三沢遺跡の県史跡指定について」（依頼）（承諾書の依頼） 福岡県総務部長（管財課）あて（52教文2083号昭和53年1月20日）→昭和53年3月20日承諾 「三沢遺跡の県指定史跡指定について」（回答）（承諾の拒否） 福岡県文化課長あて（53小教社第22号昭和53年2月1日） 小郡市有地として一般廃棄物処理施設として利用のため （小郡市津古字影堤886、小郡市三沢遺跡字京江ヶ浦5193－1ほか　計5,736㎡） 1月30日　福岡県文化財保護審議会答申「三沢遺跡の県指定史跡指定について」 **三沢遺跡県指定史跡** 昭和53年3月25日県史跡第47号　員数：111,930㎡ 「三沢遺跡の文化財管理責任者の選任について」（伺い） （簡易保険郵便年金事業団を管理責任者にする　111,930㎡）				
1979年（昭和54）	「福岡県文化財管理責任者選任届」 （53管第666号　昭和54年2月1日）				
1979年（昭和54）	「福岡県指定史跡三沢遺跡管理責任者の選任について」（通知） （53教文第2745号　昭和54年2月6日）（筑後小郡市簡保レクセンター所長選任）				

第２章　調査地の立地と環境

Ⅰ．県指定三沢遺跡の指定に至るまでの経緯

昭和16年、三沢の地に畜産技術の向上を図り、畜産技術員養成を行う福岡県種畜場が開設された。周辺では、旧石器の散布も知られていたが、三沢遺跡の範囲は、牧草地として主に利用されており、一部の丘陵尾根部分が平坦に造成される他は、大きな地形改変を受けなかった。

昭和44年10月以降、日本道路公団は九州縦貫自動車道建設に伴う、福岡県種畜場における土取りのための最終調整に入っていた。福岡県教育委員会文化課（担当酒井仁夫）は、昭和45年10月26・27日に、種畜場の土取り予定地の分布調査を行い、古墳１基と遺跡存在の可能性を認めた。牧草地は草木が茂っており、表面観察だけでは遺跡の内容の判断が難しかったため、昭和46年１月から土取り予定地の全域にわたって試掘トレンチ（３×３ｍの正方形プラン）が設定され、部分的な発掘調査に着手する運びとなった。予備調査は二次にわたって実施された。第１次予備調査（担当西谷正、栗原和彦、酒井仁夫）は昭和46年１月18日から２月20日まで実施され、411箇所のトレンチ、合計3,699㎡の調査が行われた。この結果、新たな古墳１基と弥生時代集落を中心とした遺跡の範囲が約３万㎡以上にわたることが確認された（第３図）。第２次予備調査（担当吉本尭俊、後藤直、西谷正）は昭和46年５月７日から７月１日にかけて実施された。引き続きトレンチ調査と併せて、古墳２基の全面発掘調査が行われた。合計2,908㎡である。

予備調査概要報告書（西谷正編）では調査経過の章で、「２次にわたる予備調査によって、弥生時代の集落構造が古代の自然景観のなかで把握できる遺跡であることが分かった。遺跡の重要性から、保存問題がクローズアップされ、現在も協議中である」と締めくくられている。

その後、昭和47年８月８日から９月６日まで、一部の発掘調査が行われた。調査面積は1,078㎡で、弥生時代前期末～中期初頭にかけての住居跡６軒と貯蔵穴３基およびピット多数が調査された。また、従来発見されていた３基の古墳に加えて、新たに１基（第４号墳）検出した。横穴式石室であるが、破壊が著しく、掘り方を検出したのみであった（未報告：福岡県教育委員会1977『九州縦貫道自動車道関係埋蔵文化財調査概報（総輯編）』）。

そのようななか、福岡県教育委員会は三沢遺跡の保存協議を進め、近隣ではさらに宅地化が予想されるために、「九州縦貫自動車道関係三沢工事用道路周辺の埋蔵文化財保存について」（依頼）が三井郡小郡町教育委員会教育長あて（46教文第661号昭和46年５月18日）に提出された。

昭和46年10月には、三沢遺跡を守る県民の会より、三沢遺跡の保存要望書（署名数3,972名）が福岡県議会文教常任委員会に出され、福岡県教育委員会は「一部史跡化」の意向を初めて明らかにした。

市民運動として三沢遺跡の保存が広く訴えられていたのであるが、その中心となったのは、社団法人　歴史と自然をまもる会　小郡支部（46年４月15日発足）と「三沢遺跡を守る県民の会」である（代表委員浜田昌治氏、９月４日）。

それらの市民運動も大きく影響して、昭和47年春に、日本道路公団が三沢遺跡地の土取り工事の範囲縮小・撤退を表明することになった。

工事は撤退したものの、しばらくは史跡指定等の明確な保存措置が取られないままであり、昭和50年には、この地に郵政省の簡保レクセンター建設の計画があがった。協議のなかで遺跡保護や自然保護に配慮した建設計画が策定され、昭和52年９月に着工、昭和54年に開園した。

昭和52年10月の福岡県議会予算特別委員会の一般質問で、三沢遺跡の保存（指定）についての質問があがり、亀井光知事（当時）は三沢遺跡の史跡・公園化に努力する旨の答弁を行った。

福岡県教育委員会は三沢遺跡の史跡指定準備を進め、昭和53年１月には具体的手続きに入っている。

「小郡市所在三沢遺跡の県指定史跡指定について」（承諾書の依頼）が簡易保険郵便年金福祉事業団理事長あて（52教文第2014号昭和53年１月14日）、小郡市教育委員会教育長あて（52教文第2015号昭和53年１月14日）に出され、併せて「小郡市所在三沢遺跡の県指定史跡指定について」（依頼）史跡部門専門委員あて（52教文2020号昭和53年１月17日）が出されている。三沢遺跡地内には、小郡市有地5,736㎡が存在していたが、小郡市は昭和55年度までその谷地を一般廃棄物処理施設として使用の予定であり、「一般廃棄物処理施設として市民の生活に直結したゴミ埋め立て地であり代替地のないままで、本施設を遺跡として指定されることは本誌の清掃行政を中止せざるを得ないことになり、まさに市民の生活権を脅かす」ことから、現時点（昭和52年）では指定範囲からの除外要望の回答を行った。この協議の際に、福岡県文化課は最終的には追加指定で、一体化させる意向を示している。

永い歳月を要し、昭和53年１月30日に福岡県文化財保護審議会は、三沢遺跡を県指定にするよう答申した。指定告示は昭和53年３月25日に行われ、県史跡第47号となり、111,930㎡が指定された（第３図）。

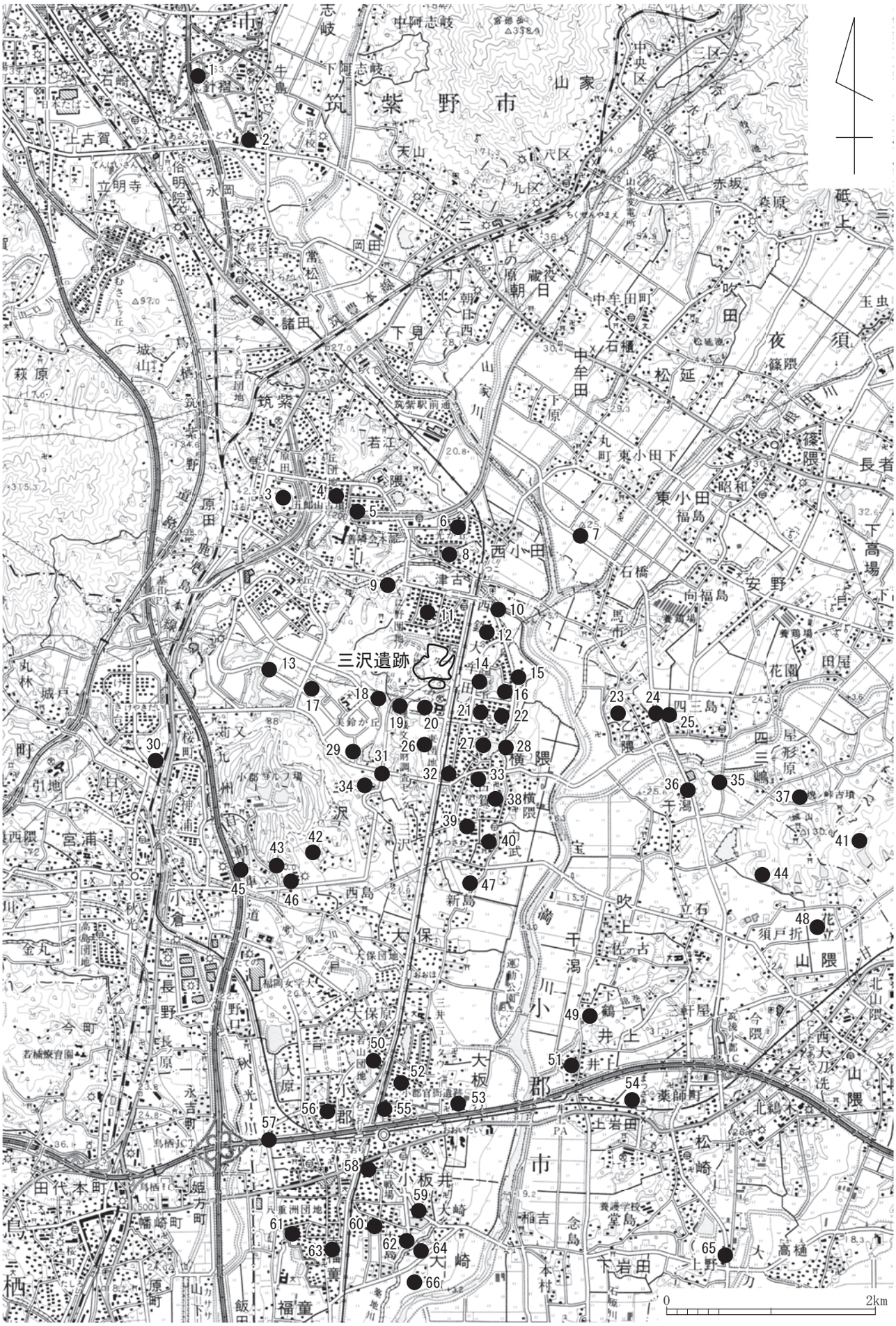
Ⅱ．位置と環境

１．地理的環境

三沢遺跡が所在する丘陵地帯は、かつて筑前・筑後・肥前の国境であったことから、「三国丘陵」と呼ばれている。三国丘陵は背振山系から東へ派生して続く、標高30～40ｍのなだらかな低丘陵地帯が多くを占め、小郡市域の北西部、筑紫野市域の南部、佐賀県基山町の一部にあたる。最高地点は標高94ｍを測り、現在は福岡・佐賀県境となっている。この丘陵部は北部の筑紫野市宮地岳付近と併せて平野が急峻となる「二日市地狭帯」の一部を構成し、福岡平野と筑後平野の両平野を結ぶ地域である。丘陵地以南では宝満川やその支流域に見られる扇状台地（中位から低位段丘）が発達する。丘陵には複雑に浅い谷が入り込んで小河川の源となり、小河川はいくつかが合流しながら市内のほぼ中央を南流する宝満川へと注ぐ（第５図）。

かつて、筑紫平野は福岡平野と二日市地溝帯を通して有明海から玄界灘までを連絡していた。地盤が隆起、さらに沈降して砂礫・火山灰などの中期更新世の層が堆積して中位段丘面が成立したのは12万年以前とみられる。二日市地狭帯（低地帯）の成立は、更新世後期、約９～８万年前におこった阿蘇火山の噴火による阿蘇４火砕流に大きく関連する。阿蘇４火砕流は九州地方の広域に分布しているが、筑紫野市二日市周辺でも谷部を埋めて大きく地形を改変しており、その痕跡としてのこる火砕流台地が筑紫野市筑紫～永岡にかけて分布している。この阿蘇４火砕流のために谷部は埋没し、筑後川水系の旧宝満川、旧山口川の流路が一時的に北側の三笠川水系に流れ出ることもあった（下山1999・2005）。旧宝満川が筑後川水系に戻った後も、旧山口川は北流を続け、浸食による谷部が拡大し、そこに植生が破壊された山地から土石流が流れ出すことによって、二日市低地帯の北側を形成したと考えられている。その後、宝満川の支流が筑紫野市永岡付近を抜けて山口川とつながり、山口川が宝満川と合流することによって、低地帯の南側を形成したとされる。このような「河川争奪」と呼ばれる現象によって、南北に回廊状につながる二日市低地帯（地狭帯）の原形がつくられたと理解されている（下山1999・2005）。こうした地質形成と最寒冷期へ向かう気候から、二日市地狭帯（低地帯）付近には、河床の低下と離水によって、新期段丘と呼ばれる台地が形成される。この低位段丘は、３面にわたって細分され、推移したことが分かっている（磯1999）。

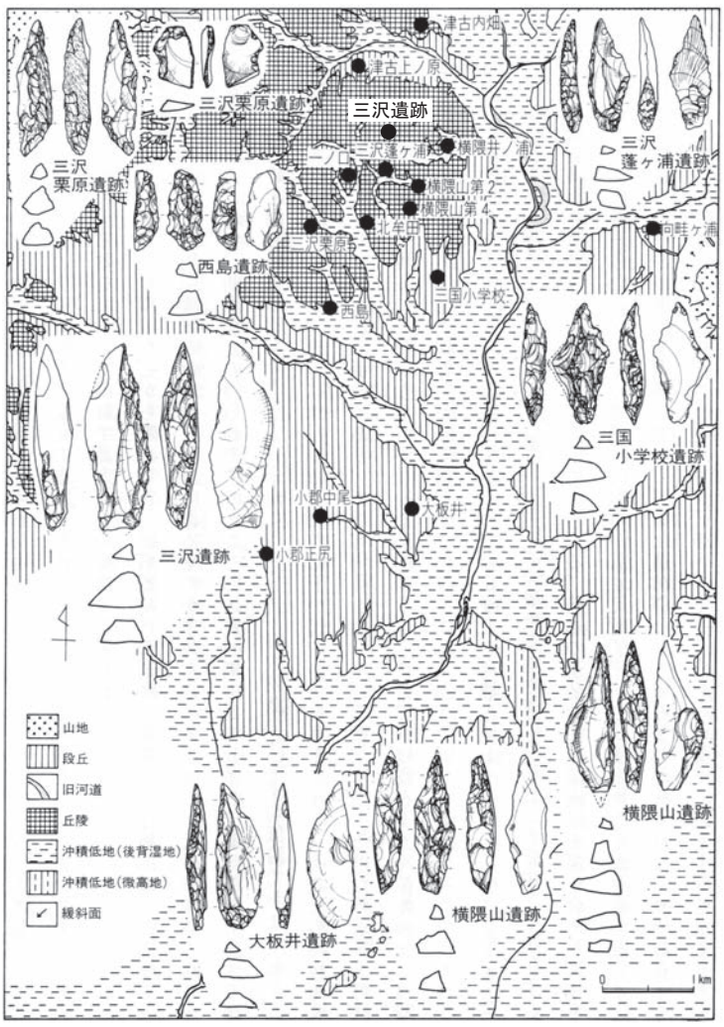
二日市地狭帯（低地帯）は福岡平野と筑後平野の両平野を結ぶ地域として、地勢的にも、古くから文化交流の結節点となっていた。



第５図　三沢遺跡周辺遺跡分布図（S=1/50,000）　　※遺跡番号は本文参照

2．歴史的環境

三沢遺跡の保存の主たる対象は、弥生時代中期初頭の集落跡であるが、旧石器の散布が古くから知られており、また、残存が悪く保存地域に取り込まれなかったが、古墳時代後期の群集墳も数基存在し、発掘調査がなされた。ここでは、三沢遺跡（三国丘陵周辺）を中心とした、旧石器時代から古墳時代までの歴史的環境を示すことにする（第５図）。



第６図　三沢遺跡周辺旧石器出土遺跡分布図（S=1/75,000）

［旧石器時代］

旧石器時代遺跡は、福岡平野から筑紫平野に抜ける「二日市地狭帯（低地帯）」付近および三国丘陵や宝満川流域にかけて多く分布している。二日市地狭帯（低地帯）付近には、河床の低下と離水によって、新期段丘と呼ばれる台地が形成され、その上に火山灰や黄砂などの風積物が堆積している。多くは大陸起源のレスと呼ばれ、この地域の旧石器包含層となっている。花粉分析からは、太宰府付近では高地性湿原が広がっていたようである。筑紫野市**野黒坂（１）**、**峠山遺跡（２）**は「三稜尖頭器」の器種認定が行なわれた学史的遺跡であり、小郡市**横隈山遺跡（32）**も九州で初めて国府型ナイフ形石器が確認された著名な遺跡である。小郡市域では三国丘陵や花立山周辺の丘陵・山麓域と沖積地と接した台地縁辺部の**大板井遺跡（53）**周辺などでナイフ形石器や細石刃、剥片尖頭器などが確認されるが、いずれも小規模散在的である（第６図）。三国丘陵域では**津古内畑（８）**、**津古上ノ原（９）**、**三沢遺跡**、**横隈井の浦（14）**、**一ノ口Ｉ地点（18）**、**三沢蓬ヶ浦（20）**、**横隈山（32）**、**三沢北中尾（26）**、**三沢栗原（34）**、**三沢古賀（33）**、**三国小学校（39）**、**西島（46）**、**三沢正原（42）遺跡**があげられ、後期旧石器文化期に属する。花立山周辺では**乙隈（16）**、**干潟（36）**、**山隈（31）**、**大板井遺跡**周辺では**小郡正尻（57）**、**小郡中尾（56）**、**小板井京塚（58）遺跡**が相当し、いずれも後期旧石器文化期に属する。

［縄文時代］

続く縄文時代では集落跡などの良好な遺跡は未発見であるが、遺物採集地点を含めると、20ヶ所以上に上る。

大崎井牟田遺跡（60）付近には集落が展開していたようで、炉跡と考えられる集石遺構と押型文土器が出土している。中位段丘の裾付近にあたり、標高約12ｍをはかる。周辺の中位段丘面に立地する**大板井（53）**、**小郡中尾（56）**、**向築地（55）遺跡**でも押型文土器が表採される。宝満川右岸では**干潟向畦ヶ浦遺跡（35）**で草創期末の続円孔文土器と条痕文土器や早期の押型文土器、前期の曽畑式土器、

中期の船元式土器、阿高式土器が確認される。**上岩田遺跡（54）**でも押型文土器、阿高式土器等が出土している。**横隈山遺跡（32）**では谷部より早期から後期に亘るまとまった資料が出土している。また、科学的分析により縄文時代早期前後とされる落とし穴状遺構が丘陵、中位段丘縁辺で多く確認されている。そのなかでも**北松尾口遺跡（29）**では遺構内から条痕文土器、**上岩田遺跡（54）**では押型文土器や阿高式土器が出土しており時期比定の参考になる。市内で確認される落とし穴状遺構は北部の三国丘陵、宝満川右岸段丘上、宝満川左岸の花立山周辺低台地上に分布のまとまりがある。

三国丘陵では**津古土取（10）**、**三国の鼻（15）**、**三沢北中尾（26）**、**横隈仕解田（28）**、**横隈上内畑（38）**、**三沢古賀（33）**、**三国小学校（39）**、**力武宮脇（40）遺跡**で確認され、特に**三沢北中尾遺跡（26）**では500基以上の落とし穴状遺構が検出され、狩猟システム復原が可能である。**三沢遺跡**にも、落とし穴状遺構が分布する可能性が高い。

縄文時代晩期中頃以降、三国丘陵周辺で遺跡・遺物の増加が認められる。晩期中頃では基山町**白坂遺跡（30）**で土坑８基、集石遺構１基が検出されている。

［弥生時代］

弥生時代になると、市域の人間活動は活発化する。それらの分布は小郡市北部三国丘陵と宝満川右岸の市中南部段丘上、宝満川左岸の花立山周辺低段丘上に立地する遺跡に大きく分けられる。

三国丘陵域では弥生時代前期～中期前半にかけての遺跡が数多く所在しており、弥生社会発展過程のモデル地域のひとつとなっている。**津古土取遺跡（10）**では刻目突帯文期の土器棺墓をはじめ、包含層から黒川式から弥生時代前期初頭の資料がまとまって出土している。概期の土器棺墓は宝満川左岸中位段丘上に位置する**上岩田遺跡（54）**、三井郡大刀洗町**下高橋馬屋元遺跡（65）**でも確認される。

前期前半代には、**力武内畑遺跡（47）**が三国丘陵と連なる段丘先端部で出現する。遺跡は沖積低地から段丘面にかけて営まれ、緩やかな段丘崖を検出している。沖積低地部分で井堰や水路群、水田畦畔が検出され、段丘面上では松菊里型住居で構成される居住域が検出されている。

当該期の墓域は三国丘陵部の**三国の鼻遺跡（15）**や**横隈上内畑遺跡（38）**で確認されている。

当地域では段丘裾に進出した地域開発の拠点的集落（**力武内畑遺跡**など）が「母村―分村」関係を軸に、谷筋を共有しながら前期中頃から中期前半にかけて、丘陵上に変遷していく様子が窺えるが、その一連の集落遺跡のまとまりを「集落群」と呼称している。三国丘陵には、このような一定のまとまりを持ちつつ変遷する「集落群」が複数存在し、弥生文化着床以降の人口増加は当初、それぞれの「集落群」領域内の人口密度を高める方向で進み、前期末～中期初頭に至っては、拡大した「集落群」領域（人口増加）によって地域社会のストレス・調整規模が増大し、中期前葉以降「集落群」領域の再編が広く行われる（山崎2010）。その変遷過程で各独立丘陵上に環濠が掘削される。**横隈山遺跡（32）第６・７地点**［板付Ⅱａ式古相段階に掘削］、**横隈山遺跡第５地点・三沢北中尾遺跡（26）７地点**［Ⅱａ式新相段階に掘削］、**三沢北中尾遺跡１地点**［Ⅱｂ式古相段階に掘削］では貯蔵穴群を包括する環濠が集落変遷に伴い掘削される。環濠は三国丘陵域では、ほかに**津古内畑遺跡（８）**、**横隈北田遺跡（16）**でも確認されている。

また、この地域では特徴的に朝鮮系無文土器が多く出土する。**三国の鼻（15）**、**横隈北田（16）**、**横隈鍋倉（22）遺跡**が該当し、それら遺跡は三国丘陵中部東端の沖積平野を見下ろす、比較的近接した立地である。

三国丘陵域前期社会の結実として大形化した拠点的集落が**一ノ口遺跡（18）**である。前期末から中期初頭に最も発展をみせ、竪穴建物54軒、土坑250基（うち貯蔵穴129基）が検出される。大形円形竪穴建物に小形の長方形竪穴建物が付随する傾向が顕著である。板状鉄斧などの鉄器類が出土し、特筆される。地山を掘り込んだ溝状の道路状遺構や柵列状のピット群が築かれ、それが張り出す部分には

物見やぐらと考えられる建物も存在する。先の大形円形建物に小形長方形建物が付随する形は**三沢北中尾遺跡（26）２地点**でも見られる。また、集落を囲繞する柵列状ピット群は近年、**三沢北中尾遺跡10地点**でも確認され、丘陵斜面端部をピット群で囲繞する集落はほかにも存在しているものと考えられる。

前期末から中期前半の墓域は**ハサコの宮遺跡（19）**や**北牟田遺跡（31）**にまとまってみられる。

中期後半以降になると、三国丘陵上での集落は散在し、前期末に見せた状況とかけ離れる。弥生時代後期遺跡は前期前半代の遺跡立地に近い。例えば、沖積平野を見下ろす丘陵斜面に前期前半から墳墓が営まれる**三国の鼻遺跡（15）**では丘陵頂部に環濠集落が営まれる。比高差２～３ｍの谷部と面した低丘陵上に立地する**三沢栗原遺跡（34）**では弥生時代前期前半の竪穴建物跡、中期末から古墳時代前期にかけて100軒近い竪穴建物が検出されている。**横隈狐塚遺跡（27）**では中期後半から古墳時代前期に至る甕棺墓167基、土壙墓187基、石棺墓10基で構成される墓域が調査されている。

宝珠川を挟んで北側の丘陵に広がる隈・西小田遺跡群（１～13地点）でも、弥生時代前期末から後期初頭、特に中期の広大な墓域を含む集落群が調査されている。中期中頃の**第３地点**109号甕棺では熟年男性骨とともに細形銅剣１、ゴホウラ製貝輪８が出土し、中期後半の**第13地点（６）**23号甕棺では成人男性骨とともに前漢鏡１、鉄剣１、鉄戈１、ゴホウラ製貝輪41が出土し、周辺地域の首長墓と想定されている。また、**第７地点（４）**では中細形銅戈23口が埋納されていた。

宝満川右岸の市中南部にかけての段丘上では**大板井遺跡（53）**を中心とした遺跡展開が比較的明らかである。大板井遺跡はその存在が早くから知られ、1923年中山平次郎氏により、『筑後國三井郡小郡村大字大板井の巨石』と題して紹介がなされている。**大板井遺跡**は遺跡東部で弥生時代前期中頃より展開し始め、前期中葉から後半の住居跡、貯蔵穴が検出されている。該期の墓域は**寺福童遺跡５地点（61）**で副葬小壺、柳葉式磨製石鏃、有柄式磨製石剣等を有する前期木棺墓群が検出されている。この小規模な集落は中期初頭まで継続し、続く中期前半には集落の大きな画期を迎え、集落規模が飛躍的に拡大し、遺跡全域に住居群が展開する。この時期には住居群の北限を示す断面Ｖ字の溝がＩ区で検出されている。それぞれの居住単位の周辺には墓地を営み、中期後半まで継続した集落と墓地を形成する。中細形銅戈７本や舶載品とされる最古級の鉄鎌をはじめ、多くの鉄器の出土も特徴的である。しかし、中期末から後期初頭にかけては集落規模が衰退し、遺構も希薄になる。そういった情勢のなか、**寺福童遺跡４地点（63）**では、中広形銅戈９本が後世の遺構に切られているものの、埋納された状態で検出された。調査区には、同時代の遺構・遺物が見られない。その母集団をどこに想定するかが今後の課題である。**大板井遺跡**では後期中頃以降、再び集落規模が大きくなり、環濠も築かれる。

また、**大板井遺跡**の西に浅い谷を隔てて、**小郡・若山遺跡（50・52）**が所在する。**大板井遺跡**同様、前期中頃より各生活遺構がみられる。中期前半に集落が拡大し、**小郡遺跡（52）**の古代の掘立柱建物に切られて径12ｍを測る大形円形住居跡２軒などが確認されている。墓地は居住域北側で甕棺墓地が築かれる。特筆される遺物として、**小郡若山遺跡（29）３区**で須玖Ｉ式の甕に埋納された２面の多紐細文鏡が発見されている。これらの**大板井、小郡・若山遺跡群**は、東西１㎞、南北700ｍの範囲に広がり、地域の拠点的集落である。

大板井遺跡の規模が縮小する中期後半から後期の遺跡には、**大崎中ノ前（66）**、**大崎小園（62）**、**小板井屋敷（59）**、**大崎（64）遺跡**が挙げられる。比較的標高の低い部分に集落立地が見られる。**大崎中ノ前遺跡**は、標高約10ｍ、宝満川が形成する扇状地縁辺部、**大崎小園遺跡**は標高11ｍ前後の微高地上、**小板井屋敷遺跡**は標高12ｍ前後の低位段丘裾部分、**大崎遺跡**は標高13ｍ前後の自然堤防上に立地している。後期初頭になると低地付近の遺跡は減少し、後期後半から再び営まれる。

宝満川左岸の花立山から派生する段丘上に立地する弥生時代遺跡は先述の通り、**上岩田遺跡（54）**

付近で着床し、その後、**吹上北畠遺跡**、**井上廃寺（51）**等で前期の遺物が散見される。**上岩田遺跡**では刻目突帯文期、中期末から後期にかけての集落遺構が検出されている。周辺では**井上北内原遺跡(49)**で中期前半から後期終末の居住域と墓域がセットで検出され、同時期の集落と墓地の在り方がわかる遺跡である。後期終末から古墳時代初頭にかけて発展する**乙隈天道町遺跡（25）**では100軒近い竪穴建物が調査される。60号竪穴住居からは砥石に転用された中細形銅戈鋳型が出土した。他にも周辺の**乙隈東畑遺跡（24）**で昭和36年に中広形銅戈２口が発見され、また、所在は不明ながら『筑後将士軍談』に乙隈から中広形と考えられる銅矛が出土した記述がある。北方２㎞には中期後半の前漢鏡やガラス壁片円盤を副葬した甕棺墓が検出された**東小田峯遺跡（７）**を中心とした遺跡群が存在する。

［古墳時代］

当地域の古墳時代出現期前後の遺跡動向は、弥生時代後期後半代から続く集落群の一連の消長のなかにあって、庄内式併行期に集落活動が活発化している。**津古遺跡群（11）**、**三沢遺跡群**、**大崎・寺福童遺跡群**、**筑前町東小田遺跡周辺（７）**に分布のまとまりがある。在地系土器を主体とした組成をもつ遺跡がほとんどで、**津古遺跡群**や**筑前町東小田遺跡周辺**では外来系土器を主体とする遺構が一部存在するにすぎない。布留式期になると、各遺跡群で集落活動が衰退する。また、当地域は**津古生掛古墳（12）**以降、**津古２号→１号（11）→三国の鼻遺跡１号墳（15）→花聳２号墳→花聳１号墳（43）**までの５世紀代前半までの首長墓系列が明らかである。その後、若干の空白を持ち、５世紀後半に**横隈山古墳（21）**が築かれる。花聳２号墳から出土した鉄鋌16は４世紀末の早い段階での渡来系文物の流入を示す資料といえ、特筆される。また、花立山山麓には４世紀初めの前方後方墳、**焼ノ峠古墳(37)**が築かれる。

その後、古墳時代中期には渡来系集団との関わりが顕著な地域となり、渡来系集団の墓地として知られる**古寺・池の上墳墓群**や初期須恵器窯である**朝倉古窯跡群（41）**など、著名な遺跡が取り巻く環境下にある。**西島遺跡(46)**では大量の滑石製品・未成品が出土した。西600ｍの基山町**伊勢山遺跡(45)**で竪穴建物跡から2000点に及ぶ臼玉と有孔円盤などが出土しており、**西島遺跡**からの流通が考えられる。**三沢蓬ヶ浦遺跡（20）**では埴輪窯が調査され、その製品は東400ｍの横隈山古墳へ供給された可能性が示唆される。また、筑紫野市**隈・西小田遺跡**でも計５基の初期須恵器窯が調査される。

三国丘陵上では、**隈・西小田遺跡群**、**津古生掛（12）**、**三国の鼻（15）**、**横隈鍋倉（22）**、**三沢栗原遺跡（34）**でこの時期再び集落が形成され始める。後期になると、それらの集落が発展し、拡大していく様子がうかがわれる。しかし、丘陵上を選地の集落は地形的制約もあり、大規模でない。古墳時代後期では**大崎井牟田遺跡（60）**や**大崎小園遺跡（62）**で小規模ながら集落活動がみられる。

この時期には**三沢古墳群（17）**で５世紀後半から８世紀にかけての群集墳が築造される。６世紀末から７世紀前半に最も多くの古墳が築かれる。また、古墳周辺からは馬を埋葬した土壙墓が20基程検出される。特徴的な遺物として６世紀末から７世紀前半の横穴墓から銅椀が出土している。同時期の首長墳には、北1.5㎞の独立丘陵上に６世紀後半代筑紫野市**五郎山古墳（３）**が、続いて**大振山１号墳（４）**が築かれる。花立山地域では、首長墳として**花立山穴観音古墳（44）**が築かれ、また、小郡市域のみで６世紀末から７世紀を中心とした約300基の群集墳が存在する。

６世紀後半では**苅又地区（13）**に７基の須恵器窯跡が見つかっており、その供給関係も解明されつつある。

以上のように古墳時代中・後期には集落・古墳の在り方から、現段階では活発な集落展開が見られず、首長系譜もはっきりしていないが、続く７世紀から８世紀にかけては遺跡展開が顕著となる。**干潟遺跡群（35・36）**、**上岩田遺跡（54）周辺**、**小郡官衙遺跡（52）**周辺では大規模な集落群及び公営施設が営まれるにいたる。

第３章　平成20年度の試掘調査成果

Ⅰ．調査の概要

調査地は昭和45・46年度調査地と三沢蓬ヶ浦遺跡に挟まれた独立丘陵で、東西に長い楕円形を呈する丘陵（最頂部標高50ｍ前後、東西150ｍ×南北100ｍ）の西側斜面（標高37～44ｍ）において実施された（第７・８図）。実施部分は、樹木がなく、雑草が繁茂しているのみであったので、すぐに試掘が可能であった（樹木がある丘陵中央から東部分にかけては、平成22年度に調査を実施）。

地形に応じて、合計８箇所のトレンチを設定し、そのうち、５箇所のトレンチからは遺構が確認された。現在は丘陵裾の緩い斜面地となっているが、調査の結果、谷部を埋めた造成土が多く確認されることから、一部には、大規模な地形改変（埋め土）が行われており、地山を検出できなかったトレンチも存在する。

確認された遺構は、以下のとおりである。

〈弥生時代〉

土　坑　４基　　溝　１条　　ピット　多数　等

Ⅱ．試掘調査成果

１．各トレンチの内容

１トレンチ（第８・９図、図版１）

平成20年度試掘範囲のうち、最南端に位置するトレンチである。現地表面の標高39～40ｍを測る。傾斜の方向にトレンチを入れた。トレンチの規模は1.5ｍ×3.5ｍ、検出面の深さは現地表面から1.9ｍで、花崗岩ばいらん土の基盤層である。検出面の上層では、植物腐食土層（旧表土）と地山系土の流入・堆積土の互層堆積（各層厚10～20㎝）がみられる。遺構・遺物は検出されなかった。

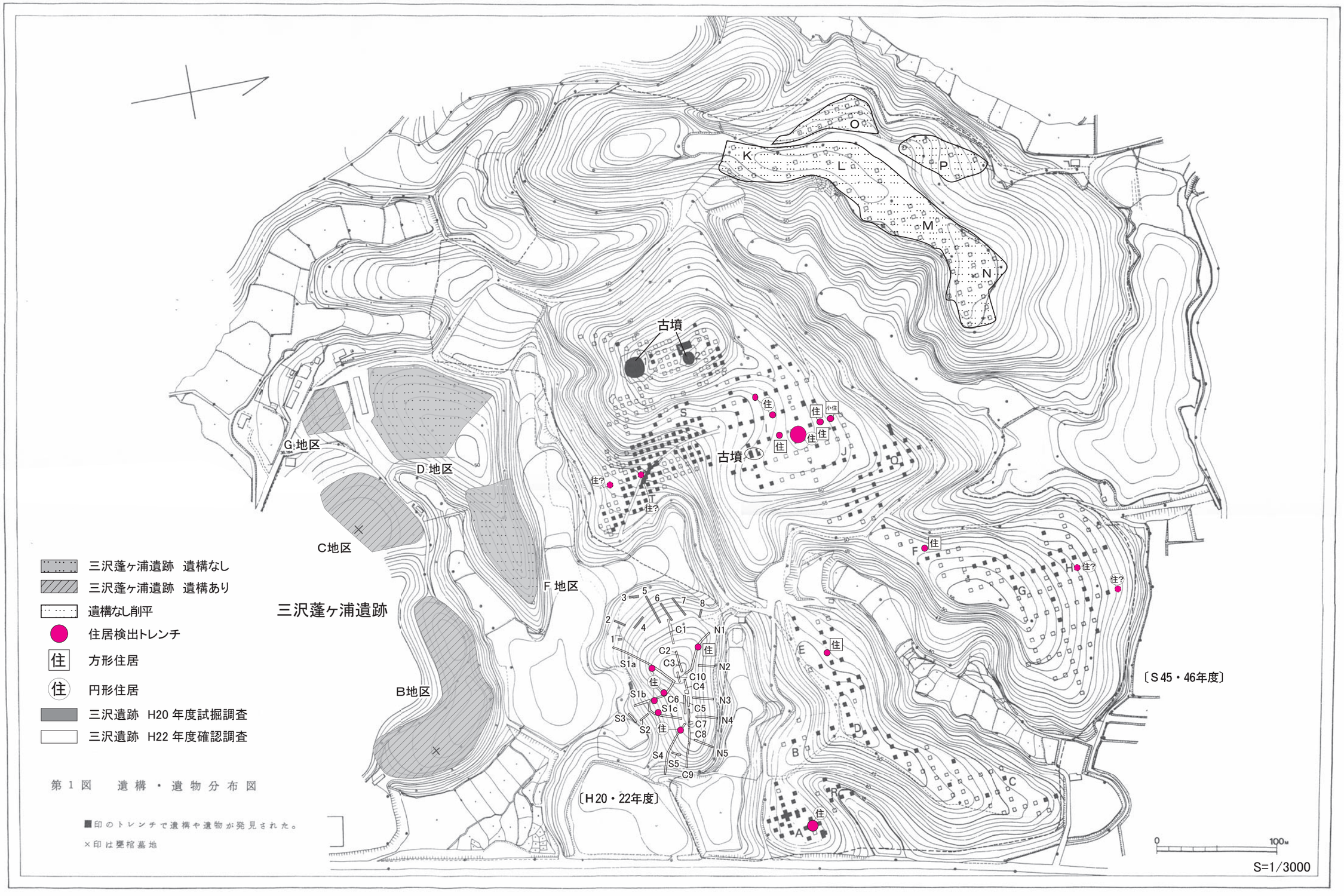
２トレンチ（第８・９・13図、図版１・13）

１トレンチの西側12ｍ地点のトレンチで谷部に近い。現地表面の標高37～39ｍを測る。傾斜の方向にトレンチを設定した。トレンチの規模は1.5ｍ×10ｍ、検出面の深さは現地表面から0.9ｍ～1.5ｍで、花崗岩ばいらん土の基盤層である。検出面の上層では、層厚25㎝の遺物包含層（暗灰褐色土）が堆積している。その上層は造成土である。丘陵裾部の傾斜面の地形を良く残しており、トレンチ北側で土坑（SK1）を検出した。調査区外に及ぶため、形状・規模等は不明である。埋土は淡茶褐色で弥生土器片を含む。

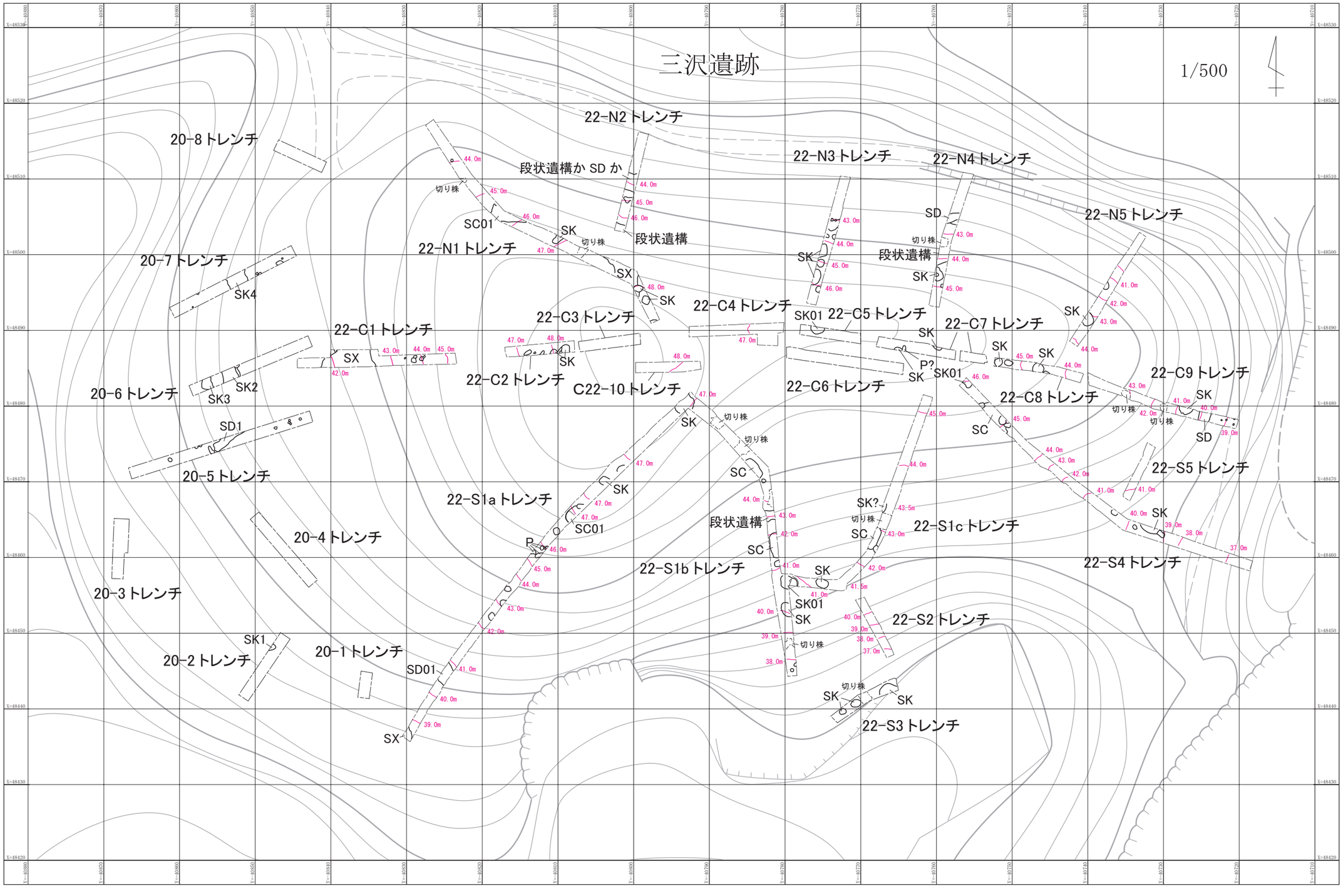
包含層から出土した弥生土器甕口縁部片（第13図２）は残存高4.1㎝、口縁部に断面丸みをおびた台形の突帯を貼り付けた城ノ越式の甕である。口縁部が最大径とならずに、ふくらみを持つ胴部形態のものと思われる。成形時の指オサエがわずかに残り、内外ともにナデで調整される。胎土には２～３㎜の砂粒を多く含み、色調は内面7.5YR6/4にぶい橙色、外面7.5YR5/4にぶい褐色を呈する。焼成は良好である。

３トレンチ（第８・９図、図版１）

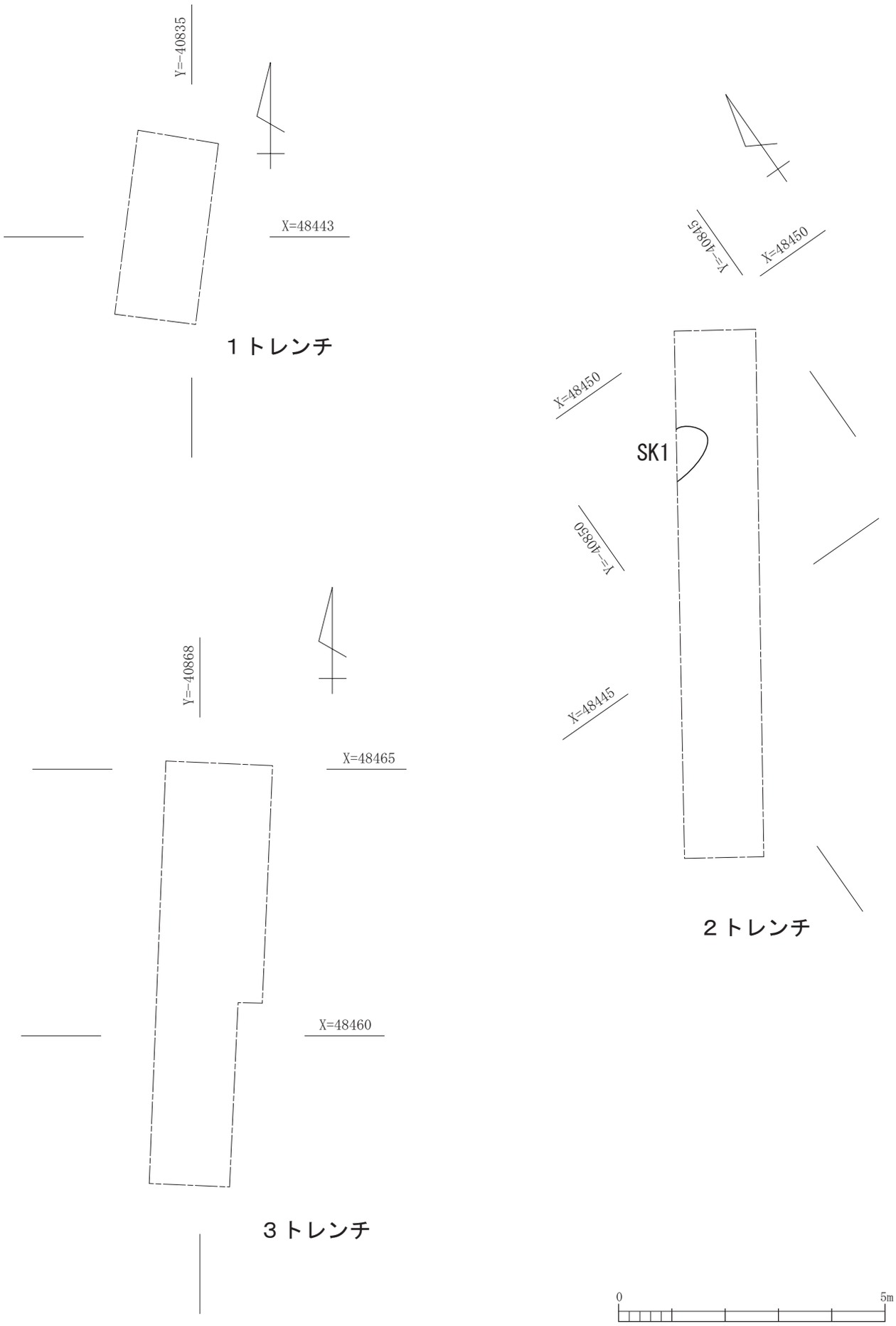
２トレンチの北西側22ｍ地点のトレンチで、現地表面の標高37～38ｍを測る。等高線に沿う形でトレンチを設定した。トレンチの規模は1.5～２ｍ×８ｍである。造成土と廃棄物による大掛かりな埋土が確認され、約２ｍ掘削したが、地山の検出にいたらなかった。東側の谷部へ続く落ち込みになると考えられる。遺物の出土はみられない。



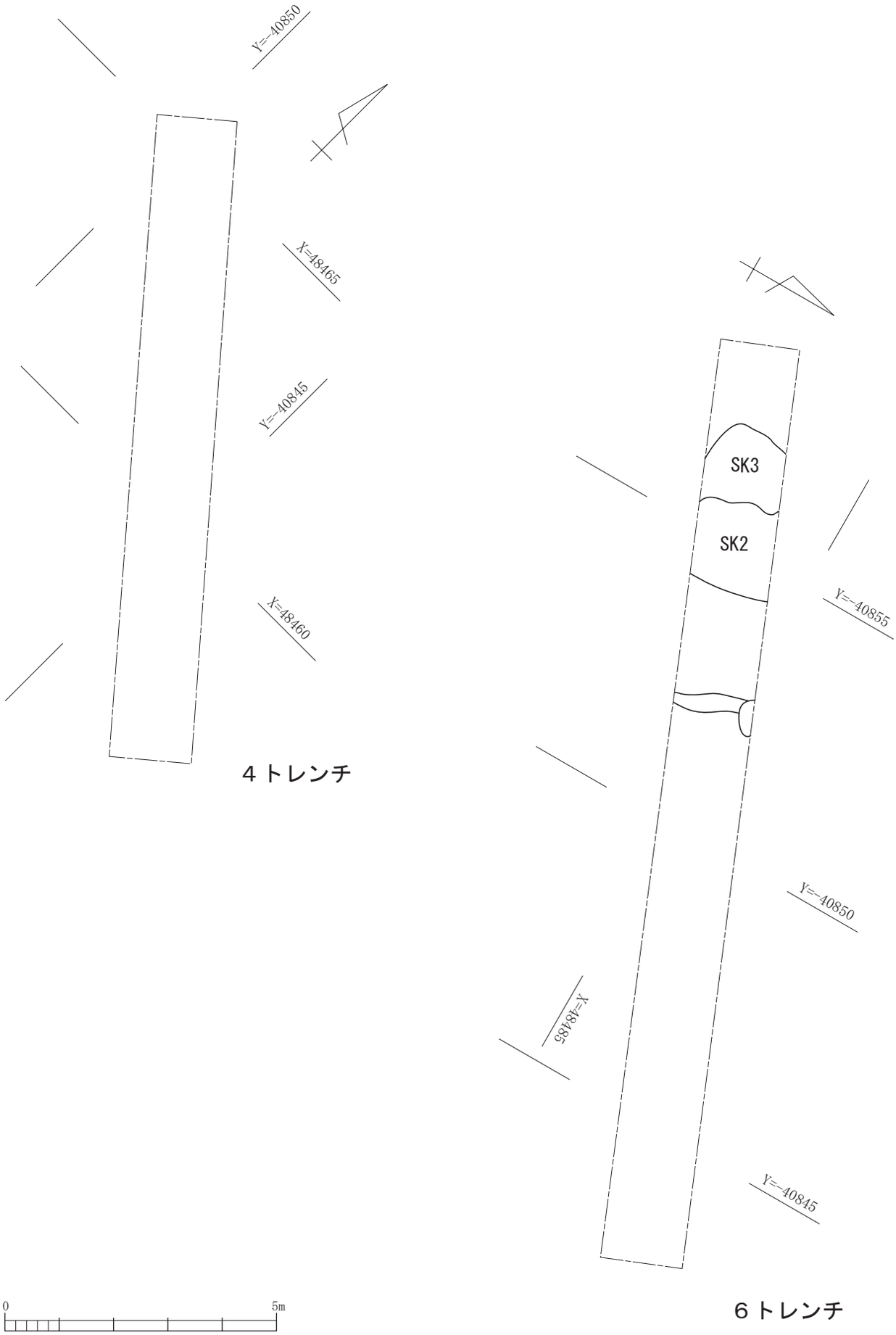
第７図　三沢遺跡既調査トレンチ配置図（S=1/3,000）



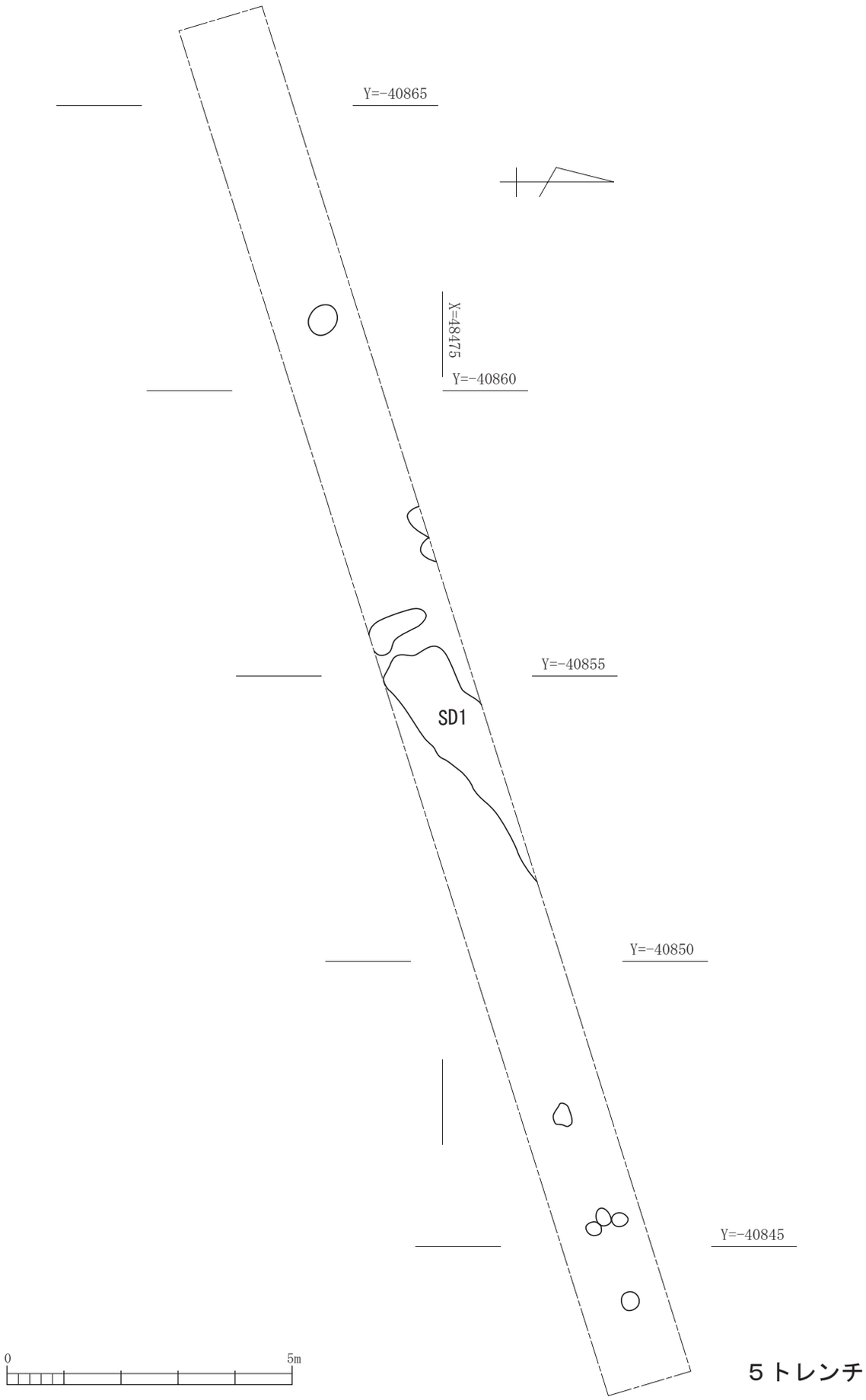
第８図　三沢遺跡遺構配置・地形合成図（平成20・22年度）(S=1/500)



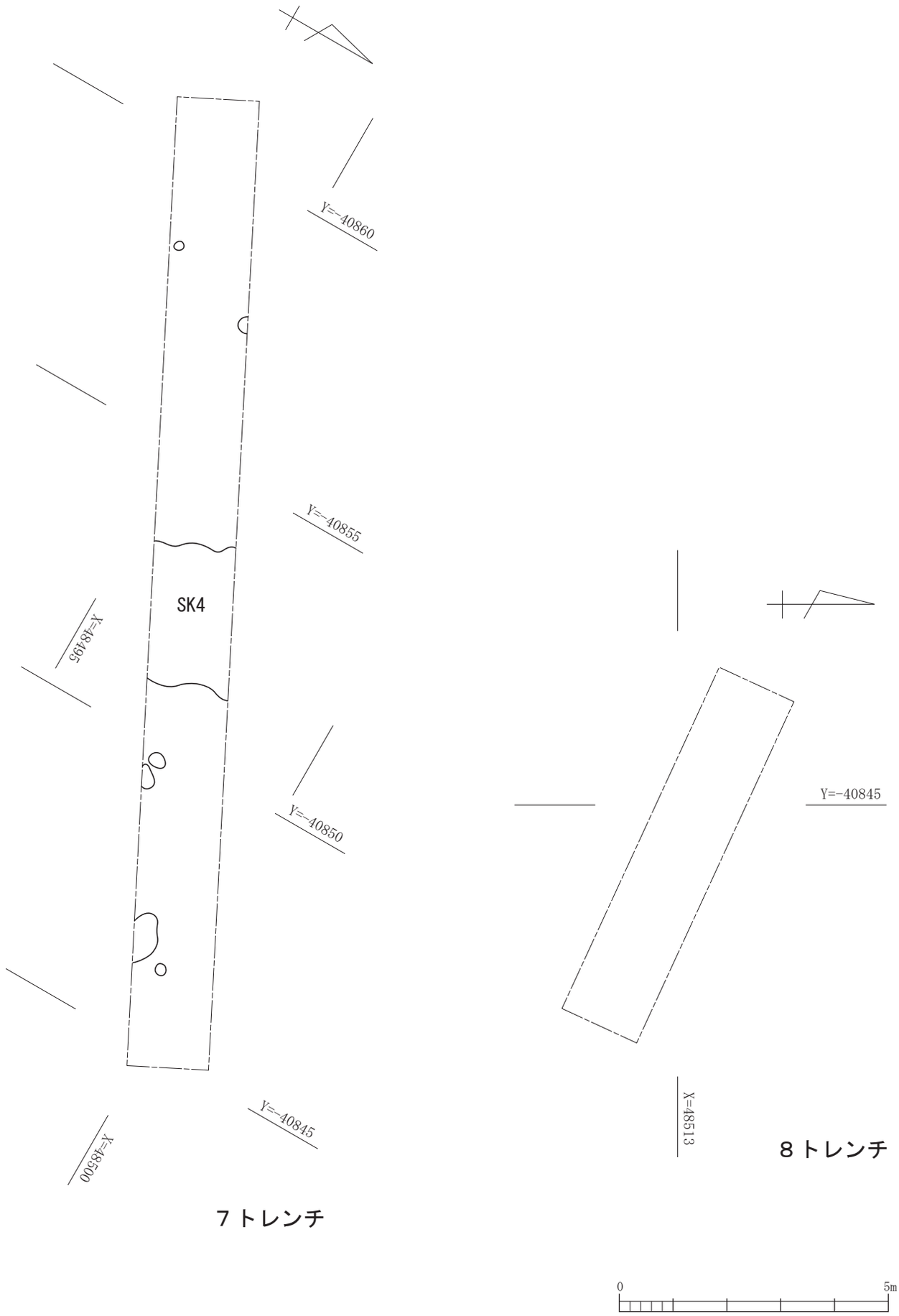
第９図　１・２・３トレンチ遺構平面図（S=1/100）



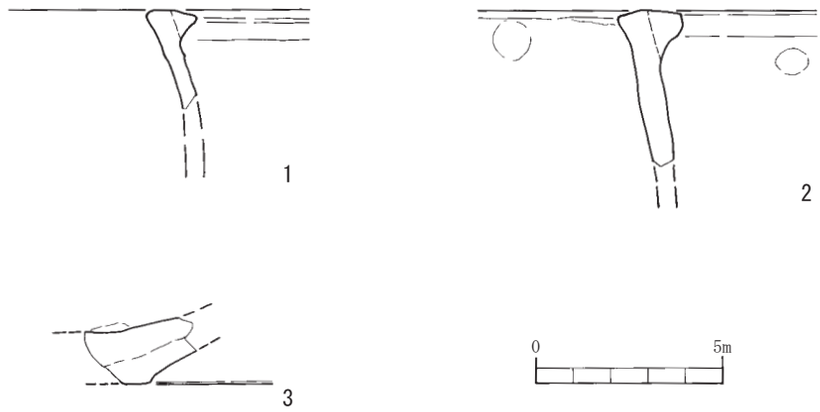
第10図　4・6トレンチ遺構平面図（S=1/100）



第11図　５トレンチ遺構平面図（S=1/100）



第12図　7・8トレンチ遺構平面図（S=1/100）



第13図　20年度試掘調査出土遺物実測図（S=1/2）

4トレンチ（第8・10図、図版1）

3トレンチの東側20m地点のトレンチで、現地表面の標高41mを測る。等高線に沿う形でトレンチを設定した。トレンチの規模は1.5m×15.8m、検出面の深さは1.6m～1.8mで、花崗岩ばいらん土の基盤層である。検出面の上層には旧表土層（黒色腐食土層）が30㎝、その上層に暗灰褐色土層が30㎝、最上層は造成土90㎝堆積している。上層の暗褐色土ベースでピットを検出した。遺物の出土はみられない。

5トレンチ（第8・11図、図版2）

4トレンチの北西側のトレンチで、現地表面の標高38m～39mを測る。傾斜の方向にトレンチを設定した。トレンチの規模は1.5m×25m、検出面の深さは0.8m～3.3mで、花崗岩ばいらん土の基盤層である。標高の低い部分では、花崗岩ばいらん土の直上に暗灰色粘土が堆積している。トレンチ西側の土層観察では、青灰色粘土が50㎝程度堆積し、その上層に造成土（埋め土）が2m以上みられる。丘陵裾部から谷部にかけての地形が確認できた。検出遺構はピットと溝（SD1）である。溝はトレンチ中央から北東方向に、傾斜方向に沿って検出され、幅1.2m程度でごく浅い。埋土は淡茶褐色土である。ピットの分布は北東の標高の高い方向に多くみられる。ピットの径は20㎝～60㎝までのものがみられ、いびつな形状となるものもみられる。遺物の出土はみられなかった。

6トレンチ（第8・10・13図、図版2・13）

5トレンチの北側6m地点のトレンチで、現地表面の標高40m～44mを測る。傾斜の方向にトレンチを設定した。トレンチの規模は、1.5m×17m、検出面の深さは0.15m～1.8mで、花崗岩ばいらん土の基盤層である。検出面の上層は造成土が厚く堆積している。丘陵裾部の地形が確認できた。トレンチ西側でSK2とSK3が切り合う形で検出された。双方とも一部の検出のみで全体形状・規模等はわからないが、SK3は遺構の角部分が検出されており、方形状となるものと考えられる。SK1は、埋土は暗茶褐色土で炭化物や土器片を含んでいる。SK2は淡茶褐色埋土である。これらは貯蔵穴の可能性がある。他に細い溝状の遺構、ピットが検出されている。

SK1からは弥生土器甕口縁部片（第13図1）、弥生土器壺底部片（3）が出土した。甕口縁部（1）は残存高2.7㎝、口縁部に三角形の突帯を貼り付けた城ノ越式の甕である。最大径は口縁下にある。磨耗により調整不明である。胎土は1～3㎜の砂粒を多く含み、色調は内外面とも7.5YR7/6橙色を呈し、焼成は良好である。壺底部片（3）は残存高1.8㎝、底部からの立ち上がりが緩い。調整は指オサエ後のナデが確認される。胎土は1～3㎜の砂粒を多く含み、色調は内面7.5YR5/3にぶい褐色、

外面5YR6/6橙色を呈する。焼成は良好である。他に２㎝程の平坦面を持つ須玖式の甕口縁部小片が出土している。口縁部の平坦面貼り付け部の接合面で剥離した資料である。

７トレンチ（第８・12図、図版２）

６トレンチの北側９ｍ地点のトレンチで、現地表面の標高40ｍ～44ｍを測る。傾斜の方向にトレンチを設定した。トレンチの規模は、1.5ｍ×18ｍ、検出面の深さは0.15ｍ～2.3ｍで、花崗岩ばいらん土の基盤層である。標高の低い部分では、花崗岩ばいらん土の直上に暗灰色粘土が堆積している。トレンチ西側の土層観察では、青灰色粘土が40㎝程度堆積し、その上層に造成土（埋め土）が1.9ｍ以上みられる。丘陵裾部から谷部にかけての地形が確認できた。トレンチ中央部で貯蔵穴の可能性のあるSK4を検出した。検出が一部であり、全体形状・規模は不明であるが、短軸の幅が2.5ｍ程度を測る。埋土は暗茶褐色土である。他にピットが全体に分布するが密度は低い。遺物の出土はみられなかった。

８トレンチ（第８・12図、図版２）

７トレンチの北側12ｍ地点のトレンチで、現地表面の標高42ｍ～43ｍを測る。傾斜方向にトレンチを設定した。トレンチの規模は1.5ｍ×７ｍ、検出面の深さは0.8ｍ～３ｍ以上となる。花崗岩ばいらん土の基盤層である。急な斜面形状を呈し、標高の低い部分では青灰色粘土層（植物遺体含）が厚く堆積している。トレンチ西側の土層断面では、1.3ｍ以上青灰色粘土層が堆積し、その上層に灰色粘土が40㎝、その上層に造成土が1.3ｍ程度みられる。谷部に向けて傾斜が深くなる地形である。遺物の出土はみられなかった。

Ⅲ．小結

平成20年度試掘調査は、丘陵（最頂部標高50ｍ前後、東西150ｍ×南北100ｍ）の西側斜面（標高37～44ｍ）において実施され、丘陵西側裾部分の遺構分布の状況が明らかとなった。

現況で丘陵南側では中央部と東側で丘陵を抉るように短く谷部が入るが、西側では、そのようなことはなく谷部が緩やかに丘陵裾部をとりまいている。現地形からも丘陵裾部の面積が大きく、緩い斜面地が広がると考えられた。

丘陵の緩斜面は、頂部とともに土地が扱いやすい部分であり、試掘結果からもその様子がうかがえた。特に西側斜面の中腹辺りに遺構がみられ、弥生時代中期初頭の貯蔵穴と思われる遺構やピットが分布しており、住居自体は未確認であるが、同時期の集落構造を参考にすると、貯蔵穴の周辺には居住域が想定できる。西側斜面にひとつのまとまりをもった居住単位が存在する可能性がある。ピット群の詳細は不明であるが、柵列状の遺構となり、何らかの区画の可能性もあろう。

平成20年度試掘調査の大きな成果は、本独立丘陵にも、遺跡が存在し、また、北側の県指定三沢遺跡と同様の遺跡分布の可能性が窺えるようになったことである。その成果を受けて、周知の埋蔵文化財包蔵地三沢遺跡範囲を更新した。

第４章　平成22年度の確認調査成果

Ⅰ．調査の概要

平成20年度の試掘調査では、東西に長い楕円形を呈する丘陵（最頂部標高50ｍ前後、東西150ｍ×南北100ｍ）の西側斜面（標高37～44ｍ）に遺跡が存在することが明らかとなった。

平成22年度の確認調査では、丘陵本体の遺構の内容を明らかにするための調査を行った。調査に先立ち、あらかじめ、トレンチ配置を決定し、その部分の樹木の筋伐採（約６ｍ幅）を行った。その後、重機による表土掘削を進めた。トレンチは大きく、北側斜面（Ｎトレンチ：５本)、東西尾根線上（Ｃトレンチ：10本)、南側斜面（Ｓトレンチ：７本）に分かれる。

丘陵頂部付近のトレンチや急斜面のトレンチでは遺構が確認されない個所も存在するが、ほとんどのトレンチで遺構が確認された。また、遺構の密度には粗密があり、丘陵上における土地利用のあり方を具体的に示していると考えられる。

出土遺物は少量であるが、弥生土器片、剥片石器類、須恵器小片等が出土している。それらの状況から、遺構の所属時期は概ね弥生時代を中心としたものと判断される。

確認された遺構は以下のとおりであるが、確認調査の性格上、遺構の掘削は最小限度にとどめ、検出のみの遺構が多いため、遺構種別が将来的に変更になることも想定される。

・Ｎトレンチ
　〈弥生時代〉　　住居跡１軒　土坑11基　溝１条　段状遺構３基ほか
・Ｃトレンチ
　〈弥生時代〉　　土坑８基　溝１条ほか
・Ｓトレンチ
　〈弥生時代〉　　住居跡５軒　土坑10基　溝１条　段状遺構１基ほか

＊第８図はトレンチ配置図を予備調査概要で示された地形図（西谷編1971）と合成したものである。現地表面の等高線の標高が平成22年度調査と若干異なるが、旧地形の傾向をよく示しているので、そのまま合成している。なお、報文では、検出面までの深さを示すために、平成22年度調査時測量の標高で記述している。

Ⅱ．確認調査成果

１．北側斜面部の調査

N1 トレンチ（第８・14図、図版３）

丘陵頂部から北西方向にのびるゆるやかな尾根線があるが、その尾根線に沿う形でトレンチを設定した。現地表面の標高は44ｍ～48ｍ程度を測る。トレンチの規模は1.5ｍ×41ｍ、検出面の標高は43.5ｍ～48ｍで、表土直下数十㎝が遺構検出面となる。花崗岩ばいらん土が基盤層である。特に丘陵頂部付近では、表土の堆積が10㎝に満たず、現地形と同様の地形傾斜であることがわかる。

丘陵頂部付近で土坑、不明遺構、トレンチ中央部で住居跡（SC01)、土坑、トレンチ北側でピットを検出した。SC01については、遺構内容の確認のためにトレンチを入れて、堆積状況、床面の状況を確認した。土層堆積状況は標高の高い方の壁付近から地山系粘質土の流入があり、その後も緩やかな水平堆積を繰り返している。検出は一部のため、平面形状・規模は不明ながら、隅丸方形から小判形の平面形を持った弥生時代住居跡と考えられる。遺物の出土はみられなかった。土坑はその一辺や長径が１ｍ程度の小形のもので、ピットの可能性も考えられる。埋土は暗黄褐色粘質土である。

N2 トレンチ（第８・15図、図版４）

N1 トレンチの北西側、丘陵の北側斜面に設定したトレンチである。現地表面の標高は41～47ｍ程度を測る。トレンチの規模は1.5ｍ×13.5ｍ、検出面の標高は43.5ｍ～46.5ｍを測る。検出を行った範囲内では花崗岩ばいらん土が基盤層である。トレンチの北端から５ｍでは、急激に地形が落ちこむ。北端付近では現地表面から約２ｍ以上も下がり、青灰色粘土の堆積も一部確認している。梅雨時であり、地下水位が高く、浅い深さでも湧水がみられた。図面では、機械掘削後に人力で精査した部分のみを示している。

トレンチ南端の標高46ｍ付近で地形を人為的にカットした段状遺構、中央で幅２～2.5ｍの溝もしくは段状遺構等を検出した。南端の段状遺構では一部の検出のため、全体の規模は不明である。層厚併せて30㎝～35㎝の表土層である１・２層以下に、平坦面に上位から堆積した３・４層が存在する。遺物の出土はみられない。

N3 トレンチ（第８・15・27図、図版４・13）

N2 トレンチの東側20ｍ地点、丘陵の北側斜面に設定したトレンチである。現地表面の標高は43～47ｍ程度を測る。トレンチの規模は1.5ｍ×17.5ｍ、検出面の標高は43ｍ～46.5ｍを測る。検出を行った範囲内では花崗岩ばいらん土が基盤層である。トレンチの北端から４ｍでは、N2トレンチ同様、急激に地形が落ちこむ。北端付近では現地表面から約２ｍ以上も下がり、青灰色粘土の堆積も一部確認している。梅雨時であり、地下水位が高く、浅い深さでも湧水がみられた。図面では、機械掘削後に人力で精査した部分のみを示している。

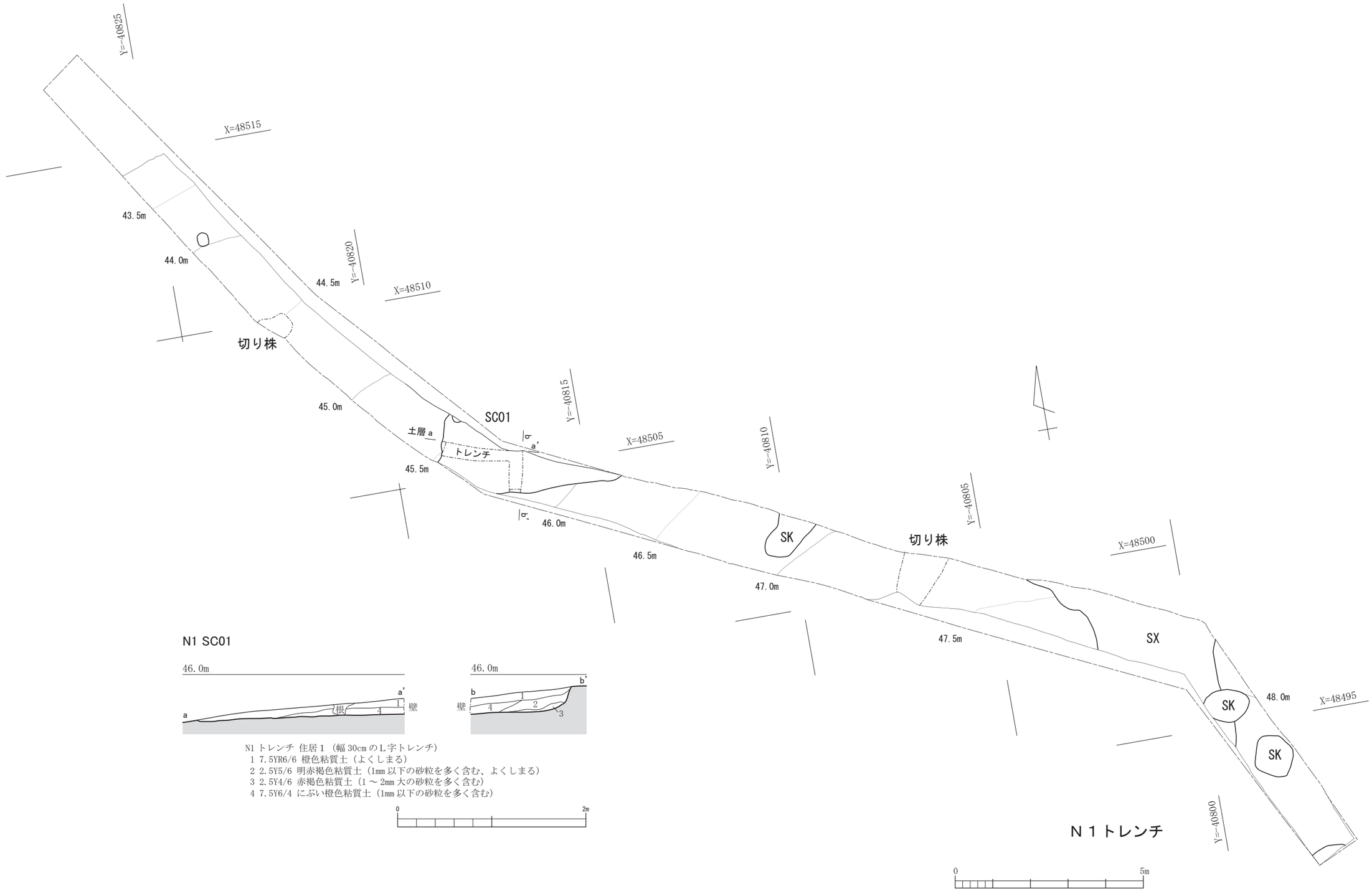
丘陵側のトレンチ南半を中心に中小の土坑群を検出した。径１ｍ程度の円形土坑は深さ10㎝程度の浅い土坑である。埋土は黒褐色土～淡灰褐色土である。一辺1.5ｍ程度の隅丸方形土坑は丘陵側にテラスを持つが、最深部でも深さ15㎝程度と浅い土坑である。テラス部分には床面には地山に含有する小礫が露出している。埋土は淡灰褐色土である。谷部側の北側では東西方向溝の一部かと考えられる幅１ｍ～1.3ｍ程度の遺構が存在する。他にピットが５基確認される。

N3 トレンチ内からは弥生土器甕底部（第27図２）が出土している。厚さが２㎝程、0.4㎝の上げ底で、裾まわりが太くしっかりとした城ノ越式甕底部である。外面の胴部下端には一部ハケ調整が確認できる。底部や内面はナデ調整である。胎土には２～３㎜の砂粒を多く含み、色調は内面7.5YR4/3褐色、外面7.5YR6/6橙色を呈する。焼成は良好である。他に弥生土器甕胴部小片数点、黒曜石の小剥片が１点出土している。

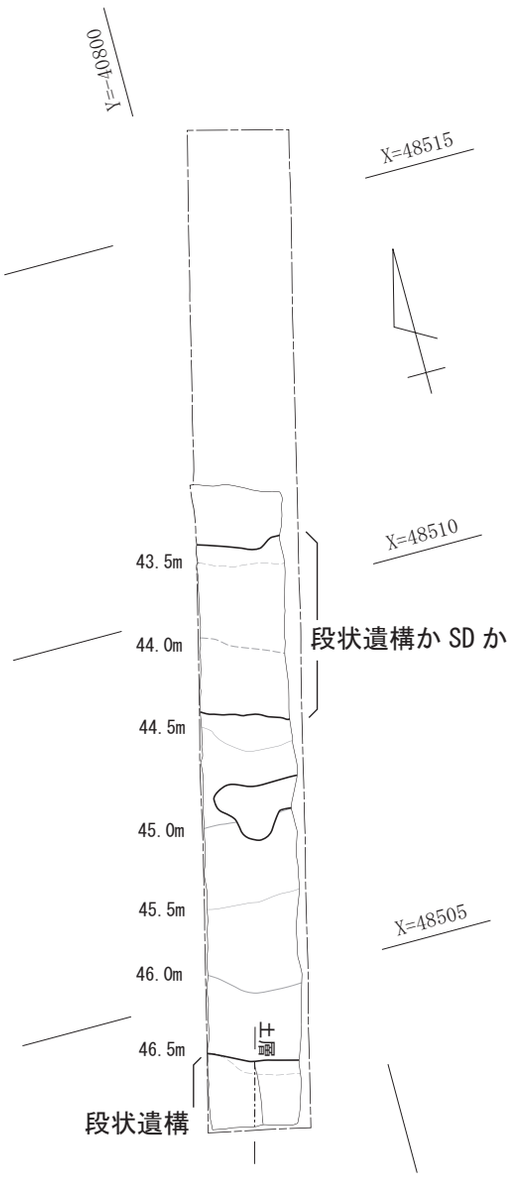
N4 トレンチ（第８・16・26・27図、図版５・13）

N3 トレンチの東側14ｍ地点、丘陵の北側斜面に設定したトレンチである。現地表面の標高は42～47ｍ程度を測る。トレンチの規模は1.5ｍ×18ｍ、検出面の標高は42.5ｍ～45.5ｍを測る。検出を行った範囲内では花崗岩ばいらん土が基盤層である。トレンチの北端から５ｍでは、N3トレンチ同様、急激に地形が落ちこむ。北端付近では現地表面から約2.5ｍ以上も下がり、青灰色粘土の堆積が確認される。梅雨時であり、地下水位が高く、浅い深さでも湧水がみられた。図面では、機械掘削後に人力で精査した部分のみを示している。

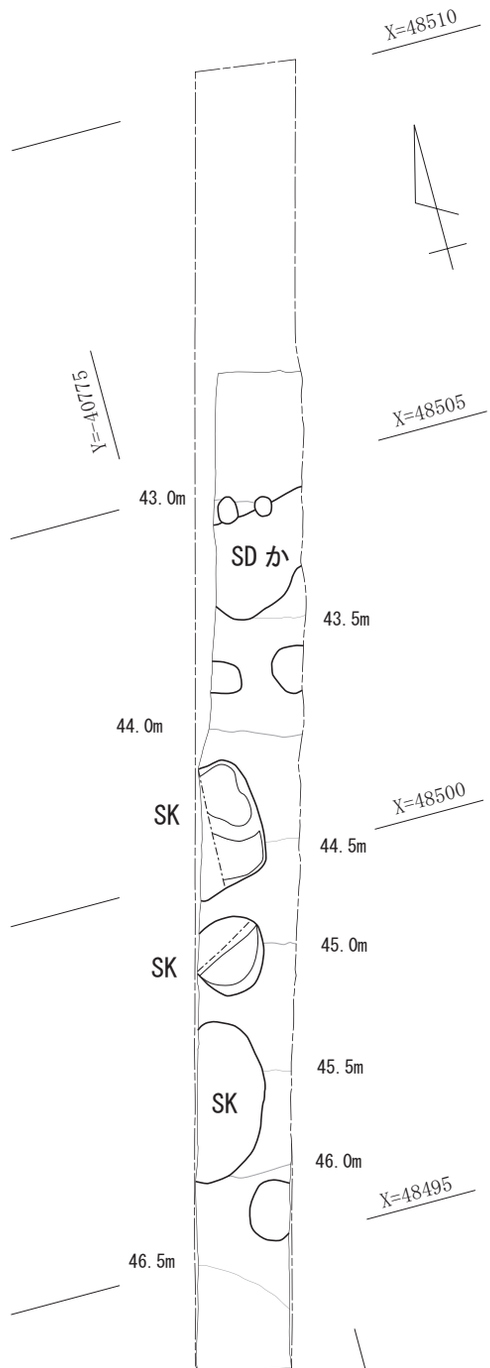
丘陵側のトレンチ南半で土坑、ピットを検出し、中央部分で段状遺構、それを切る形で北側で幅１ｍ程度の浅い溝を検出した。段状遺構は、標高44ｍから42.5ｍまでの幅5.5ｍほどの規模であり、地形を人為的に削って、標高42.6ｍの高さで平坦面を幅2.4ｍ造り出している。堆積土は上位からの地山に似た流入土と旧表土の堆積が幾重にも重なっている。平坦面の直上の11層（旧表土）には弥生土器



第14図　N1 トレンチ遺構平面図（S=1/100）

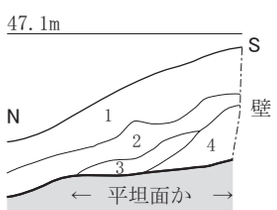


Ｎ２トレンチ

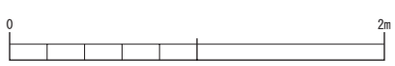


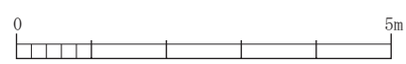
Ｎ３トレンチ

N2 段状遺構

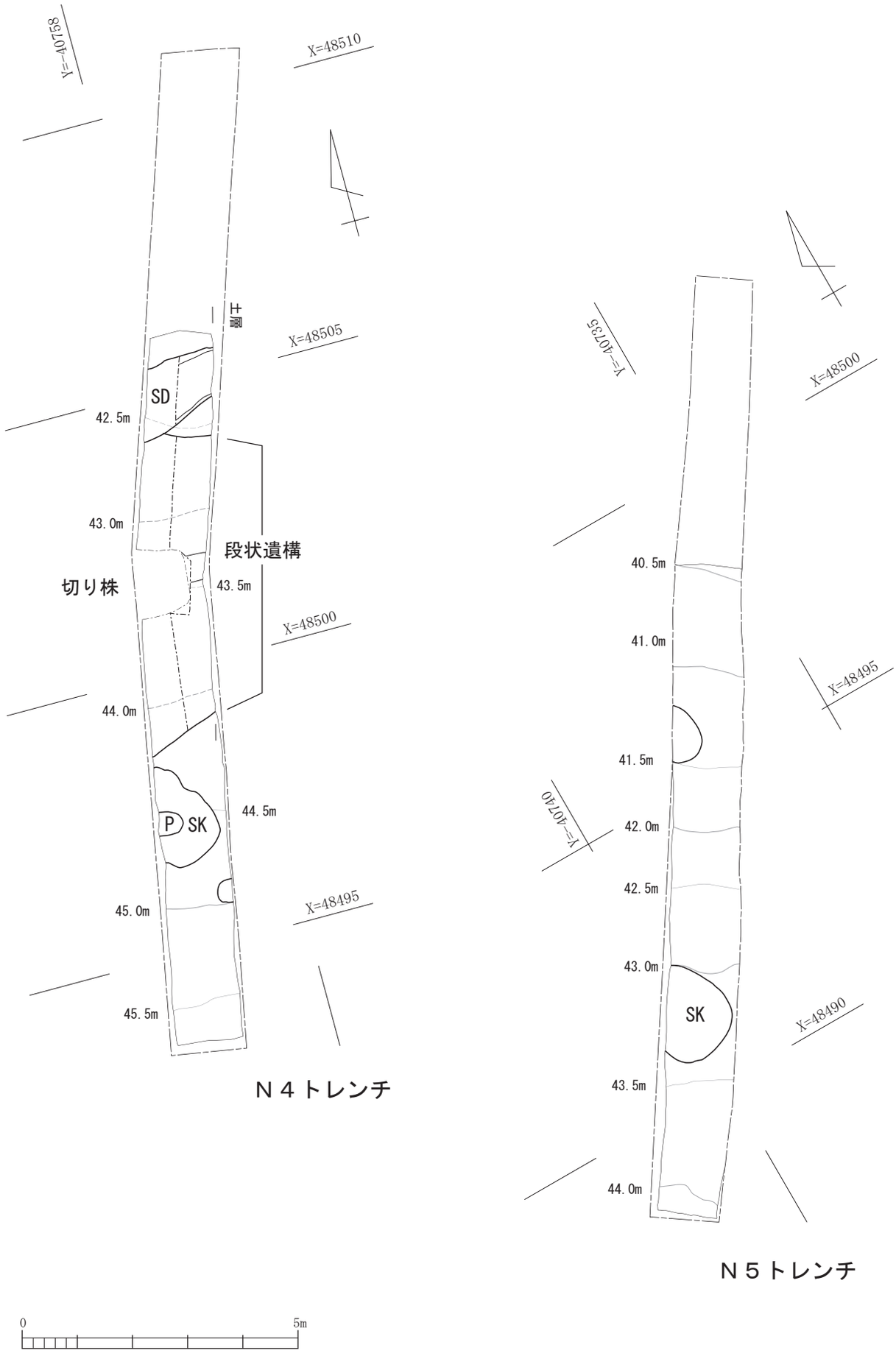


N2 トレンチ 段状遺構１
1 7.5YR4/4 褐色粘質土（柔らかい、粒子も粗い、表土層）
2 7.5YR5/6 明褐色粘質土（固くしまっている、表土層）
3 7.5YR6/8 橙色粘質土（固くしまっている、2層より粘質弱）
4 5YR5/6 明褐色土（固くしまっている）





第15図　N2・ N3 トレンチ遺構平面図（S=1/100）



第16図　N4・ N5 トレンチ遺構平面図（S=1/100）

甕の小片が確認できる。段状遺構内からは安山岩製投弾（第27図４）の出土がみられる。長さ3.1㎝、幅2.7㎝、厚さ2.0㎝、重さ22.4ｇを測る。平面形が円形に整った投弾である。ほかに、黒曜石の小剥片が５点出土している。

段状遺構を切る溝は幅１ｍ、深さ８㎝程度の非常に浅い溝である。埋土は地山に似たにぶい黄橙粘質シルトである。

ほかにトレンチ内では、丘陵頂部側から安山岩製投弾の出土（５）がみられる。長さ3.8㎝、幅3.3㎝、厚さ2.0㎝、重さ27.2ｇを測る。平面形は倒卵形である。

N5 トレンチ（第８・16図、図版５）

N4 トレンチの東側21ｍ地点、丘陵頂部の東端付近から北側斜面に設定したトレンチである。現地表面の標高は40～44.5ｍ程度を測る。トレンチの規模は1.5ｍ×17ｍ、検出面の標高は40.5ｍ～44ｍを測る。検出を行った範囲内では花崗岩ばいらん土が基盤層である。トレンチの北端から５ｍでは、N4トレンチ同様、急激に地形が落ちこむ。北端付近では現地表面から約2.5ｍ以上も下がり、青灰色粘土の堆積が確認される。梅雨時であることもあり、地下水位が高く比較的浅い深さで湧水がみられた。図面では、機械掘削後に人力で精査した部分のみを示している。

丘陵側のトレンチ南半で一辺1.5ｍほどの土坑１基、トレンチ中央部で土坑もしくはピット１基を検出した。埋土は淡灰褐色土である。遺物の出土はみられない。

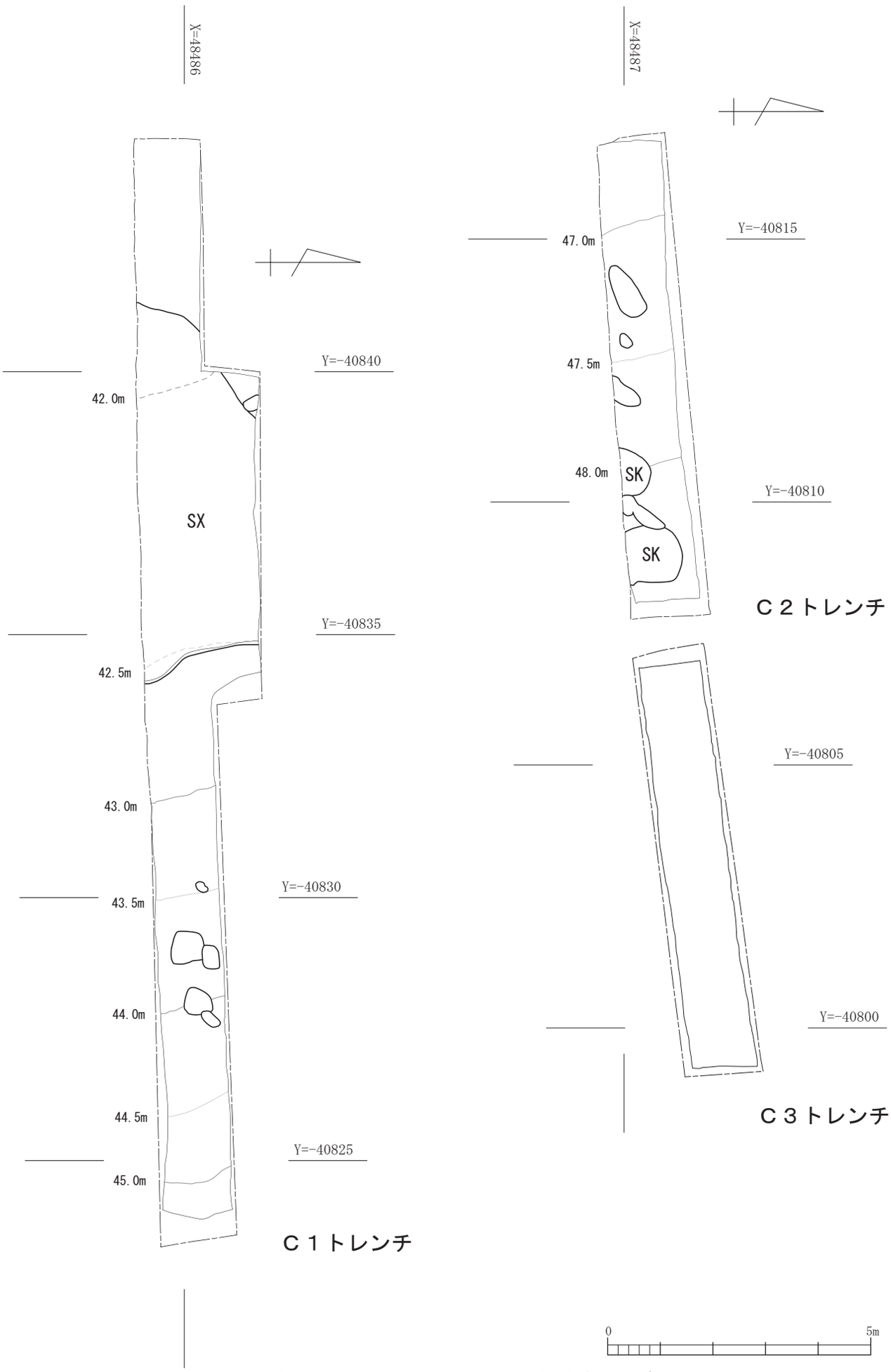
２．丘陵中央尾根部の調査

C1 トレンチ（第８・17・27図、図版５・13）

Ｃトレンチは東西に長い丘陵を縦走するトレンチである。C1トレンチは西側斜面に設定した。平成20年度調査の６トレンチに近接している。現地表面の標高は42.5～45.5ｍ程度を測る。トレンチの規模は1.5ｍ×21ｍ（一部拡幅箇所がある）、検出面の標高は42ｍ～45ｍを測る。花崗岩ばいらん土が基盤層である。東半分では傾斜がきついが、西側では緩い斜面となっている。標高44.0ｍ～43.5ｍの傾斜変換点付近でピット数基が検出され、緩斜面では浅い落込み状の SX を検出した。全体規模は不明であるが、トレンチ内で幅７ｍ程度が確認されている。埋土は淡茶褐色土である。東側では底面が５㎝程度の深さで確認される。西側では底面の検出は行っていない。SX 内からは、弥生土器甕口縁部片（第27図１）が出土した。丸みをもった広い口縁端部を持ち、刻目はない。口縁下４㎝で浅い沈線が確認できる。内外面ともナデで調整される。口縁端部が最大径となり、底部に比べて口縁部径が大きく広がるプロポーションであると思われる。板付Ⅱｂ式の特徴を有している。胎土には１～３㎜の砂粒を多く含み、色調は内面10YR7/6明黄褐色、外面10YR6/6明黄褐色を呈する。焼成は良好である。他に SX 内より焼粘土塊小片が出土している。

C2 トレンチ（第８・17図、図版６）

C1 トレンチの東７ｍ、丘陵頂部付近に設定した。現地表面の標高は48～49ｍ程度を測る。トレンチの規模は1.5ｍ×９ｍ、検出面の標高は47ｍ～48ｍを測る。花崗岩ばいらん土が基盤層である。ピットと思われる不定形の遺構や一辺１ｍ程度の隅丸方形状を呈すると考えられる土坑２基等を確認した。埋土は橙色粘質土である。C1トレンチと C2トレンチの間で、弥生土器甕胴部小片が出土している。



第17図　C1・C2・C3 トレンチ遺構平面図（S=1/100）

C3 トレンチ（第８・17図、図版６）

C2 トレンチに隣接する、丘陵頂部西のトレンチである。現地表面の標高は48.8ｍ程度を測る。トレンチの規模は1.5ｍ×９ｍ、検出面の標高は48.5ｍを測る。花崗岩ばいらん土が基盤層である。遺構・遺物は確認されていない。

C4 トレンチ（第８・18図、図版６）

C3 トレンチの東６ｍ地点、丘陵頂部中央のトレンチである。現地表面の標高は47.2～47.8ｍ程度を測る。トレンチの規模は1.5ｍ×12.5ｍ（一部拡幅部分あり）、検出面の標高は47～47.5ｍを測る。花崗岩ばいらん土が基盤層である。遺構・遺物は確認されていない。

C5 トレンチ（第８・18図、図版６）

C4 トレンチに隣接する、丘陵頂部中央のトレンチである。現地表面の標高は46.8ｍ程度を測る。トレンチの規模は1.5ｍ×８ｍ、検出面の標高は46.5ｍを測る。花崗岩ばいらん土が基盤層である。トレンチ西側でSK01を検出し、一部掘削を行った。調査区外に遺構が及ぶため、全体の形状・規模は不明であるが、径1.8ｍの円形～隅丸方形状を呈し、底面は一様ではなく東側で深くなっている。深さは浅く、東側で35㎝程度である。埋土は明黄褐色粘質土である。遺物は確認されていない。

C6 トレンチ（第８・19図、図版７）

C5 トレンチの南２ｍ地点、C5 トレンチやC7 トレンチに沿う形で設定された丘陵頂部中央から東のトレンチである。現地表面の標高は47.5～47.8ｍ程度を測る。トレンチの規模は1.5ｍ×15.5ｍ、検出面の標高は47～47.5ｍを測る。花崗岩ばいらん土が基盤層である。遺構・遺物は確認されていない。

C7 トレンチ（第８・19図、図版７）

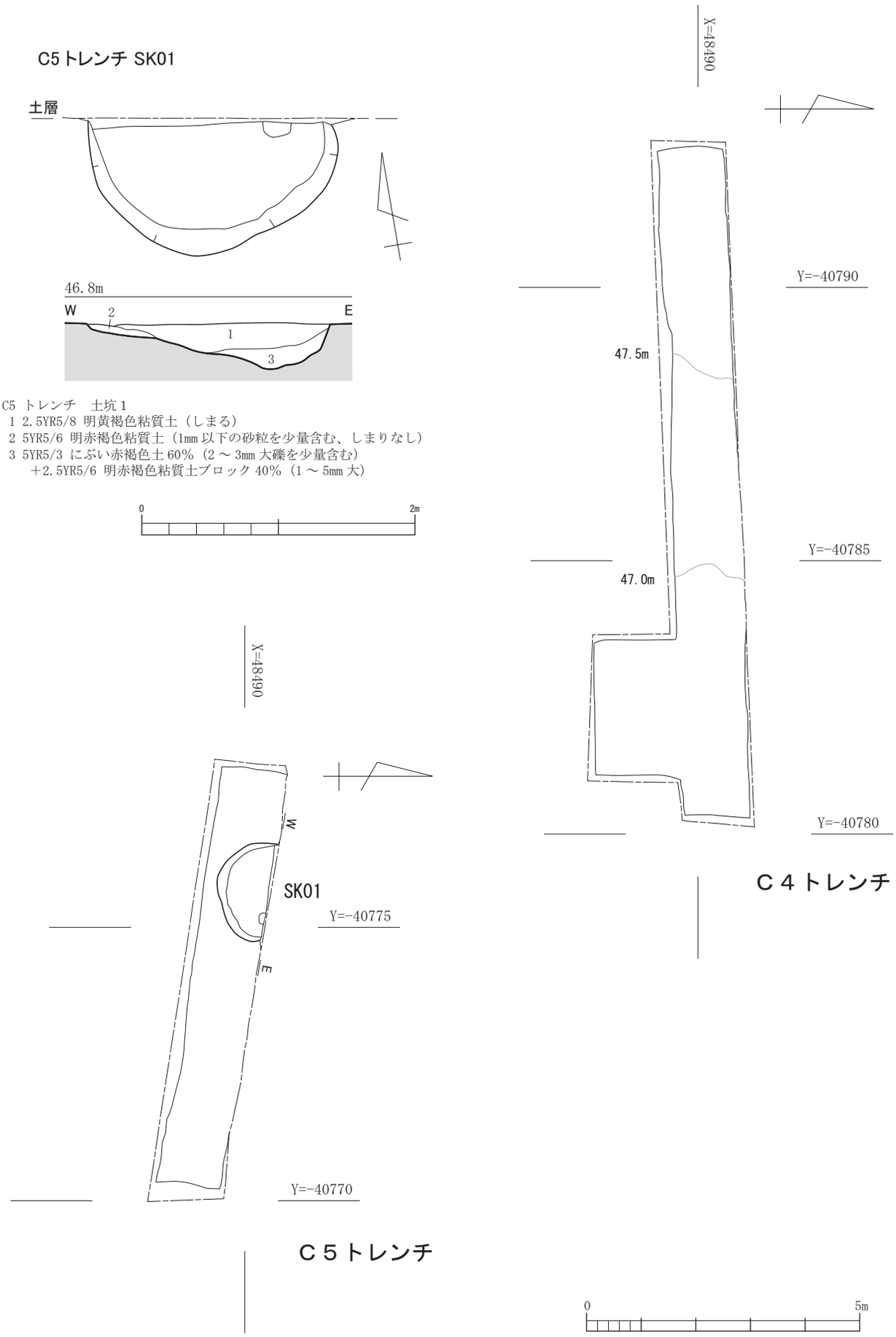
C5 トレンチに隣接する丘陵頂部東側のトレンチである。途中切り株があるので、一部途切れる箇所がある。現地表面の標高は47.2～48ｍ程度を測る。トレンチの規模は1.5ｍ×14.5ｍ、検出面の標高は47～47.5ｍを測る。花崗岩ばいらん土が基盤層である。トレンチ中央から西側で円形もしくは隅丸方形の土坑２基、西側の土坑を切る形で、長細いピットを検出している。埋土は淡褐色土である。遺物の出土はみられない。

C8 トレンチ（第８・20図、図版７）

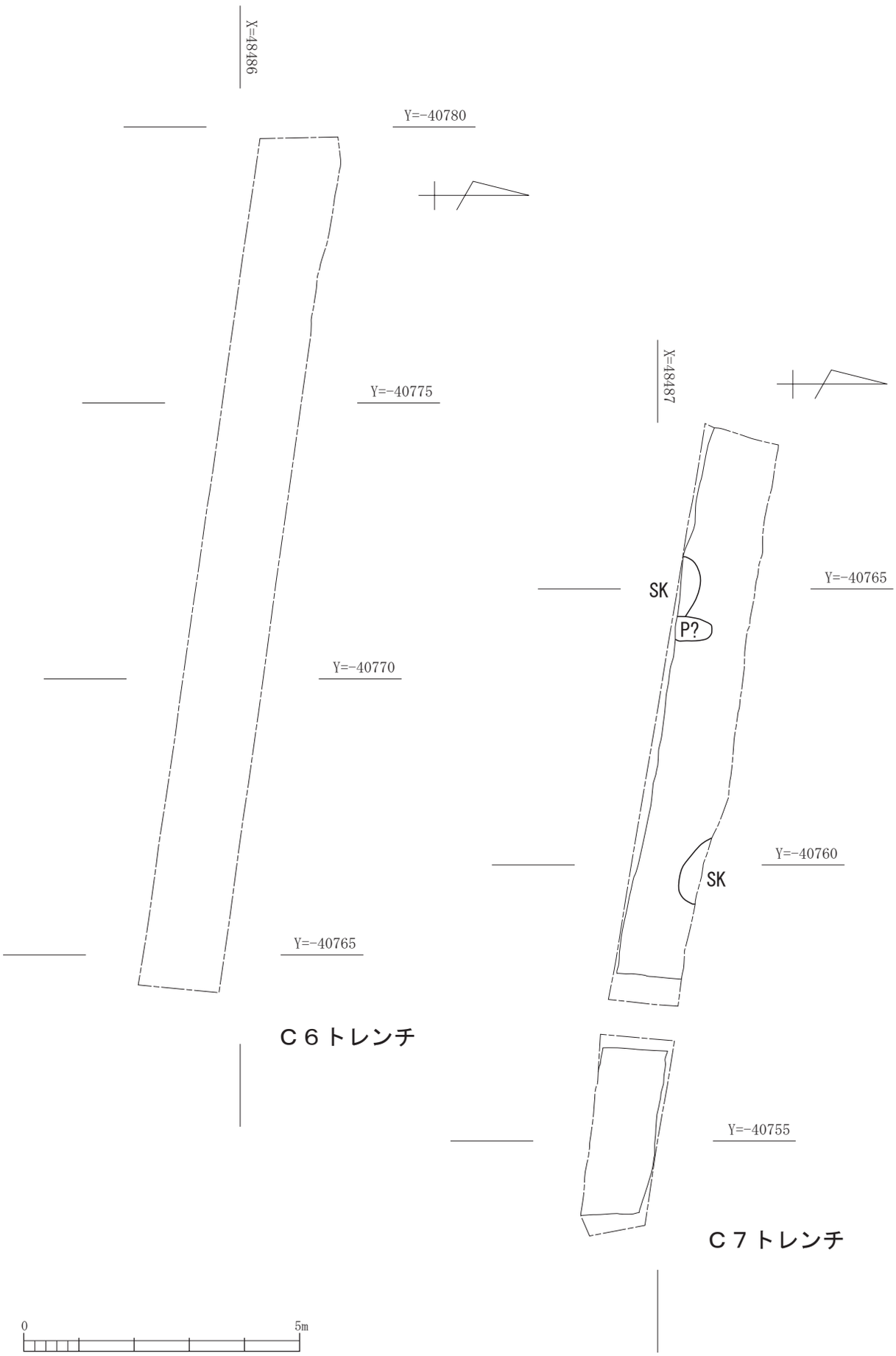
C7 トレンチに隣接する、丘陵頂部から東側斜面にかけてのトレンチである。現地表面の標高は44.5～45.8ｍ程度を測る。トレンチの規模は1.5ｍ×14.5ｍ、検出面の標高は44～45.5ｍを測る。花崗岩ばいらん土が基盤層である。トレンチ中央から西側で円形もしくは隅丸方形の土坑２基、西側の土坑を切る形で、長細いピットを検出している。埋土は淡茶褐色土である。遺物の出土はみられない。

C9 トレンチ（第８・21図、図版７）

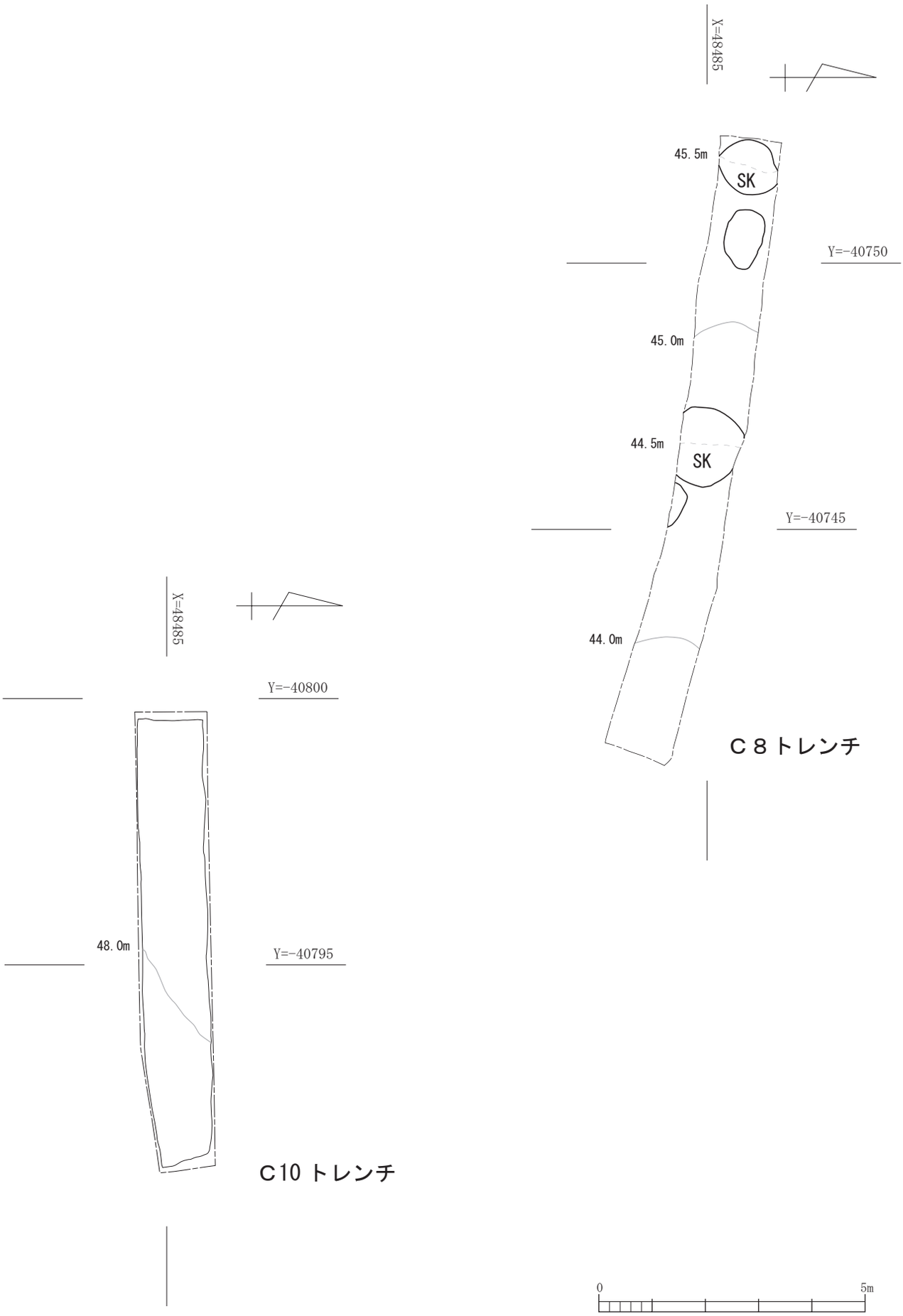
C8 トレンチに隣接する、東側斜面に設定したトレンチである。現地表面の標高は39.5～44ｍ程度を測る。トレンチの規模は1.5ｍ×20.5ｍ、検出面の標高は39～43.5ｍを測る。花崗岩ばいらん土が基盤層である。トレンチ東側で不整円形の土坑１基、南北に走る幅1.5ｍの溝状遺構、東端でピットを数基検出した。土坑および溝の埋土は淡茶褐色土、ピットの埋土は黒褐色土である。遺物の出土はみられない。



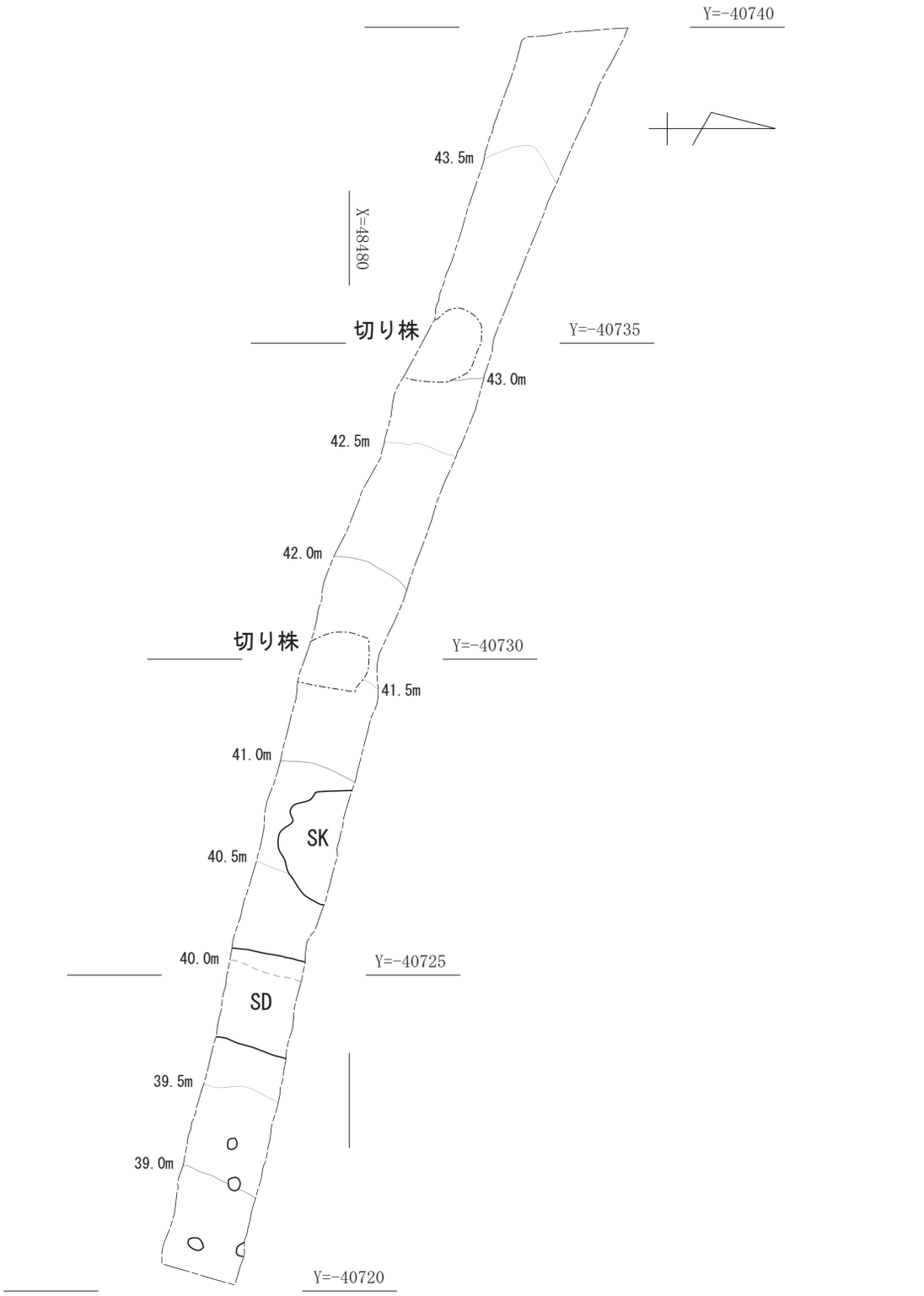
第18図　C4・ C5 トレンチ遺構平面図（S=1/100）



第19図　C6・C7 トレンチ遺構平面図（S=1/100）



第20図　C8・ C10 トレンチ遺構平面図（S=1/100）



Ｃ９トレンチ

0　5m

第21図　C9 トレンチ遺構平面図（S=1/100）

C10トレンチ（第８・20図、図版８）

C3・４トレンチに隣接する、丘陵頂部に設定したトレンチである。現地表面の標高は48.2ｍ程度を測る。トレンチの規模は1.5ｍ×8.5ｍ、検出面の標高は48ｍを測る。花崗岩ばいらん土が基盤層である。遺構・遺物の出土はみられない。

３．南側斜面部の調査

S1a トレンチ（第８・22・26図、図版８・９）

S1a トレンチは丘陵頂部から南西方向にのびる尾根線があるが、その尾根線に沿う形でトレンチを設定した。現地表面の標高は39～47.6ｍ程度を測る。トレンチの規模は1.5ｍ×42.5ｍ、検出面の標高は38.5ｍ～47.5ｍを測る。花崗岩ばいらん土が基盤層である。丘陵頂部から標高46.5ｍ付近まで緩やかに下るが、それ以下は傾斜がややきつい。

丘陵頂部付近では SC01を検出、一部掘削を行った（第26図）。北西部分では長円形のピットに切られる。遺構は一部のみの検出であり、短軸2.4ｍ程、深さ20㎝程である。埋土は上層に橙色粘質シルト、下層に明赤褐色粘質土がみられる。全体形状・規模は不明ながら、平面小判形の弥生時代住居となる可能性を考えておきたい。標高46ｍ付近の傾斜変換点付近にはピットがやや密集してみられる。径50㎝、深さ10㎝程度のものなど浅いものが多い。その上下には一辺１ｍ程度の隅丸方形状の遺構が散在する。小形の土坑、もしくはピットの可能性が考えられる。標高40.5ｍ付近で検出された SD01は深さ30㎝程の浅い溝である。埋土はにぶい黄褐色粘質土である。南西端でも、埋土が淡灰褐色の不明遺構が確認できる。

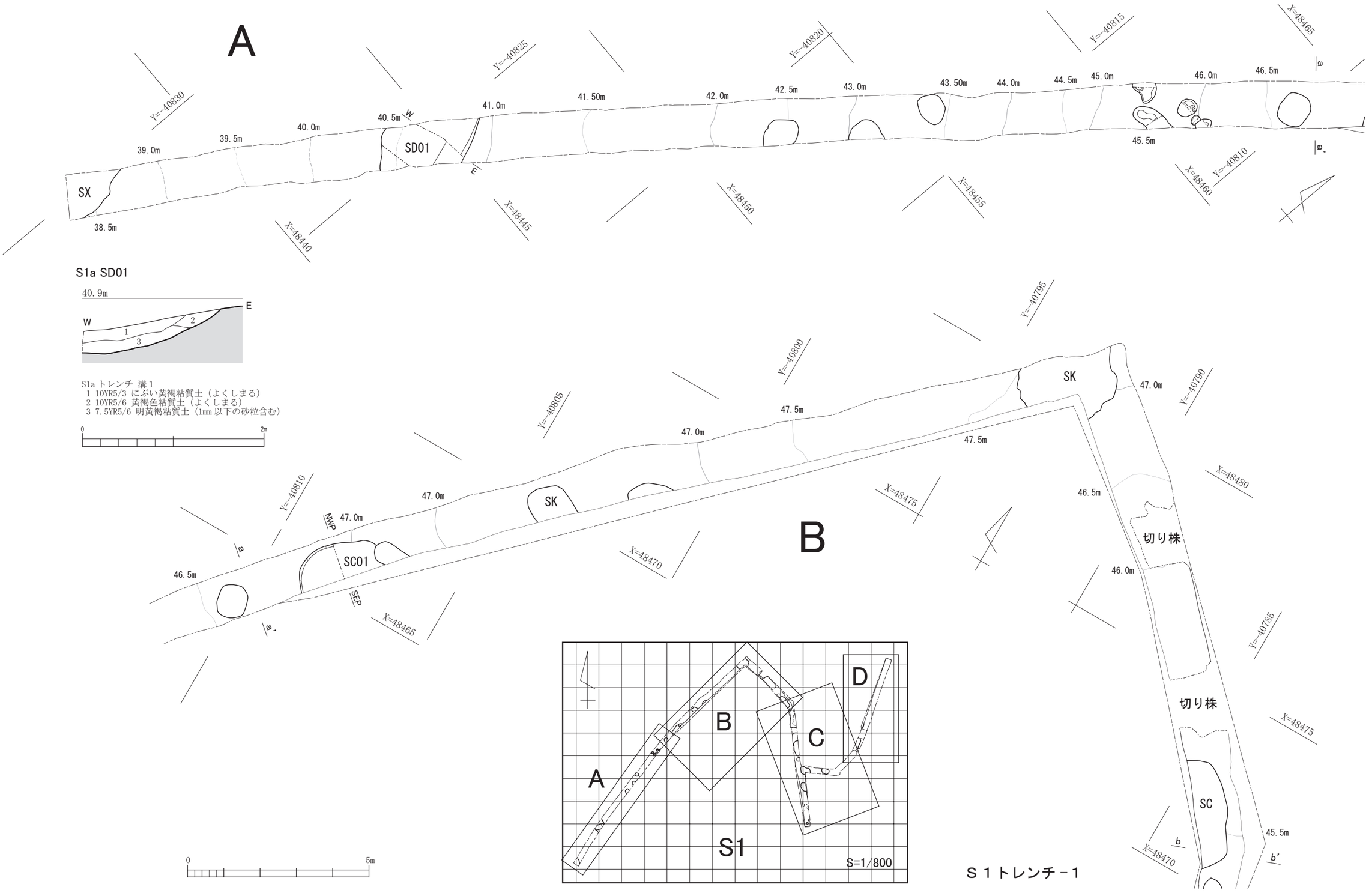
S1b トレンチ（第８・22・23図、図版９・10）

S1b トレンチは丘陵頂部で S1a トレンチと接続し、南側の斜面に設定したトレンチである。現地表面の標高は37.6～47.6ｍ程度を測る。トレンチの規模は1.5ｍ×40.8ｍ、検出面の標高は37.5ｍ～47ｍを測る。花崗岩ばいらん土が基盤層である。丘陵頂部から標高44.5ｍ付近まで緩やかに下るが、その後、傾斜が強くなり、標高42～40.5ｍまで緩やかな面があり、それ以下で再度傾斜がきつくなる。

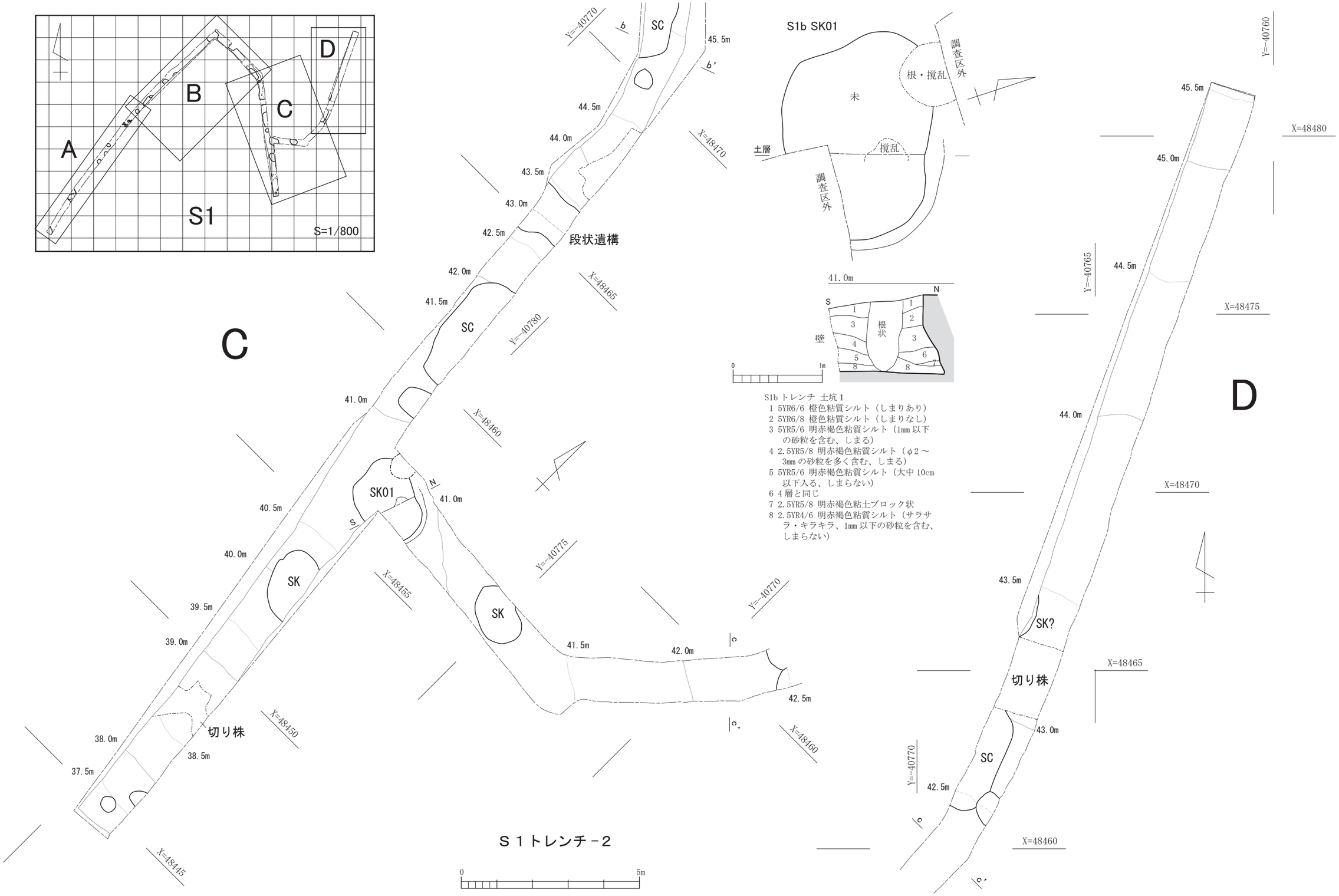
丘陵頂部付近では短軸３ｍ程の平面小判形を呈すると考えられる住居跡が検出された。埋土は赤褐色粘質土である。傾斜がきつくなる部分では傾斜を一部カットするような小規模な段状遺構がみられ、その南面には短軸3.5ｍほどの平面隅丸方形～小判形を呈すると思われる弥生時代住居がみられる。住居周辺には中小の土坑がみられた。そのうちの SK01は一部掘削を行った（第23図）。地山系土の連続した堆積で断面フラスコ状の掘りこみとなっている。出土遺物はみられなかった。土坑形状から弥生貯蔵穴の可能性が考えられる。南端の谷部付近では、淡褐色土の埋土で、径40～50㎝のピットがみられた。

S1c トレンチ（第８・23図、図版10）

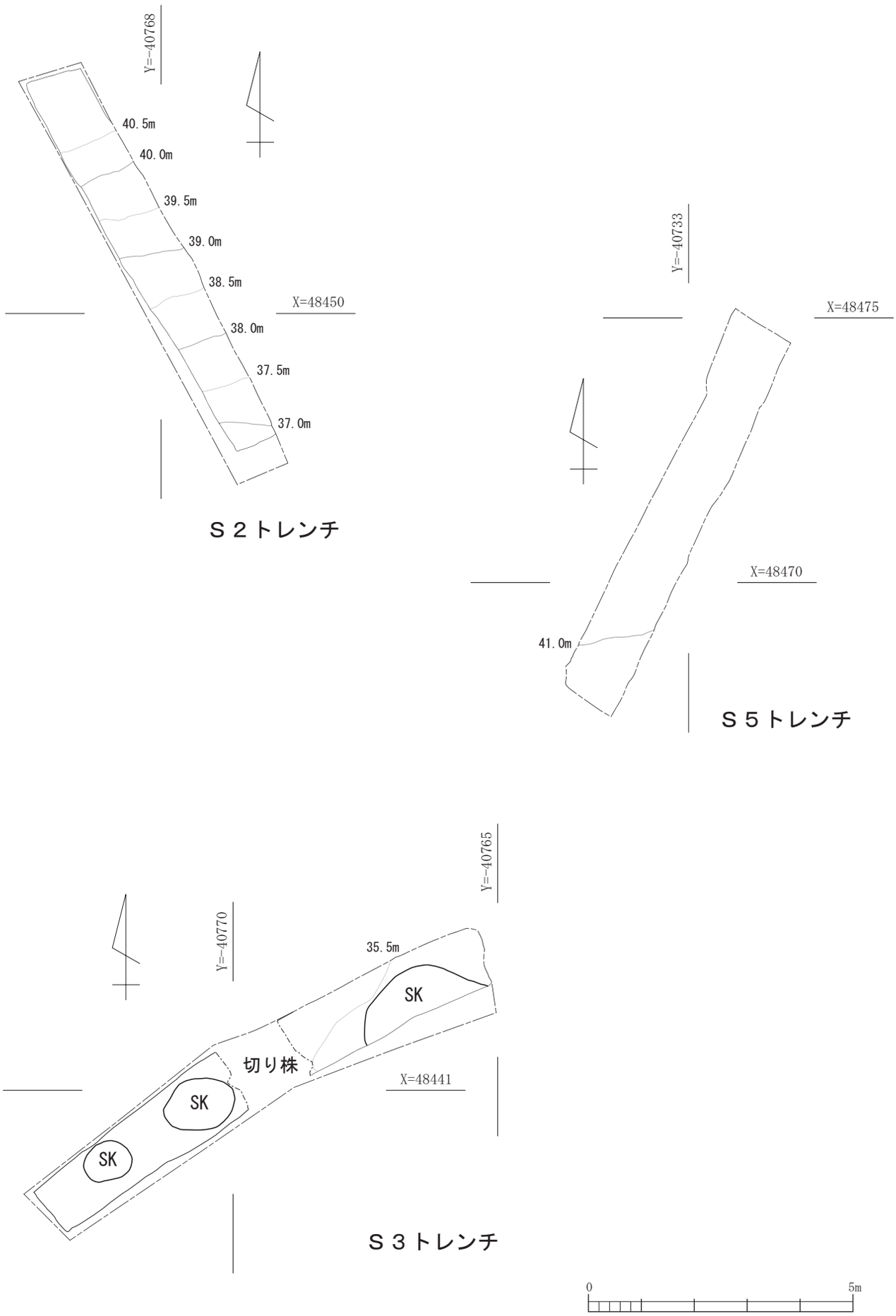
丘陵頂部の C7 トレンチ付近から南側の緩斜面に向けて設定したトレンチで、傾斜が緩い部分の状況を確認するべく、その部分で西に屈曲させたトレンチである。トレンチ内はいずれも傾斜面にあたる。現地表面の標高は42.2～45.8ｍ程度を測る。トレンチの規模は1.5ｍ×30.5ｍ、検出面の標高は41ｍ～45.5ｍを測る。花崗岩ばいらん土が基盤層である。トレンチの屈曲部付近、標高41ｍ～43ｍ付近で遺構が検出された。短軸３ｍ～3.5ｍの平面隅丸方形、もしくは小判形の弥生時代住居、長軸1.7ｍ×短軸1.1ｍの楕円形状をした土坑等である。埋土は、橙色粘質土である。住居を切る土坑もしくはピットの埋土は黒褐色土である。遺物の出土はみられない。



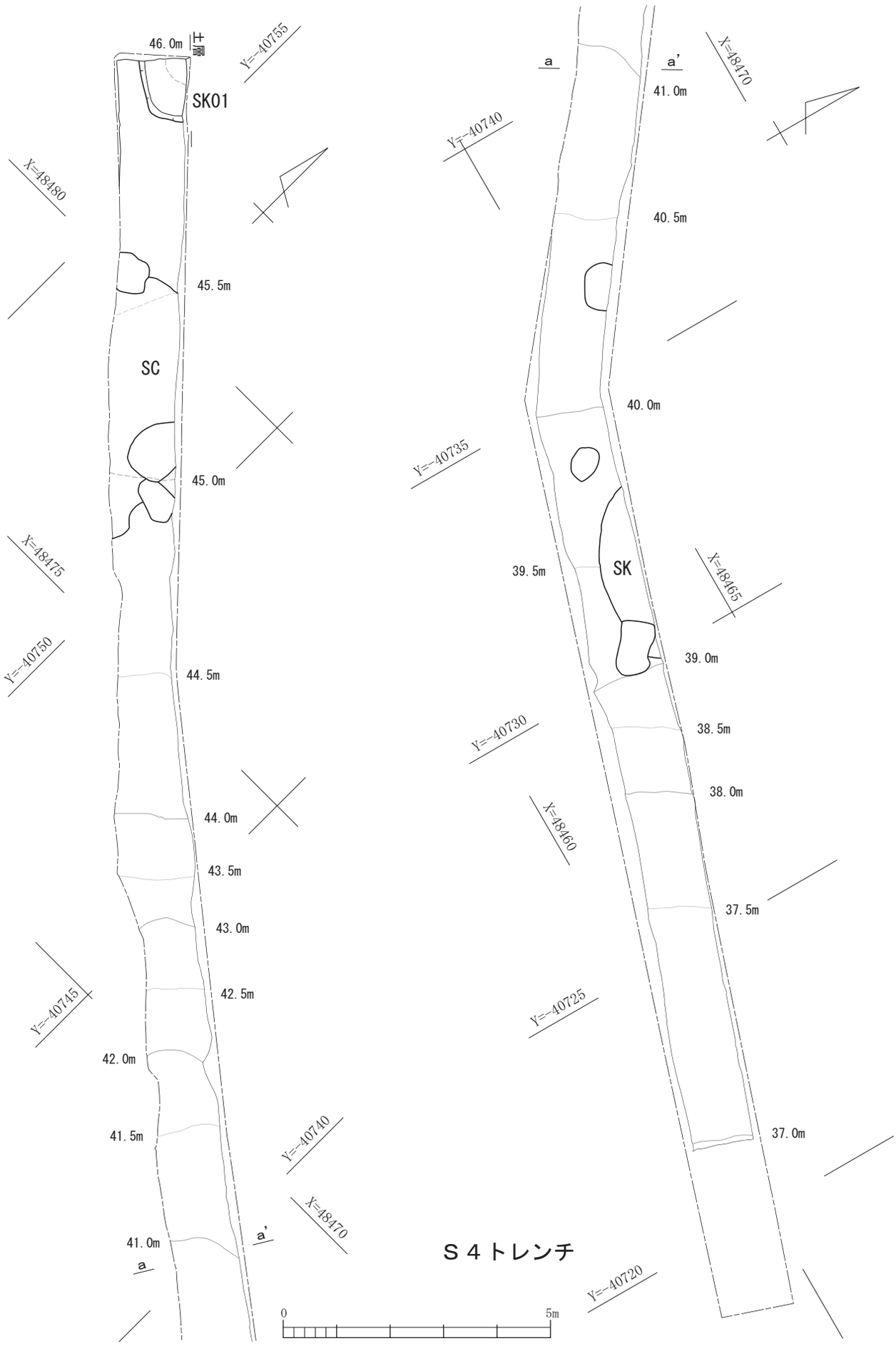
第22図　S1 トレンチ遺構平面図①（S=1/100）



第23図　S1 トレンチ遺構平面図②（S=1/100）



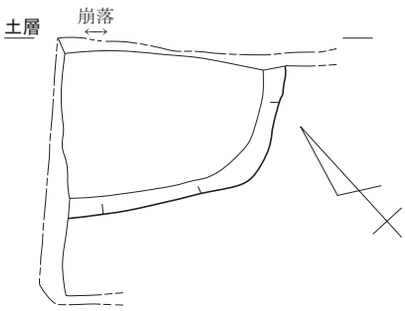
第24図　S2・S3・S5 トレンチ遺構平面図（S=1/100）



Ｓ４トレンチ

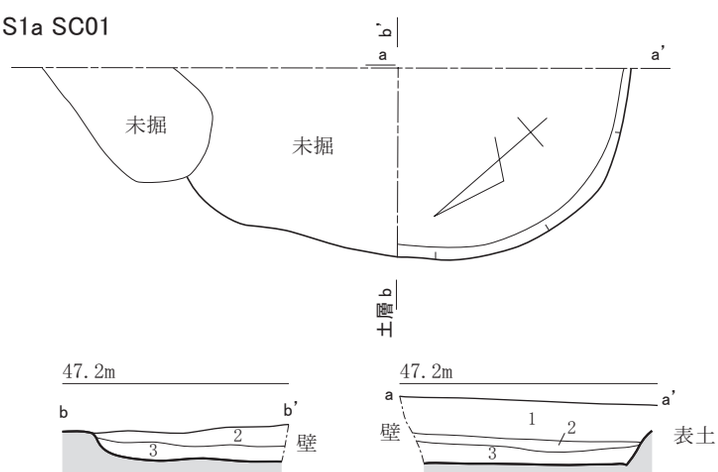
第25図　S4 トレンチ遺構平面図（S=1/100）

S4 SK01



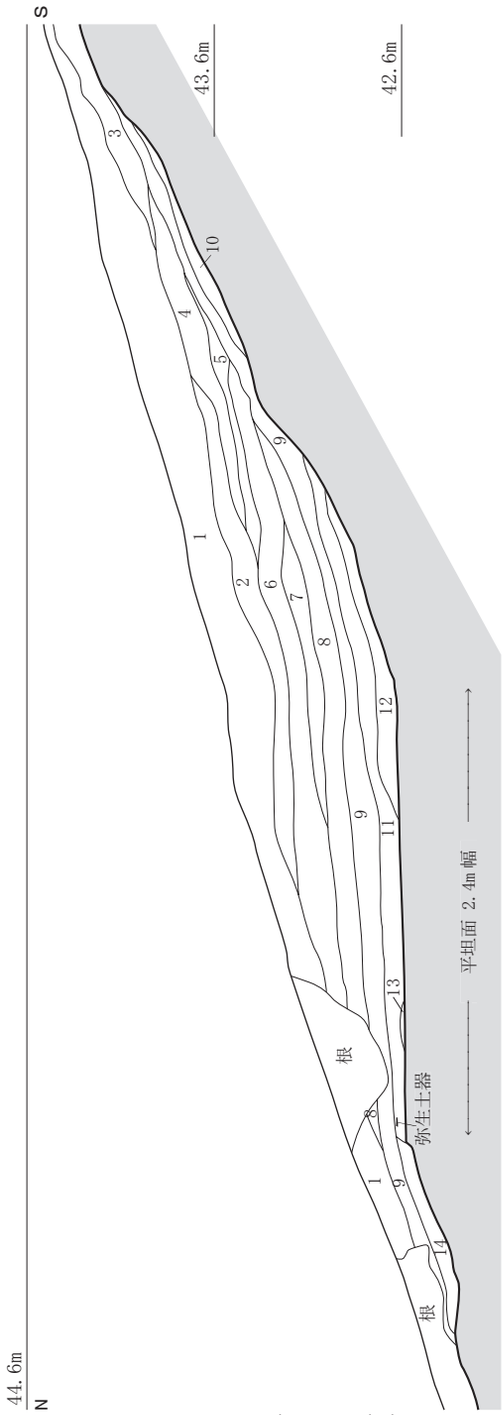
C4 トレンチ　土坑１
1 5YR5/8 明赤褐色粘質土（目が粗く固くしまりが強い、雲母を多く含む）
2 4YR5/8 明赤褐色粘質土（目が粗く固くしまっている［1 層よりも弱い］、雲母を多量に含む）
3 5YR5/6 明赤褐色粘質土(ややゆるい、雲母・石英を含む、下層に３～4cm の礫を含む)
4 5YR5/8 明赤褐色粘質土（固くしまる、雲母を含む）
5 5YR5/8 明赤褐色粘質土（固くしまる、雲母を含む、４層より赤が強い、粘質弱い）
6 7.5YR5/6 明褐色土（ボソボソしている、粘質ほぼ無）
7 7.5YR5/6 明褐色土粘質土（ややしまっている、６層よりも暗い）
8 5YR5/6 明赤褐色粘質土（ややボソボソしているがしまっている、粘質強い）
9 5YR4/8 赤褐色粘質土（固くしまっている、粘質弱い）
10 5YR5/8 明赤褐色粘質土（固くしまっている、８層よりも明るい、粘質弱い）
11 7.5YR5/8 明褐色土（目が粗く固くしまっている、８層のブロック土と同じブロック土が混じる、粘質ほぼ無）
12 5YR5/8 明赤褐色粘質土（しまっている、粘質弱い）
13 5YR6/8 橙色粘質土（しまっている）
※全体的に雲母を多く含むが、１～５層は特に多い

S1a SC01



S1a トレンチ SC01
1 7.5YR5/6 明褐色粘質シルト（根多く含む）
2 7.5YR6/6 橙色粘質シルト（ややしまる）
3 5YR5/8 明赤褐粘質土（しまる）

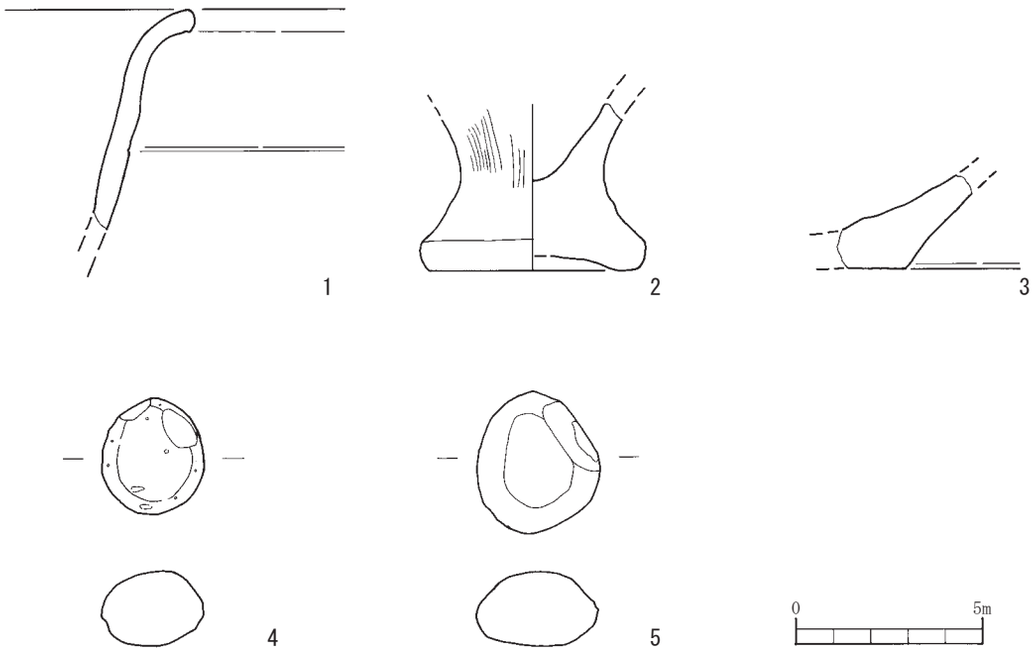
N4 段状遺構



N4 トレンチ　段状遺構１
1 表土層
2 旧表土
3 旧表土
4 7.5YR6/4 にぶい橙色粘質シルト
5 7.5YR4/1 褐灰色シルト
6 7.5YR6/3 にぶい褐色粘質シルト
7 7.5YR4/1 褐灰色シルト
8 7.5YR6/1 にぶい橙色粘質シルト
9 10YR6/4 にぶい黄褐色粘質シルト
10 7.5YR6/3 にぶい褐色粘質土
11 10YR4/1 褐灰色粘質シルト
12 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト
13 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト
14 10YR6/4 にぶい黄橙色粘質シルト

0　2m

第26図　S1a トレンチ SC01、 S4 トレンチ SK01、 N4 トレンチ段状遺構平断面図（S=1/40）



第27図　22年度確認調査出土遺物実測図（S=1/2）

S2 トレンチ（第８・24図、図版11）

S2 トレンチは S1c トレンチが面した急斜面に設定したトレンチである。現地表面の標高は37.2～41ｍ程度を測る。トレンチの規模は1.5ｍ×8.5ｍ、検出面の標高は37ｍ～40.5ｍを測る。花崗岩ばいらん土が基盤層である。遺構・遺物の出土はみられないが、周辺で須恵器の甕体部片が出土している。

S3 トレンチ（第８・24図、図版11）

S2a トレンチが下った部分の平坦面上に設定した。現地表面の標高は35.5ｍ程度を測る。トレンチの規模は1.5ｍ×10ｍ、検出面の標高は35.7ｍを測る。花崗岩ばいらん土が基盤層である。大小の土坑を検出した。埋土は橙色粘質土である。遺物の出土はみられない。

S4 トレンチ（第８・25・26図、図版11・12）

S4 トレンチは丘陵頂部東から南東方向に設定したトレンチである。現地表面の標高は38ｍ～46.2ｍ程度を測る。トレンチの規模は1.5ｍ×31ｍ、検出面の標高は37ｍ～46ｍを測る。検出した範囲内は花崗岩ばいらん土が基盤層である。トレンチ東端は谷部に近く急激な地形の落ちが確認されたが、旧地形まで到達できなかった。図面では、機械掘削後に人力で精査した部分のみを示している。

丘陵頂部付近、斜面中腹にまとまって遺構が検出された。頂部付近では SK01を一部掘り下げた（第26図）。SK01の全体形状・規模は不明であるが、南隅が角を持つもので、方形を呈するものと思われる。層厚が10～20㎝でまとまっており、明褐色土と赤褐色土が互層状になる部分もある。形状から貯蔵穴になるかと思われる。遺物の出土はみられない。周辺では、住居と思われる遺構が検出されている。小規模な土坑に切られているが、直径６ｍ程度の弥生時代円形住居の可能性が考えられる。

斜面中腹では、検出幅３ｍほどの円形を呈するかと思われる土坑が検出されている。一部を小規模な土坑もしくはピットに切られている。

S5 トレンチ（第８・24図、図版12）

C9 トレンチと S4 トレンチのあいだ、斜面中腹に、等高線と平行して設定したトレンチである。

現地表面の標高は38m～46.2m程度を測る。トレンチの規模は1.5m×40.8m、検出面の標高は37m～46mを測る。花崗岩ばいらん土が基盤層である。遺構・遺物の出土はみられない。

Ⅲ．小結

以上の内容から、丘陵頂部や急斜面上では遺構が確認されないトレンチが数か所みられるものの、丘陵全域にわたって遺構が存在することが明らかとなった。遺構分布は丘陵頂部付近には少ない。平面的には南側を中心に住居群がみられ、立面的にも、標高45m前後の頂部際から斜面、標高41m前後の斜面中腹、標高37m前後の斜面中腹と大きく3群に分けることのできる、地形に応じた土地利用が窺える。一方では、地形を一部改変して段造成を行っている部分がある。

出土遺物からは、弥生時代前期後半から中期初頭を中心とした集落跡と考えられる。

調査中には小郡市文化財保護審議会記念物部会が開催され、現地視察において指摘を受けた、以下の点について精査した。

〈斜面緩急の土地造成の可能性について〉

土地造成について、痕跡として確認できたのは数か所の段状遺構である。北側のトレンチ2箇所では、部分的な造成ではあるが、標高44m以下で切土を行い、平坦面を造成している。一部掘削を行ったN4トレンチでは44m付近から切土を行い、平坦面を2.5m以上造りだしている。平坦面の標高は42.6mである。そのほか、S1bトレンチでも2m幅の小規模な段造成を行っている。周辺には住居群が分布し、住居背後の斜面を一部切土して、空間を作り出した可能性がある。丘陵南部斜面では特に緩急がみられるが、その緩急を巧みに利用した土地利用（遺構配置）が考えられる。

〈丘陵頂部の空間利用について（集落広場の可能性）〉

住居かと考えられる遺構は、丘陵の南側を中心（一部北東側）に分布している。標高45m前後の丘陵頂部と斜面の境付近に多く、未発掘部分が多いが、丘陵頂部に遺構が少ないこと等も勘案すると、環状の住居群配置で、頂部付近には広場的な空間が存在した可能性が考えられる。

〈傾斜転換点におけるピット群の柵列の可能性について〉

S1aトレンチの該当ピットを半裁した。しっかりとした深さのある柱穴ではなかったが、他のトレンチでも標高44m前後でピットが確認されている。今回の試掘調査のみでは判断できなかった。

〈遺跡の時間幅の確認〉

限られた遺構掘削のなか、明確な遺物を確認できなかったが、時期が判断できる土器資料から、遺跡の時期幅は弥生時代前期後半～中期初頭と考えられる。須恵器甕小片も一点のみであるが表採した。

遺構形状から考えると、住居平面形はN1トレンチが小判形、その他が、隅丸（長）方形の小形住居や円形住居かと判断され、弥生時代前期～中期前半にかけてのものの可能性があろうか。

〈裾部に広がる大きな遺構の性格〉

N4トレンチでは、斜面を人為的にカットし、平坦面を2.5m以上造りだしている。埋土下層からは、弥生土器片、自然礫利用の投弾が出土している。北部トレンチにはその他にも同様の遺構があり、それについても段状遺構の可能性を指摘できる。いずれも、標高44m以下からの掘削が考えられる。同様の高さからの掘削が考えられるが、北部斜面に連続するものではない。

S1aトレンチの裾部については、浅いくぼみであり、明確な遺構ではなかった。

第５章　三沢遺跡の評価

Ⅰ．三沢遺跡のこれまでの評価

三沢遺跡の指定要件は以下のとおりである。

「当該遺跡は、未だ全貌を解明するまでに発掘調査されていないが、その一部調査において、無土器時代～古墳時代に及ぶ遺跡地であることが確認され、その主要遺構（弥生時代中期初頭農耕集落遺跡）は、弥生時代集落構造・初期農耕村落の生活様式を具体的に解明する貴重遺構である。」

三沢遺跡の主題は、弥生時代中期初頭の農耕集落遺跡であり、その集落構造を明らかにできる点である（第28図）。報告書では、以下のようにまとめられている（西谷1971）。

第28図　三沢遺跡の集落構造（西谷1996を改変）

主脈をなす最大の丘をＡ丘、そこから北と東へ派生する丘をそれぞれＢ丘、Ｃ丘とする。そしてさらに、Ｃ丘から東へ派生する最小の丘をＤ丘として説明したい。

まず、Ａ丘には、竪穴式住居と袋状竪穴式食糧貯蔵穴と防禦用溝がある。「竪穴式住居」は、おそらく「一家族」の住まいの場であろう。（中略）Ａ丘には、こうした住居と貯蔵穴を一セットとした「家族」が、十数個以上ある。個々の「竪穴式住居」には、食糧の貯蔵穴が付属するので、一つの「竪穴式住居」が消費の単位であることが推測される（*都出氏の小経営単位論*）。これらの「竪穴式住居」が同一の丘に占地しているという点で、一つのまとまりとして「単位集団」を形成し、それが水田経営とか狩猟、漁労などにおける再生産の単位（*共同体*）となったことであろう。

さらに、Ａ丘の中央部には、大型の竪穴式住居があり、中央部という位置や大形であるという規模において異なり、「単位集団」（*間（集合体の）*）共通の住居、いわば、集会所ではなかったろうか。とすると、この住居の東に隣接したところでは、遺構や遺物のみられない空間があり、集会所に対応した広場と考えられる。Ａ丘の先端付近には、幅数メートルの溝が走っており、防禦的な性格を考える。Ｂ丘と、Ｃ丘西半の北西斜面には、Ａ丘でみたような、竪穴式住居と貯蔵穴の組み合ったものが十数個はあり、ここにも、「単位集団」がそれぞれ存在した。面積が最小のＤ丘では、住居と貯蔵穴の一セットを全掘したが、ここにも数個の「家族」からなる「単位集団」があったろう。

こうして、種畜場遺跡には、少なくとも四つの「単位集団」があり、もともと一つの丘陵に立地し、相互に近接しているという地理的条件からみて、それらがまた、より大きなまとまりである「単位集団の結合体（*集合体*）」を形成し、一つの共同組織をなしたことが想定される。つまり、「単位集団」の枠をこえた農業祭祀（*共同体祭祀*）、生産用具や農耕地の共同開発などの種々の条件を紐帯として結合されたことが予測される（*共同体*）。とすると、Ａ丘の集会所と広場もまた、Ａ丘だけにとどまらず、「単位集団の結合体（*集合体*）」全体のものと解される。四つの山丘の間に介在する谷間や、そ

れらがさらに北へ出ると、より大きな一つの東西方向の谷間に出て、そこに経済的基盤である水田地区が、そして、周辺の山並みには豊かな狩猟地区が推定される。さらに、南の谷間を隔てて、甕棺を主とする墳墓地区が考えられる。

（中略）日本を代表する弥生時代集落遺跡として有名な福岡市比恵遺跡や宝台遺跡が消失したこんにちそれらより古い種畜場遺跡の稀少性もまた一層高まるのである。弥生時代中期初頭という時期は、弥生時代前期末における外的条件を契機として達成された技術革新や生活様式の変革をふまえて、「単位集団の結合体（*集合体*）」がいくつか集まって、一つの「国家」の形成へと大きく時代が揺動するときである。

＊（　）内は筆者加筆。

以上は、予備調査から得られた一つの仮説である。調査担当者である西谷正氏が述懐しているように、当時示された近藤義郎氏の単位集団論が大きく影響している内容となっている（「平成23年７月４日、小郡市での講演内容」）。

これに、今回調査の独立丘陵（Ｅ丘）が加わり、少なくとも５つの独立丘陵上の集団が弥生時代中期初頭の同時期に関連性をもって存在したことになる。なお、三沢遺跡の予備調査で出土した土器を確認する機会を頂いたが、城ノ越式段階の土器が多数を占めるが、板付Ⅱｂ式新段階やⅡｃ式の土器も確認できる。今回の調査においても板付Ⅱｂ式～城ノ越式（一部須玖式）の土器の出土が確認される。遺跡の時期幅が広がることによって、同時併存遺構が少なくなると思われる。また、周辺の調査事例から等高線に直交するかたちの溝は、道状遺構の可能性が考えるし、Ａ丘中央の径７ｍ程の住居は、現在では大形の類に入らないといった知見が加わる。さらには、南の甕棺出土地点は、三沢蓬ヶ浦遺跡として、調査が行われたが、少数の甕棺墓であり、三沢遺跡の墓域は別の箇所を想定するべきである（宮小路・片岡1984）。

Ⅱ．単位集団論

近藤義郎氏は、数棟の住居と１～２棟の掘立柱建物、および屋外炉跡の共同炊飯施設からなるまとまりを抽出して経営・消費の基本的単位となる「単位集団」と定義した（近藤1959）。これが、弥生社会集団の基礎的な構成単位「単位集団」となり、これらが水稲農耕における協業を軸として複数結合し、あるときは大集落を形成するとして、これを「集合体」と呼び、生産単位集団と位置付けた。さらに、マルクス主義社会論的な立場から、「単位集団」は経営・消費の単位で、「大家族的な親族集団＝世帯共同体」と考えた。一方、「共同体」は単位集団同士が土地開発と治水事業を通して地域的統一集団を形成したもので、「農業共同体」と位置付ける。これらは遅くとも弥生時代中期までには出現する見解を示した。そして、弥生時代中期を通じて用水権や土地開発権などをめぐっての争いを通じて農業共同体間相互の系列化が進行し、弥生後期には個々の地域的統一集団にとっての直接的な外延の条件が失われて系列化における矛盾が顕在化し、古墳時代に至って支配―被支配関係へと変質すると理解した（近藤1962）。近藤氏が、「単位集団」を構成する竪穴住居個々の独立性に否定的で、数棟の住居が集まって初めて、単位として自立すると考えたが、都出比呂志氏は個々の竪穴住居それぞれが、一つの生活・消費単位として独立していたと理解する（都出1970・1989）。これらの住居数棟のまとまりを、都出氏は、たがいに近親関係にある複数の世帯からなる「世帯共同体」とする。弥生時代当初はこれらが分村を軸とした血縁関係により相互に結びついていたが、次第に水利や鉄器入手などを通じて再編成され、土地と水利を基軸とする地縁的編成としての「農業共同体」が形成されたと考える。さらに、弥生時代においては、まとまりのなかに一つの住居がしばしば特別に大きい例がみられる。これについては、共同作業所も兼ねたリーダー（長老あるいは「家長」）の居所である

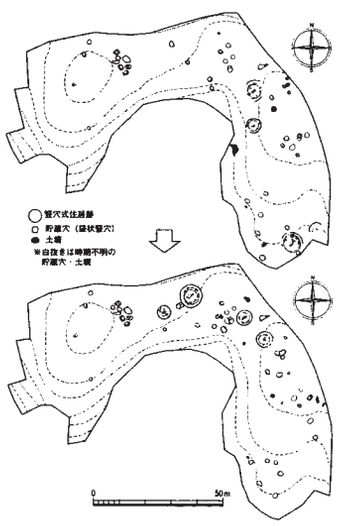
可能性を指摘している。

近藤氏の単位集団論は、農業共同体間の系列化が進行する以前の個々の共同体と、系列化が進行しての共同体群全体が、同じ「農業共同体」という用語で示されおり、問題を内包していた。高倉洋彰氏はこの問題点を整理し、平野単位での統合を「地域的統一集団」、その内部における集落群を地域集団として、近藤氏の「共同体」概念を深化させた（高倉1973）。弥生時代前期には単独の血縁集団で集落が構成されていたが、水稲農耕における協業などを通じて、これらが地縁的に結合して地域集団を形成し、さらに水利権の調整をめぐって近隣の地域集団同士が結合して地域的統一集団が形成されたとする（高倉1975）。このような、単位（家族）集団―共同体（地域集団）―地域統一集団という階層的な集団関係の把握はこれまでの弥生社会構造理解の主流となっている（下條1986、寺沢2000）。

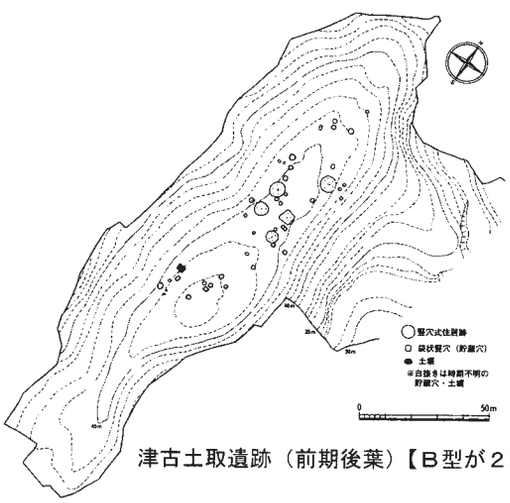
Ⅲ．三沢遺跡と周辺の遺跡

三沢遺跡の予備調査で示された集団論は、単位集団論に導かれたものであるが、その単位集団論自体の限界性も読み取ることができる。

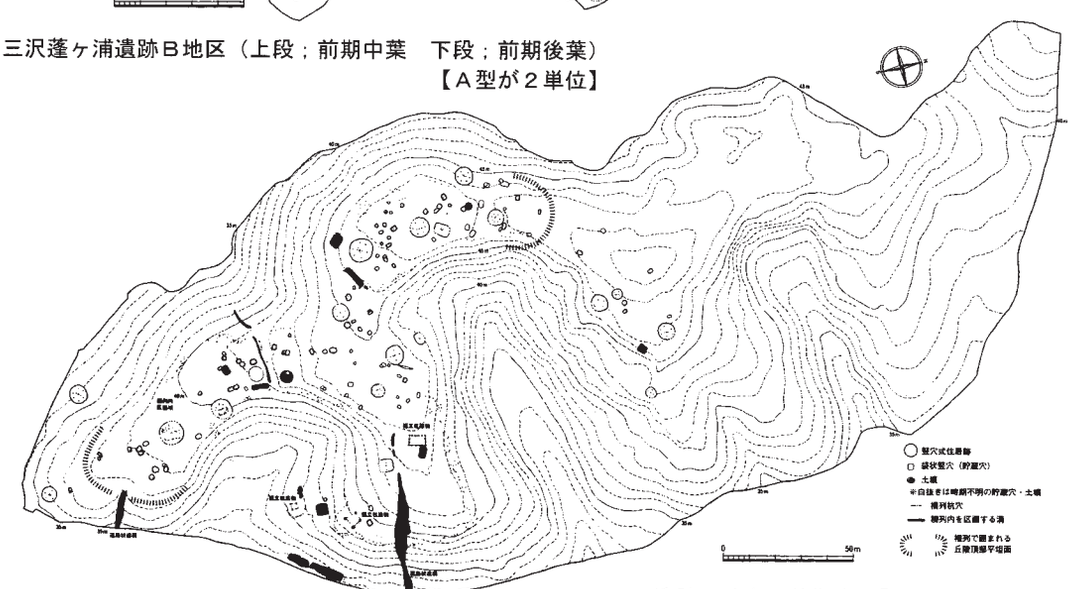
三沢遺跡は単位集団論で用いられた岡山県沼遺跡と同様の丘陵立地で、周辺の谷地には谷水田が想定されている。それぞれの独立丘陵上に立地する「単位集団」は、それぞれが経営単位となり、また



三沢蓬ヶ浦遺跡Ｂ地区（上段；前期中葉　下段；前期後葉）
【Ａ型が２単位】

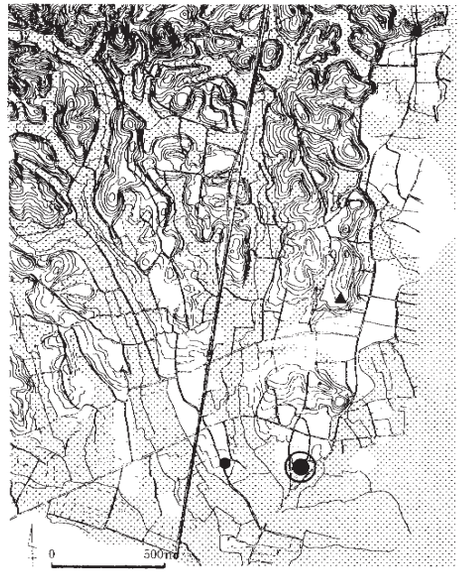


津古土取遺跡（前期後葉）【Ｂ型が２時期】

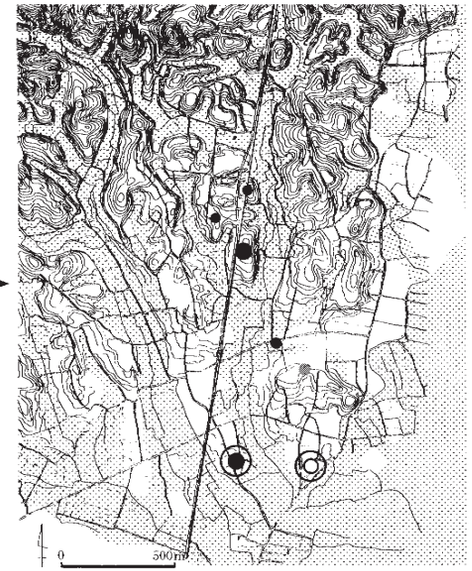


一ノ口遺跡Ⅰ地点（前期末）【Ｃ型＋Ｂ型】

第29図　弥生時代前期集落遺跡の類型（田﨑2008より作成）

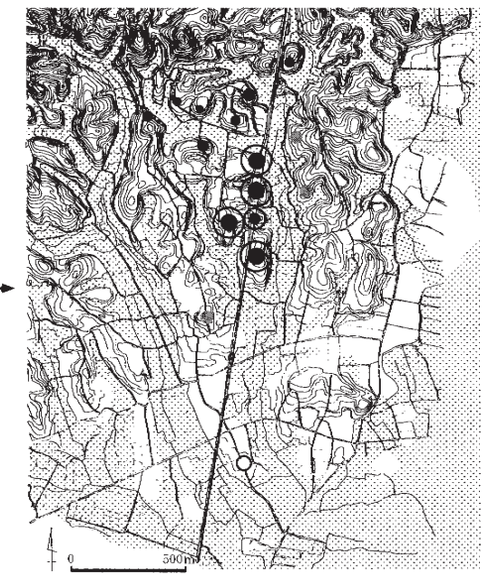


〈様相Ⅱ（板付Ⅰ式併行期）〉
＊南部域段丘最南端で集落出現
＊弥生系集落の段丘上進出開始
＊力武遺跡群環濠掘削
＊三国の鼻遺跡、横隈上内畑遺跡で武器出土墓出現



〈様相Ⅲ（板付Ⅱａ式期古相）〉
＊集落移動〈南部域～中央部域へ（２段階）〉
＊三沢南崎遺跡環濠掘削（先）
＊横隈山遺跡７環濠掘削（後）

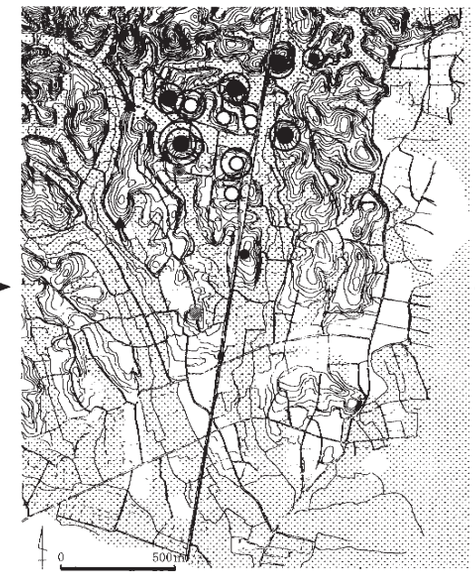
〈様相Ⅳ（板付Ⅱａ式期新相）〉
＊中央部域集落盛行期①　北部域への小規模移動①
＊横隈山遺跡５環濠掘削
＊三沢南崎遺跡環濠埋没



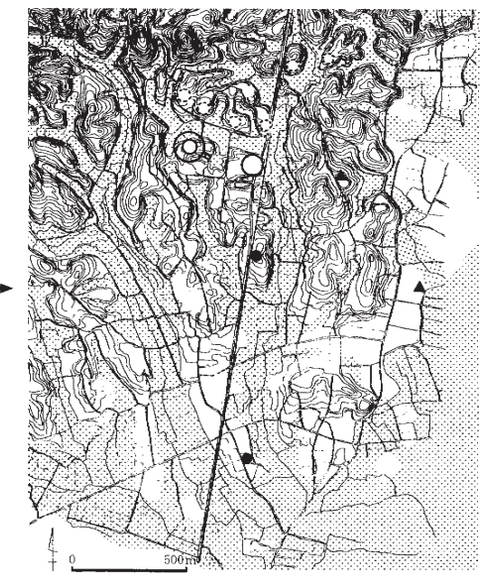
〈様相Ⅴ（板付Ⅱｂ式期古相）〉
＊中央部域集落盛行期②　北部域への小規模移動②
＊三沢北中尾遺跡１環濠掘削

〈様相Ⅵ（板付Ⅱｂ式期新相）〉
＊中央部域集落衰退期→北部域集落の盛行へ
＊横隈山遺跡５環濠埋没（先）
＊横隈山遺跡７環濠埋没（後）

〈様相Ⅶ（板付Ⅱｃ式期）〉
＊北部域集落盛行期①
＊北中尾遺跡１環濠埋没
＊ハサコの宮遺跡、北牟田遺跡で犠牲者の墓ほか



〈様相Ⅷ（城ノ越式期）〉
＊北部域集落盛行期②
＊北中尾遺跡２、ハサコの宮遺跡、北牟田遺跡で犠牲者の墓ほか



〈様相Ⅸ（須玖Ⅰ式期）〉
＊集落拡散・衰退期
＊横隈狐塚遺跡７、横隈上内畑遺跡で犠牲者の墓ほか

［凡例］　•（着床）　●（定着）　◉（盛行）　◎（やや盛行）　○（衰退）　◌（廃絶）　◍ 詳細時期不明　△ 犠牲者の墓ほか

第30図　三国丘陵南東部域弥生時代「集落群」変遷（山崎2010）

同時に生産単位である自己完結的な集落となり、近隣の小規模な谷水田を営む姿が想定されるわけである。「単位集団の結合体」（集合体）としての三沢遺跡の評価は、平野部における広大な沖積地を眼前に控えた（当時単位集団論で想定された）比恵遺跡のあり方とも一致するわけで、その生産様式の理解や紐帯に別の説明が必要となろう。近年、単位集団論の基礎となった比恵遺跡の環溝集落は、再発掘により「環溝住居址群」の同時併存が否定されたこともあり（武末1990）、新たな枠組みの必要性も生じている。

さて、三国丘陵の弥生時代前期集落を検討した田崎博之氏は、一時期の住居群の有り様から以下のように３類型化した（第29図）。Ａ類型は１棟あるいは大小２棟の単位、Ｂ型は相対的に大形の住居跡を含む３棟までの単位で構成され、ともに、住居跡が分布する範囲は径50ｍほどに収まり、住居跡の周辺に貯蔵穴が10数基営まれる。径50ｍ前後の範囲を占有する住居群からやや離れた箇所に貯蔵穴のみが営まれることもあり、これらの貯蔵施設は集落構成の最小単位である１～３棟の住居を単位として確保されていると想定した。Ｃ類型は単なるＡ・Ｂ類型の集合体ではなく、径50ｍ前後の範囲を超え、全体を一つの単位と捉えられる住居群とする。例えば、前期末の一ノ口遺跡Ⅰ地点は、南北200ｍ、幅30～40ｍの丘陵平坦面を囲繞する柵列内に、集落出入り口付近の施設群、一時期５～６棟のＣ型住居群、柵列内をさらに区画した一時期２～３棟のＢ型住居群で構成される。Ｃ型住居群は生産と供給の集約化を図るため近親者関係を再編・拡大させた、遺跡群内で中心的な役割を担っていたものと推定する。また、この柵列を大規模環濠と読み替えた場合、福岡市板付遺跡や同那珂遺跡37次調査の環濠も同規模であり、同様の内部構造を持つ可能性を類推し、前期～中期初頭における大規模環濠を中核とする遺跡群の様相を示した［田崎1987・88・2008］。また、近年蓄積のみられる発掘調査成果および遺跡分布の分析から「遺跡群（集落または村落）―集落遺跡（小村またはムラ）―住居群」の空間構成を整理した［田崎2008］。

筆者はこれらの住居群が数単位確認される独立丘陵、「集落遺跡」がまとまって変遷することを明らかにし、「集落群」と仮称した（山崎2010）。すなわち、当地域では段丘裾に進出した地域開発の拠点的集落が「母村―分村」関係を軸に、谷筋を共有しながら前期中頃から中期前半にかけて、丘陵上に変遷していく様子が窺えるが、その一連の集落遺跡のまとまりを「集落群」と呼称した（第30図）。三国丘陵には、このような一定のまとまりを持ちつつ変遷する「集落群」が複数存在し、弥生文化着床以降の人口増加は当初、それぞれの「集落群」領域内の人口密度を高める方向で進み、前期末～中期初頭に至っては、拡大した「集落群」領域（人口増加）によって地域社会のストレス・調整規模が増大し、中期前葉以降「集落群」領域の再編が広く行われる（山崎2010）。三沢遺跡で先に示された近隣丘陵間で結合する姿は実はこの近年の成果を基礎とした集落動態と同じくするものである。

三国丘陵におけるこの「集落群」変遷のありようは、単位集団論との関係では、「拠点―周辺集落関係は母村―分村関係を根拠として形成され、それが安定的である」という仮説は三国丘陵では見出しがたいことになる。確かに力武内畑遺跡は地域開発の拠点となった集落であるが、継続せず、拠点―周辺集落の関係性が現れてこない。母村―分村関係を持ちつつ、集落群は変遷・変化を繰り返すが、その関係が拠点―周辺の関係に固定化されるのではなく、等質的な集団関係が維持されているように思う。これについては、当地域における環濠の評価を先に行ったことがある（山崎2010）。弥生時代前期には周辺集落が共同で農耕にあたり、その生産物を共同で管理するあり方が看取され、貯蔵穴管理用環濠はその具体像を端的に示すものと位置付けた。

次に三国丘陵立地弥生時代前半期集落の水田耕作地について、近年の成果をもとに復原してみよう。遺構として明らかな弥生水田は、三沢公家隈遺跡の弥生時代前期中頃～中期初頭の谷水田（片岡2001）、力武内畑遺跡の段丘裾部付近の弥生時代前期井堰・水路・水田（山崎2004）、弥生時代中期前半の津

古大林遺跡の水田、水路（片岡1994）等があげられる。その他、三沢蓬ヶ浦遺跡の畠状遺構もみられる（片岡・杉本・山崎2004）。いずれも、小規模な水田で、沖積地付近に位置する力武内畑遺跡の水田も井堰の構造理解から大きく広がらないと考えている。また、谷水田については、全ての谷部が水田化されるのではないことが、三沢北中尾遺跡11地点の調査、および自然科学的分析により明らかである（山崎・廣木2006、山崎2007）。

これまでの調査成果から、三国丘陵における水田や畑の生産地はいずれも小規模・分散的な姿を示している。一部には井堰を伴う小規模な灌漑水田の経営も確認されるが、大規模集約的な水田経営ではない。ただ、単位集団論当時に想定されていた谷水田の構造と、現在明らかになってきた谷水田や初期水田の構造理解は異なるものであろう。当時は「水稲栽培の初期における低位な段階」で、谷水田や初期の水田は「自然灌漑というよりも自然の状態において湿潤な土地に、稲を栽培した」段階と考えられていた（近藤1962）。実際の姿は、小規模ながらも、水路・畦畔・井堰を伴うもので、また谷水田では水路や溜め井、畦畔、杭列など、天水田利用ではなく、完成されたシステムのなかで営まれたものである。少数の集団での開発や経営は難しいものと思われる。

三国丘陵の弥生時代前期社会を集落動向から推定すると、各独立丘陵に立地する周辺集落が共同で農耕にあたり、その生産物を共同で管理するあり方が看取される。特に貯蔵穴管理用環濠はその具体像を端的に示すものであろう。今後、単位集団論を超えて、議論が深化されるべきである。

Ⅳ．これからの三沢遺跡

三沢遺跡はこれまでに本格的な発掘調査はなされていない。

40年前の調査では、当時の単位集団論により三沢遺跡が評価された。また、近年までの周辺の大規模開発により、集落群の動向が明らかになりつつある。それをもとにした近年の集団論と単位集団論とでは異なる見解が生まれつつある。

このような、弥生時代の集団論、集落論に大きな影響を与え続ける三沢遺跡の価値は保存されることによって、さらに増して、生き続けるであろう。

当地域の弥生集落像は弥生時代の農耕集落が定着し、発展する過程を具体的に示すことのできるものとして知られている（橋口1985、田崎1988・89・90、片岡2003、山崎・杉本・井上2005、山崎2010ほか）。これらは、周辺の大規模宅地造成を代償に得られた大きな成果である。そのなかで、現在も保存されている三沢遺跡は、遺跡の価値は言うまでもなく、これまでの遺跡保存の精神を後世に伝え、また、宅地のなかにある憩いの場としての緑地、宅地開発前の丘陵景観を伝えるものとしても重要である。今後、保存された遺跡や緑をどのように都市空間のなかで生かしていくかが重要な課題となるであろう。

〈謝辞〉

平成22年度の確認調査においては、小郡市文化財保護審議会　記念物部会の小田富士雄先生、西谷正先生、田中正日子先生に指導・助言を受けた。特に西谷先生からは、ご自身の調査時のお話も伺うことができた。また、三沢遺跡の確認調査ならびに予備調査資料の見学・調査等に関しては、福岡県教育庁　小池史哲氏、吉村靖徳氏、杉原敏之氏、齋部麻矢氏、大庭孝夫氏のお世話になった。記して、感謝申し上げる。

【参考文献】

磯　望1999「第一章　四　地形と旧石器時代遺跡」『筑紫野市史通史編』上巻　筑紫野市史編纂委員会
小澤佳憲2002「弥生時代における地域集団の形成」『究班』Ⅱ　埋蔵文化財研究会
小澤佳憲2008「集落と集団１－九州－」『集落からよむ弥生社会』弥生時代の考古学８　同成社
小澤佳憲2009「北部九州の弥生時代集落と社会」『縄文・弥生集落遺跡の集成的研究』国立歴史民俗博物館研究報告第149集
小田富士雄1990「弥生集落遺跡の調査と保存問題－福岡県・一ノ口遺跡をめぐって－」『古文化談叢』第22集　九州古文化研究会
鏡山猛1956～1959「環溝住居址小論（一）～（四）」『史淵』第67・68・74・78
片岡宏二1994『津古遺跡群Ⅱ』小郡市教育委員会
片岡宏二2001「三沢公家隈遺跡」『三沢蓬ヶ浦遺跡２』小郡市教育委員会
片岡宏二2003「水田稲作農耕の定着と展開－三国丘陵における弥生時代前期社会の諸問題－」『三沢北中尾遺跡１地点環濠編』小郡市教育委員会
片岡宏二・杉本岳史・山崎頼人2004『三沢蓬ヶ浦遺跡３地点』小郡市教育委員会
近藤義郎1959「共同体と単位集団」『考古学研究』21
近藤義郎1962「弥生文化論」『岩波講座　日本歴史』１　岩波書店
下條信行1986「北部九州の水稲耕作」『岩波講座日本考古学』５　岩波書店
下山正一1999「第二節　三　台地の地質」『筑紫野市史通史編』上巻　筑紫野市史編纂委員会
高倉洋彰1973「墳墓からみた弥生時代社会の発展過程」『考古学研究』20　考古学研究会
高倉洋彰1975「弥生時代の集団組成」『九州考古学の諸問題』
武末純一1990「北部九州の環溝集落」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会
田崎博之1988・89・90「土器と集団（一・二・三）－弥生時代の集団関係－」『九州文化史研究所紀要』第33 34・35号　九州大学九州文化史研究施設
田崎博之2008「弥生集落の集団関係と階層性」『考古学研究』55-3　考古学研究会
田中良之1991「いわゆる渡来説の再検討」『横山浩一先生退官記念論文集Ⅱ　日本における初期弥生文化の成立』文献出版
都出比呂志1970「農業共同体と首長権」『講座日本史』１　東京大学出版会
都出比呂志1989『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
寺沢薫2000『日本の歴史02　王権誕生』講談社
西谷正編1971『福岡県三沢所在遺跡予備調査概要』福岡県教育委員会
西谷正1996「三沢種畜場遺跡」『小郡市史』第４巻　小郡市史編集委員会
橋口達也1987「集落立地の変遷と土地開発」『東アジアの考古と歴史』中　岡崎敬先生退官記念事業会
橋口達也2007『弥生時代の戦い－戦いの実態と権力機構の生成－』雄山閣
速水信也1994「一ノ口遺跡Ⅰ地点の弥生時代集落」『一ノ口遺跡Ⅰ地点』　小郡市教育委員会
福岡県教育委員会1977『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査概報（総輯編）』
溝口孝司2008「弥生社会の組織とカテゴリー」『集落からよむ弥生社会』弥生時代の考古学８　同成社
宮小路賀宏・片岡宏二1984『三沢蓬ヶ浦遺跡』福岡県教育委員会
山崎頼人2004『力武内畑遺跡７』小郡市教育委員会
山崎頼人2006a「筑後地域における弥生集落の成立と展開」『弥生集落の成立と展開　第55回埋蔵文化財研究集会発表要旨集』埋蔵文化財研究会
山崎頼人2006b「筑後北部三国丘陵における弥生集落の成立と展開－特に環濠を持つ集落の構造について－」『弥生集落の成立と展開　第55回埋蔵文化財研究集会発表要旨集』埋蔵文化財研究会
山崎頼人2007『三沢北中尾遺跡11Ｂ地点』小郡市教育委員会
山崎頼人2009a「北部九州における弥生時代のイエとムラ」『石川県埋蔵文化財情報』第21号　（財）石川県埋蔵文化財センター
山崎頼人2010「環濠と集団―筑紫平野北部三国丘陵からみた弥生前期環濠の諸問題―」『古文化談叢』第65集（２）九州古文化研究会
山崎頼人・杉本岳史・井上愛子2005「筑後北部三国丘陵における弥生文化の受容と展開－三国丘陵南東部遺跡群をケーススタディとして－」『古文化談叢』第54号九州古文化研究会
山崎頼人・廣木誠2006『三沢北中尾遺跡10Ｂ地点』小郡市教育委員会
和島誠一1948「原始聚落の構成」『日本歴史学講座』

付編　三沢北中尾遺跡 2b 区127号土坑出土銅斧について

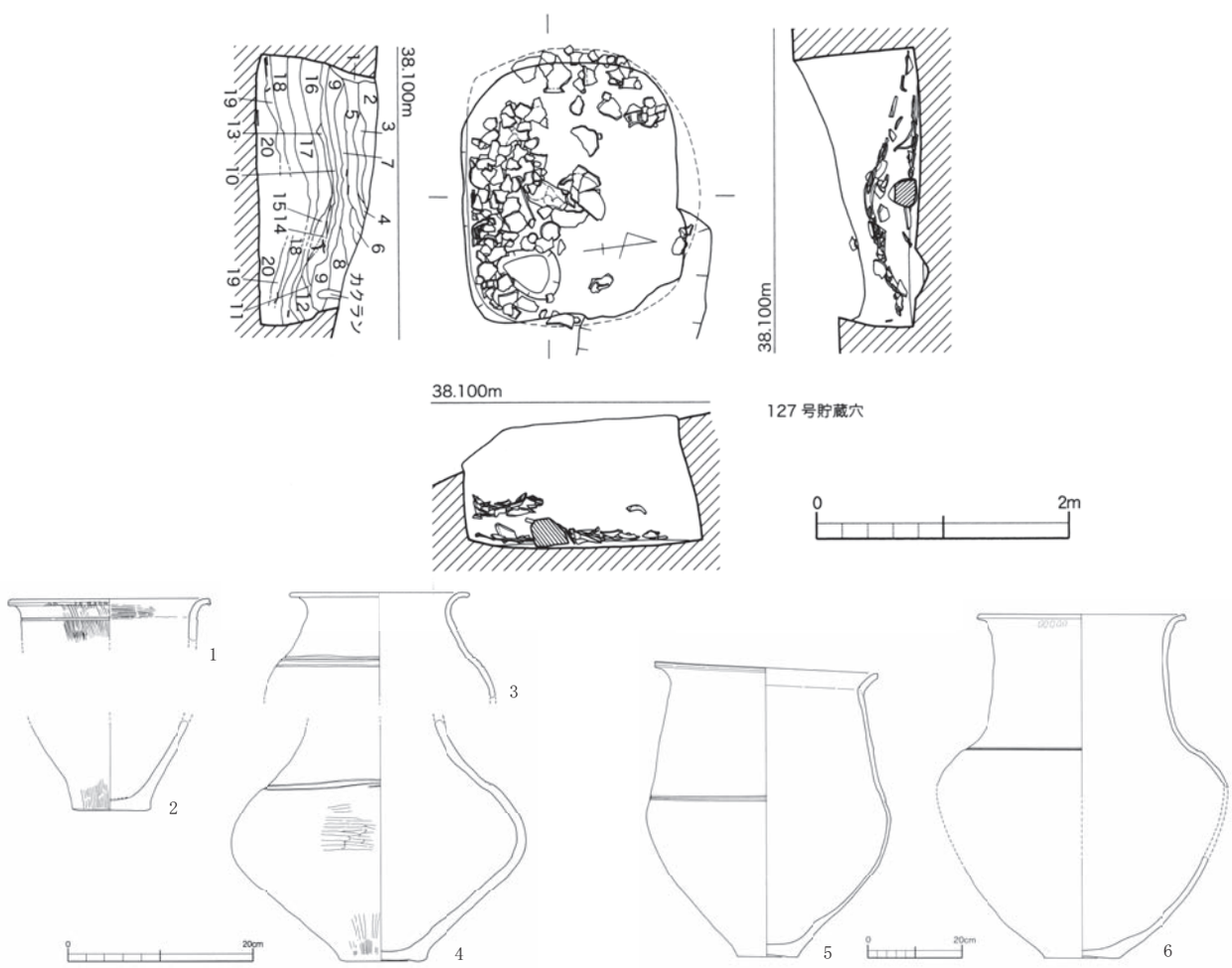
三沢北中尾遺跡２地点については、既に報告書が刊行されている（小郡市文化財調査報告書第209集　2006）が、このたび、九州歴史資料館の協力により、2b 区127号貯蔵穴から出土した青銅製品についての科学的調査を行うことができた。ここに報告を行う。

Ⅰ．出土遺構について

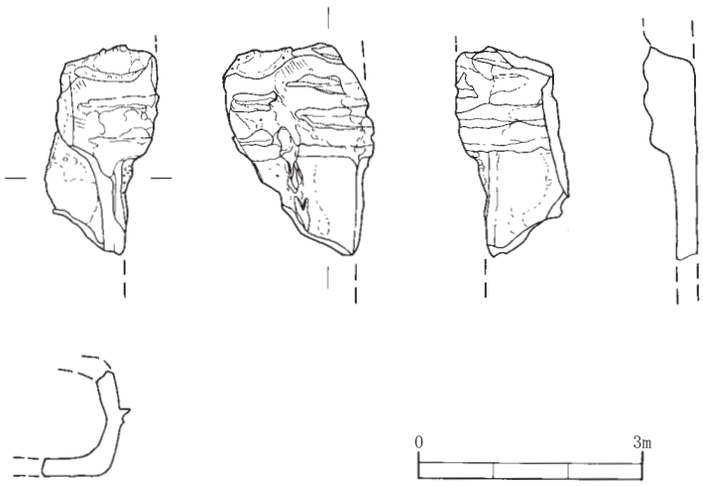
127号貯蔵穴は丘陵頂部平坦面から南側斜面の変換点付近に位置する。126号土坑に北西側を切られている。検出面の上端は長軸2.16ｍ×短軸1.69ｍの長方形プランを呈し、主軸をＮ－83°－Ｗにとる。床面は長軸2.18ｍ×短軸1.76ｍ、深さ1.0ｍを測る。壁面はフラスコ状を呈し、床面南東隅付近に小穴を有す。床上20㎝～40㎝にかけてと床面直上から多くの土器と石が出土している。堆積状況は下半部まで中央付近が高い堆積で、土器の廃棄状況も中央部分がやや高く、土層の堆積状況と同傾向を示している（第１図）。銅斧片の出土状況、出土層位については、詳細はわからない。(註１)

Ⅱ．共伴遺物について（第１図）［報告書再録・一部加筆］

１は如意形を呈す甕口縁部である。短く外反する如意形口縁の下端のみに刻みが施され、口縁下には１条の沈線がまわる。２は甕底部である。平底でしっかりとした成形をしている。３は壺の胴部中位以上である。器壁はうすく、口縁は大きく緩やかに外反する。頸胴部境には３条の沈線がまわる。４は壺の頸部以下である。胴部最大径がかなり外に張って胴頸部境には２条の沈線がまわる。５・６



付編第１図　三沢北中尾遺跡 2b 区 SK127遺構平断面図・出土土器実測図（既報告分）



付編第２図　三沢北中尾遺跡 2b 区 SK127出土銅斧実測図（S=1/1）

は大型壺である。５は完形品、６は胴部中位を欠くが、胴部中位以上と底部周辺が同一個体である。５はすでに頸部と胴部の境が明瞭でなくなり、そこに２条の沈線がある。口縁は擬口縁の外側から貼り付けられているが、その境には明瞭な区別がない。一方、６のほうは胴部と頸部の境に明瞭な区別があって、大きくくびれ、そこにやはり２条の沈線がある。また、口縁部も外側からの貼り付けがなされ、口縁下の口縁と頸部の境が肥厚して古い様相を呈している。このほか、甕口縁・甕底部・壺口縁・壺底部・甑底部・小形甕などの破片が約100点出土している。共伴土器の時期は板付Ⅱa 式新段階から板付Ⅱb 式古段階である。

Ⅲ．銅斧片について（第２図）

銅斧は、破片資料であり、全体形状をよく遺していない。腐食が著しく、破断面は粉状、淡いエメラルドグリーン色を呈していた。現状を保つために、パラロイドB72　５％溶液を筆で浸透させて仮強化を行った。なお、表面に付着した錆は土と一体化しており、可能な範囲でしか除去していないがX線CT 撮影を行い、詳細な観察を行った。

本例は袋部の基部付近の破片資料と考えられる。現状で袋部基部に２条ないしは３条の節帯（突線）が確認できる。鋳型のＡ面とＢ面で突線がつながらず、不整合となっている。身部にはバリが残っている。基部端は破損後一部研磨されており、擦痕が確認でき不自然な面を持っている。また、突線部分の破断面も二次的に研磨され、面を持っている。基部端はそのため、不自然な面を持っている。インゴットとしての流通も考えられる。長さ2.8㎝、幅1.5センチ、厚さ1.4㎝を測る。

平面形状、袋部の装飾の有無、断面形状から考えて、後藤直氏の銅斧分類の長方形斧Ｂ類（第４図８・９）に相当すると考えられる（後藤1996）。

Ⅳ．銅斧出土の意義

銅斧は中国東北部から朝鮮半島に多く分布するが、今までのところ、日本列島内における銅斧の出土例は非常に少ない。佐賀市本村籠遺跡２号甕棺出土例（金海式）と可能性が指摘されている糸島市石崎曲り田遺跡例がある。いずれも刃部の資料であり、袋部の出土はこれまでにないようである。

本例は舶載品と考えられるため、朝鮮半島南部の青銅器編年との関係性をみておきたい。武末純一氏は朝鮮半島南部の青銅器編年を１期～５期に設定している（第３図）。１期は遼寧式銅剣の時期、２期は細形銅剣が成立して多紐粗文鏡や異形銅器、小銅鐸などが組み合う時期である。３期古段階は新式の細形銅剣や、細形で無文の銅矛・銅戈が加わり、多紐細文鏡や鉇・有肩斧・鈴類もみられる時期、３期古段階は、鋳造鉄器の有無によって、さらに前半と後半に分けられる。３期新段階は有文の

銅矛・銅戈や長鋒の銅戈が現れ、前漢前期の鏡もみられる時期、４期は前漢後半の鏡に末期の細形銅剣や変形細形銅戈、車馬具が伴い、鉄器が主体をなす時期、５期は細形銅剣のほかに変形細形銅剣や変形銅矛、後漢鏡がみられ、細形銅剣文化の終末期として区分している（武末2003）。１～３期が無文土器時代（３期古段階後半が無文土器時代後期の水石里式の最末期）とし、４・５期は原三国時代に相当する。

銅斧は１～３期に属し、本例は２期の指標となる大田槐亭洞遺跡段階より新しく、３期の指標となる九鳳里遺跡段階、３期古段階前半に相当すると考えられる。

付編第３図　北部九州と朝鮮半島南部の併行関係（武末2004）

３期古段階前半は鋳造鉄器出現以前の資料群である。日本列島で出現した鋳造鉄器は、近年の見直しにより、弥生時代前期末～中期前半に属する鋳造鉄斧の破片や再加工品であり、戦国時代後期の燕から韓半島西北部一帯の鉄器の系統と考えられるようになった（野島2008）。

本例は、朝鮮半島南部青銅器編年３期古段階前半の資料が北部九州において、板付Ⅱa式新段階～Ⅱb式古段階の土器と共伴する事例として重要な資料である。

近年における金海式甕棺や前期末～中期初頭の土器編年の再検討によって、細形銅剣・銅矛・銅戈・多紐細文鏡の舶載や各種青銅器の鋳造開始が前期にまで遡るかが疑問視されるようになり（横山・力武1996、常松1998など）、青銅器の出現も中期初頭以後に繰り下げる研究動向が趨勢となりつつあるが（吉田2008）、金海式甕棺の初現、青銅器の副葬は前期末に遡るとする従来の見解を本例は支持する例となろう。今後も議論が必要であり、また、交差年代を深めていく必要がある。今回は、筆者の力量不足・紙幅の関係から弥生時代の年代論について詳しく触れていないが、別の機会を持ちたい。

（註１）ラベル内容から追跡すると、床上40㎝以下でまとまって出土した土器の取上げが2002年３月７日～３月19日、銅斧の出土は2002年２月15日である。SK127の出土土器の初出時期が２月12日であるので、遺構半裁時に出土したと考えられる。なお、土層断面図の実測日や撮影日はわからない。床上の土器群が廃棄された段階に確実に共伴したとは言えないが、作業の時間的経過からその土器群と近い段階で出土した可能性が高い。

[参考文献]
石川日出志2010「弥生時代青銅工具の稀少性をめぐる諸問題」『釜山大学校考古学科創設20周年記念論文集』
岩永省三2005「弥生時代開始年代再考」『九州大学総合研究博物館研究報告』第３号
武末純一2004「弥生時代前半期の歴年代」『福岡大学考古学論集』小田富士雄先生退職記念事業会
武末純一2011「弥生時代前半期の歴年代再論」『AMS 年代と考古学』学生社
常松幹雄1998「甕棺の変遷と終焉」『弥生人のタイムカプセル』福岡市博物館
野島永2008『弥生時代における初期鉄器の舶載時期とその流通構造の解明』平成17～19年度科研費基盤研究（c）研究成果報告書　広島大学文学科
藤島志考2008「二丈町の弥生時代遺物－特に青銅利器・農耕具を中心として－」『七隈史学』第10号
横山邦継・力武卓治1996『吉武遺跡群Ⅷ』福岡市埋蔵文化財報告書第461集
吉田広2008「日本列島における武器形青銅器の鋳造開始年代」『東アジア青銅器の系譜』雄山閣

1：朝陽洞，2：南城里，3：如意洞，4：土城里，5：丁峰里，6：義州郡，7：美松里，8・19：九鳳里，9：菊隠蒐集品，10・18：松山里，11：狐山里，12：順安，13：草浦里，14：西辺洞，15：伝公州，16：大谷里，17：伝慶州，20：湖巖美術館蔵

付編第４図　朝鮮半島出土銅斧類例（藤島2008）

［謝辞］　銅斧資料については、小田富士雄先生、武末純一先生、李昌熙氏、片岡宏二氏に実見して頂き、ご教示を賜った。武末先生からは、文献収集についてもご協力頂いた。銅斧のＸ線写真撮影については、九州歴史資料館　加藤和歳氏にご指導頂いた。記して、感謝申し上げます。

写真図版

三沢遺跡（南から・1968年に撮影　西谷正氏提供）

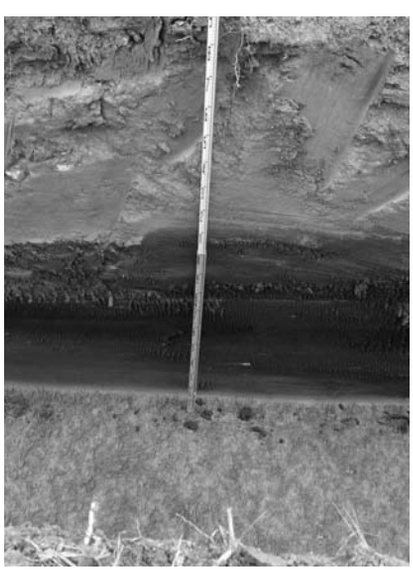
20-1トレンチ（南から）

20-2トレンチ（北東から）

20-2トレンチ詳細（南東から）

20-3トレンチ（北から）

20-4トレンチ堆積状況（西から）



20-4トレンチ（北から）

20-5トレンチ（西から）

20-5トレンチ詳細（北西から）

20-6トレンチ（南西から）

20-7トレンチ（南西から）

20-7トレンチ詳細（南西から）

20-8トレンチ（西から）

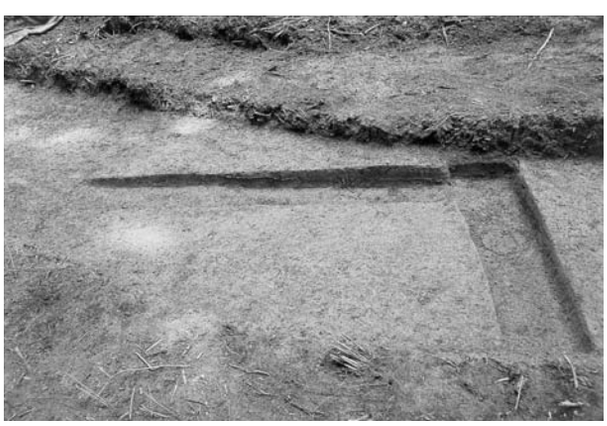
N1トレンチ頂部側（南東から）

N1トレンチ谷部側（北西から）

調査地遠景（西から）

N1トレンチ SC01（南東から）

N1トレンチ SC01土層（西から）



N1トレンチ SC01土層（南から）

N2トレンチ（北東から）

N2トレンチ（西から）

N3トレンチ（北から）

N3トレンチ詳細（北から）

N3トレンチ SK01半裁（東から）

N3トレンチ SK02半裁（東から）

N4トレンチ（北から）

N4トレンチ段状遺構（北西から）

N5トレンチ（北東から）

C1トレンチ（北西から）

C1トレンチ（東から）

C1トレンチ落込み（西から）

C2トレンチ（西から）

C2トレンチ詳細（北西から）

C3トレンチ（西から）

C4トレンチ（西から）

C5トレンチ（西から）

C5トレンチ SK01半裁（南から）

C6トレンチ（東から）

C9トレンチ詳細（北から）

C7トレンチ（東から）

C9トレンチ（西から）

C8トレンチ（東から）

C8トレンチ（西から）

C10トレンチ（西から）

S1ａトレンチ（東から）

S1ａトレンチ丘陵肩部（西から）

S1ａトレンチ斜面部（西南から）

S1ａトレンチ谷部から（南西から）

S1ａトレンチ頂部（南西から）

S1a トレンチ SC01（西から）

S1a トレンチ肩部ピット（北から）

S1a トレンチ SD01（南から）

S1b トレンチ頂部付近（南東から）

S1b トレンチ中腹付近（南から）

S1b トレンチ谷部付近（南から）

S1b トレンチ上段付近（南西から）

S1c トレンチ頂部（北東から）

S1b トレンチ SK01（南から）

S1c トレンチ頂部（南から）

S1b トレンチ SK01（東から）

S1c トレンチ SK01（西から）

S2トレンチ（南から）

S3トレンチ（南西から）

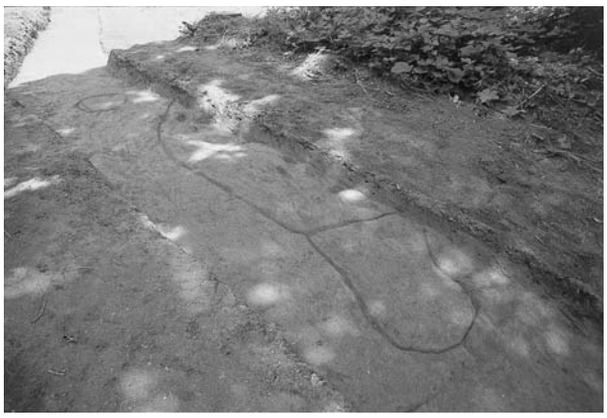
S4トレンチ頂部（北西から）

S4トレンチ斜面（南東から）

S4トレンチ SK01（南西から）

S4トレンチ SC （北西から）

S4トレンチ谷部付近（南東から）



S4トレンチ中段詳細（南から）

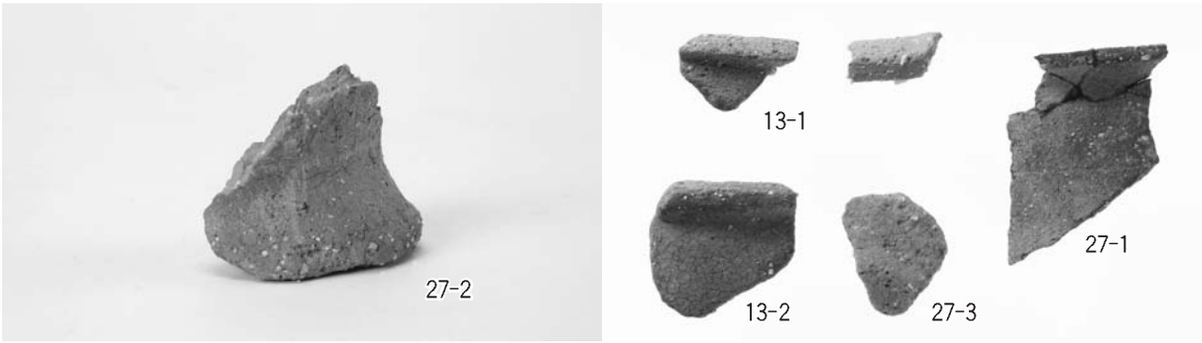
S5トレンチ（南西から）

調査前頂部付近（西から）

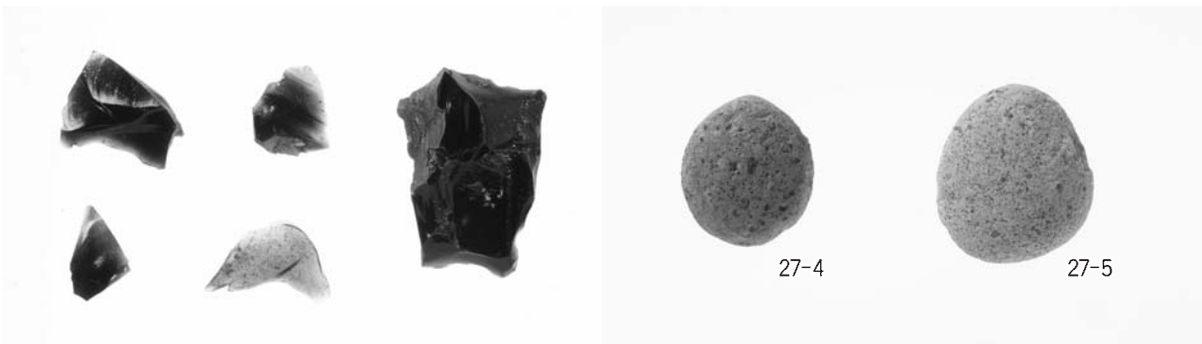
頂部付近調査風景（西から）

頂部付近埋め戻し状況（西から）

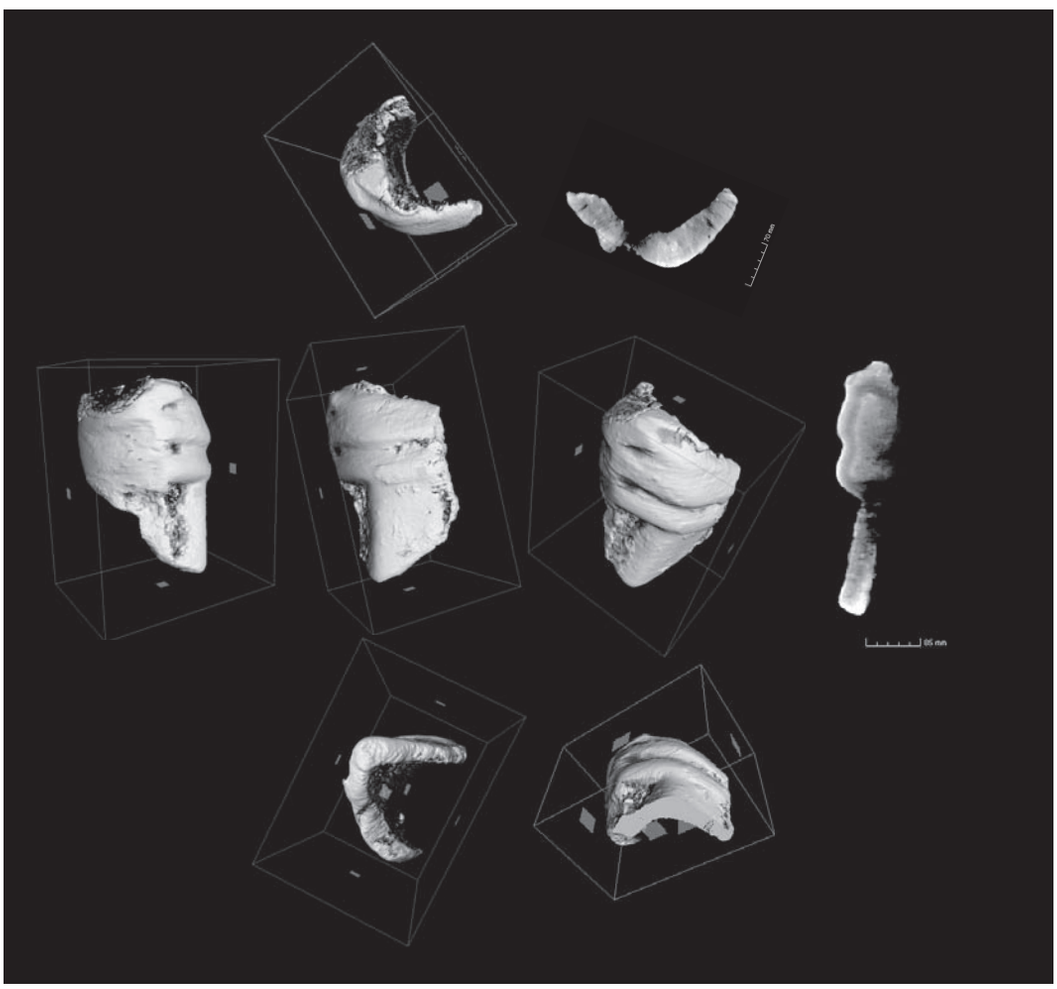
図版13



三沢遺跡出土土器類



三沢遺跡出土石器類



三沢北中尾遺跡 2b 区 SK127出土銅斧 X 線 CT画像

報　告　書　抄　録

ふりがな	みつさわいせきかくにんちょうさ
書名	三沢遺跡確認調査
副書名	簡保レクセンター跡地Ａ地区の内容確認調査
巻次	
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書
シリーズ番号	第266集
編著者名	山崎頼人（編集）・片岡宏二
編集機関	小郡市教育委員会　小郡市埋蔵文化財調査センター
所在位置	〒838-0106　福岡県小郡市三沢５１４７－３　　TEL0942－75－7555
発行年月日	平成24年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（しょざいち）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
三沢遺跡（みつさわいせき）	福岡県（ふくおかけん）小郡市（おごおりし）三沢（みつさわ）地内	40216	02033	33°26′10″	130°33′60″	20090325	160.45㎡	試掘調査
						20100622～20100904	653.4㎡	確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三沢遺跡（みつさわいせき）	集落	弥生時代	竪穴住居 貯蔵穴・土坑 溝・段状遺構	弥生土器・石器	県指定三沢遺跡と同様の遺跡である

要約	当該地は、確認調査により判断される遺構の時期・性格から県指定三沢遺跡（昭和53年指定）の一部を構成する遺跡であることが判明し、学術的には、県指定三沢遺跡の指定理由である『弥生時代集落構造・初期農耕村落の生活様式を具体的に解明する貴重遺構である』という要件をもって、本来県指定三沢遺跡と一連のものとして現地保存すべき遺構である。

三沢遺跡確認調査

小郡市埋蔵文化財調査報告書第266集

平成24年３月31日

発行　小郡市教育委員会
小郡市小郡255-1

出版　久野印刷株式会社
福岡市博多区奈良屋町3-1